

弘前大学大学院地域社会研究科  
(後期博士課程)  
学位論文

知的障害者スポーツにおけるマネジメントモデル構築に関する研究  
—若年層ボランティアの活動継続性向上を企図して—

主指導教員：准教授 増田 貴人  
副指導教員：教授 北原 啓司  
副指導教員：教授 佐々木 純一郎

弘前大学大学院地域社会研究科  
地域社会専攻地域政策研究講座

11GR103

大山 祐太 Yuta OYAMA

平成 29 年 3 月

## 目 次

### 第一章 研究の背景と目的

第一節 知的障害者にとってのスポーツの意味	1
第二節 知的障害者スポーツがかかえる課題	4
第三節 ボランティア依存の現状と 若年層を焦点としたマネジメントの意義	7
第四節 理論的枠組み	12
第五節 本研究の目的	14

### 第二章 ボランティアはなぜ辞めるのか

第一節 スポーツ指導に伴う負担感	
第一項 調査の概要	16
第二項 人口統計学的属性	17
第三項 負担感の背景因子	19
第四項 負担感の強度－属性による差異－	20
第二節 抱える指導不安とバーンアウトのリスクの検討	
第一項 調査の概要	22
第二項 指導者としての不安	23
第三項 消耗感、達成感、脱人格化の実態	25
第三節 小括：若年層ボランティアの 離脱促進要因の解消に向けて	27

### 第三章 若年層ボランティアはいかにして継続参加に至るのか

第一節 若年層ボランティアの継続参加プロセス	
第一項 成功事例の抽出 －スペシャルオリンピックス日本・青森の事例－	29
第二項 継続参加プロセスの概要－ストーリーライン－	30
第三項 参加のきっかけは多様	31
第四項 雪だるま式に増大する「ポジティブ経験」と 「ネガティブ経験」－ジレンマ経験の蓄積－	32
第五項 指導者使命感の形成と それによる「レッテル評価」への不満	34
第二節 小括：若年層ボランティアの継続参加にむけた示唆	36

### 第四章 当事者が求めるボランティアの指導力

第一節 知的障害者本人の求める指導者像	
第一項 調査協力者と方法	38

第二項	当事者調査の意義	39
第三項	指導者に求める「快活さ」と「確かな指導力」	40
第四項	コミュニケートの場としてのスポーツ	43
第二節	知的障害者の保護者の求める指導者像	
第一項	調査協力者と方法	46
第二項	指導者に求める 我が子・障害・スポーツに関する理解と意欲	47
第三項	大学生に対する期待と懸念	49
第三節	小括：求められる「かかわりやすさ」と 「指導力の高さ」	55

## 第五章 若年層ボランティアの指導力の実際

第一節	スポーツ指導場面における指導力の発揮	
第一項	観察の対象	57
第二項	知的障害者から受ける権限・能力に関する評価	59
第三項	「挙動」によって発現する指導力	62
第二節	若年層ボランティアの指導者としての役割認識・ビジョン	
第一項	調査協力者と方法	66
第二項	伸ばしたい協調性・コミュニケート能力	67
第三項	「わかりやすさ」を重視した指導	68
第四項	専門外の指導をしている現状と不安、 専門性獲得のための努力	69
第三節	小括：ボランティアが重要視する諸条件と懸念	72

## 第六章 総括：知的障害者スポーツのマネジメント理論

第一節	モデルの提示	74
第二節	ボランティアの誘因と募集	75
第三節	スタッフとの最初のやりとり	77
第四節	ボランティアの活用と配置	78
第五節	活動後のフォローアップ	79
第六節	今後の課題	81

## 参考文献

# 第一章 研究の背景と目的

## 第一節 知的障害者にとってのスポーツの意味

近年、障害者権利条約批准に伴い、障害者の文化的活動や社会参加の重要性が指摘されている。特に「スポーツ」に関しては、「障害者白書」において「日々の暮らしの基盤づくり」の章で扱われている（内閣府,2013）ように、日々の生活と密接なかわりがある活動であり、社会的関心も高まっている。平成 23 年に施行されたスポーツ基本法の基本理念には、「スポーツは、障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない」と明記され、これまで厚生労働省の管轄であった障害者のスポーツ振興事業は、文部科学省に一元化された。2020 年には東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることもあり、今後一層、障害者のスポーツ振興に注力がなされ、障害者にとってスポーツが身近な活動となることが推察される。しかし、知的障害者の生活においてスポーツは重要な活動であるにも関わらず、リハビリテーションを起源とする身体障害者のスポーツに比べて普及振興が十分とは言えず、多くの課題を抱えている。まずは、知的障害者がスポーツをおこなうことの意義についてまとめたい。

知的障害者は、健常者と比べて身体発育が遅く最大発育量が少ないこと（石井,2000）や、体力が低い傾向にあること（金城・奥澤,2002. 木原・橋本 2000）など、発育発達上の課題を抱えている。しかし、特に憂慮される点としては、健常者よりも「肥満傾向」にある（原ら,2001. 我妻・伊藤,2002. 土屋ら,2004. 浜口,2006. 石倉・坂口,2009）という健康上の課題も抱えていることである。肥満は単なる体型の変化ではなく、健康状態が損なわれつつあることを示している。特に知的障害者における肥満は高度肥満が多く、Ⅱ型糖尿病、高血圧症、高脂血症などの生活習慣病が合併症として出現した場合、心臓血管障害や脳血管障害が引き起こされる危険性があり、知的障害者の急性死の原因に占める割合も高い（浜口,2006）ため、スポーツなどを通して適切に対処することが求められる。

原ら（2001）や浜口（2006）によると、知的障害の肥満は、知的障害の特性に起因するものと、知的障害の原因である基礎疾患の症状として発現するものがあり、具体的にみると以下の 5 つの要因が考えられる。

①肥満予防・治療にむけての意識・理解が乏しいこと、強迫観念・行動などからくるなおしにくい偏食があること、食べ物・食べることへのこだわりがあること、あまり咀嚼をしないで飲み込むことなどの、本人の食行動の異常の問題。

②家庭では食べ物が目に入ることが多くことや、パニックなどを起こした際食べ物を利用して收拾をはかる習慣があること、軽度から中度の知的障害の場合、自分で食べ物を調達できるため家族が管理しきれないといった、食環境の問題。

③家族自身肥満傾向の家庭では食事量の基準が多くなってしまうことや、家族が「(知的障害ゆえに) 食べることしか楽しみがない」「食事制限はかわいそう」という

想いでいること、家族の肥満からくる健康障害への理解が低いなどの、家族の姿勢の問題。

④運動発達の遅れや、筋緊張異常による運動の拙劣、飽きやすい・遊べる友人がいないなどの理由から運動への意欲を持続することが難しい場合があること、義務教育終了後の唯一の運動機会であった体育の授業がなくなることなど、運動量の不足の問題。

⑤ダウン症候群やプラダーウィリー症候群、ローレンス・ムーン・ビードル症候群など、肥満と知的障害を伴いやすい基礎疾患があり、内分泌異常などの合併症も生じやすいといった、基礎疾患の問題である。

知的障害者の肥満は上記のような様々な要因が影響しているため、食事療法や健康教育、医療的なケア、運動療法といった本人への直接的指導から、家族・学校が連携して肥満解消を目指すという周囲の環境作りなど、複合的な方法が実施されている(原ら,2001)。

北川(1985)はトレーニングの方法にもよるが、運動は、身体組成や体重に影響することは確かであると述べている。ただし、例えば局所での筋運動によるトレーニングは、その部位に表在する皮下脂肪を減少させないことなどから、トレーニングプログラムが適切である必要性にも言及している。原(2006)は、運動指導にあたっては、適切な動機付けを行い対象児の準備性に応じた指導をすることが重要性であると指摘し、小児肥満に対する運動療法を成功させるには、保護者の協力や運動の重要性に対する社会の理解も不可欠であると述べている。また、具体的な方法として、知的障害者の肥満の予防・改善には、筋力・筋持久力を高める運動によるエネルギー消費量を高めることが効果的であることも示唆されている(土屋ら,2004)。さらに、知的障害者にスポーツと競技会の機会を提供する国際的組織であるスペシャルオリンピックスも、知的障害者は肥満傾向にあることを強調し、高度肥満からくる重大な危険な疾患が懸念されることから、参加者に検診と健康への意識付けを行うプログラムも提供している(Special Olympics Inc, 2001)。知的障害者の肥満の解消には、本人への指導のみならず、家族、学校や施設などの地域社会が一体となって問題に取り組む必要があり、そういった環境の中で適切にスポーツを行うことが重要であるといえる。

人間の体力を構成する筋力、敏捷性および持久性の三つの因子のうち、とくに全身持久性に貢献する心肺機能は、トレーニングにより改善し脱トレーニングにより機能低下するという可逆性があることから、機能の改善・維持には継続的な一定強度のトレーニング刺激が必要であるといえる(浅野,1985)。知的障害者は、前述したように、運動発達の遅れや、筋緊張異常による運動の拙劣、飽きやすい・遊べる友人がいないなどの理由から運動への意欲を持続することが難しいといった問題を抱えている。これらの理由で継続的な身体活動が行われないと、心肺機能は低下し、機能の低下に伴う疲労感からさらに運動に対して億劫に感じてしまうといった、悪循環が生じることが考えられる。

また、知的障害者は、余暇が限定的であるという課題も抱えている。生活の質

(Quality Of Life、以下 QOL) の高めるといえるのはすべての人にとって重要な視点であり、それは当然障害者にとっても同様である。これまでの日本の福祉は「生きる」ということに関する保障に力を注いでいたが、その後「よりよく生きる」ための支援にも関与するようになってきた(草野,2004)。「どうすれば障害者も生活することができるか」ではなく「障害者もよりよく生活するにはどうすればよいか」、つまり日常生活動作(Activities of daily living、以下 ADL) から QOL へと、動向が変容してきているといえる。

南條ら(2005)は、153名の知的障害児(者)を対象に、生活の質とスポーツ・レクリエーション活動の関連について個人面接法による調査を行った。ここでのスポーツ・レクリエーション活動とは、アメリカ・スポーツ医学会の基準を参考に「一回20分以上、週に3回以上」と規定されている。対象となった知的障害児(者)は、施設職員、学校職員の協力のもと、会話によるコミュニケーションが可能で、質問内容に対して適切な言語理解及び表現ができる軽度の知的障害児(者)が抽出されており、面接者はラポール形成のために事前に対象者の施設や学校に訪問している。調査の結果、生活満足度、社会参加・活動、自立・自由度について活動群の方が全体的に高い数値を示していた。また、金子・南條(2007)は、知的障害児者を対象としてインタビューを行い、スポーツ・レクリエーション活動が生活の質に及ぼす影響について調査した結果、活動群が非活動群よりも生活の質が高いという結果が得られていた。これらのことから、スポーツは知的障害者の余暇を充実させる有効な手段であることもわかる。

加えて、余暇における身体活動の実施は、うつ対策としても効果が期待されており(甲斐ら,2009)、も、種目如何にかかわらず快感情の改善に寄与していることを明らかにし、感情の改善が媒介となってストレスを低減させることを示唆されている(橋本ら,1991)。他にも適度な運動は記憶力を高め、自信をつけさせる効果があるという報告がある(原,2006)。一般的に障害児は自己肯定感が低い傾向にあると認識されている。それは周囲の期待や多くの健常者の活動可能な水準と、自らの実行能力とのずれから生じてしまうことが考えられるが、特に軽度の知的障害児の場合考慮すべき問題となっている。阿部・廣瀬(2008)は、軽度知的障害児は、障害ゆえに特別な配慮がなければ適切な愛着行動やソーシャルスキル、学習行動などを十分獲得できないという側面と、一見障害が軽度で言語使用にも大きな問題がないため保護者や周囲から過度に水準の高い要求をされるという側面の二つの相互作用により、子どもは失敗経験を重ね、不安が高くなり、自信を失い、自己肯定感を低下させると述べている。また、現在175の国知地域において活動が展開されている、知的障害者スポーツの組織であるスペシャルオリンピックスも、知的障害者がスポーツ活動を通じて、友情を分かち合い、自信を高め、社会に参加することを理念として掲げている(スペシャルオリンピックス,2006)。本来人間の基本的な行動原理は「快を追い求め」「不快を避ける」ことにあると解釈でき、快を体験するのに最も適しているのが、ランニングやサイクリング、ダンスなどできるだけ自分の気ままにできる運動であるという(朝比

奈,1985)。これらのことから、知的障害者がスポーツに取り組むことで爽快感を得たり、自信を高めることができれば、より生き生きと日々の生活を営むことを可能とすると考えられる。

さらに、知的障害者に限らないが、全ての人にとって発達的な観点からみてもスポーツのような身体活動を伴う活動の重要性は強調されるべきものである。Winnick (1992) は、全面的な発達を構成する発達の領域として、静的筋力・瞬発力・心配持久力などの『身体』、移動性運動・非移動性運動・バランス運動からなる『運動』、視知覚・聴知覚・ハプティック知覚からなる『知覚』、言語概念・数概念・科学概念からなる『学習能力 (教科)』、そして認知や表現・社会的相互作用などの『認知』を挙げた。同時に、これらの領域はそれぞれが独立した存在であるのではなく、直接的にも間接的にも、関係しあったり影響しあったりしているものであると述べている。つまり、身体を動かすということは、動かした身体部位の強度を高める・運動スキルを向上させるといった直接的な効果をもたらすとともに、他の発達領域にも影響し、延いては全体的な発達に繋がっていくことなのである。Bredekamp (1992) は、人間の発達領域において、運動発達や運動スキル学習はもっとも広く効果の確認・理解がされており、運動発達と他の発達や学習の領域との関連は、とりわけ幼児期において分離できるものではないとし、“Young children must learn to move, but they must also move to learn. (幼児は動くことを学ばなければならない、しかし彼らは、学ぶためにもまた動かなければならない。)” と述べている。

Harada & Siperstein (2009) は、知的障害者がスポーツ活動に参加する動機は楽しさと満足に基づいており、障害がない者と同様に、スポーツ活動が重要な生活経験であると述べている。前述したように、知的障害者にとってスポーツは、心身の健康維持だけでなく、余暇の充実や豊かな発達の促進など、多くの恩恵をもたらしてくれる活動であり、よりよく生きる手段のひとつと考えることができる。

## 第二節 知的障害者スポーツが抱える課題

知的障害者の余暇の活性化にも、肥満の解消や健康の維持、自己概念の形成などにも効果が期待できるスポーツ活動であるが、我が国の知的障害者の余暇の傾向としては、多くはテレビ観賞や音楽鑑賞など室内で過ごしており、運動・スポーツ活動の機会が多くない現状にあることが報告されている (高畑・武蔵,1997、石黒ら,1999、中山,2000)。長い歴史をもち、組織・活動面ともに充実をみせている身体障害者スポーツに比べ、知的障害者スポーツはいまだ理解・振興を最大限に推進していく段階にあるといえるだろう (能村,1998)。

ここで、現在までの知的障害者スポーツの動向について整理したい。障害者スポーツは機能回復を目的とした医学的リハビリテーションを起源とするが、現在ではその姿を大きく変え、障害者のスポーツ活動は大きく 3 つに分類することができる (陶山,2006)。第一に、障害された運動器官の機能回復や残存機能の向上、身体の機能的予備力の向上により、日常の身体活動の拡大および確立、社会生活への適応養成など

を目的とした「リハビリテーションスポーツ(医療スポーツ)」としての分類。第二に、心身の健康の維持・増進、心理的安定、仲間作り、社会参加など、生きがいと潤いのある豊かな社会生活を送ることを目的とする「生涯スポーツ(市民スポーツ)」としての分類。そして、パラリンピックなどに代表される、強さ・速さ・高さなどの記録への挑戦や、プレイヤー同士で競い合うことに意義を求める「競技スポーツ」としての分類である。

医学的リハビリテーションとして取り組まれた障害者スポーツ活動であるが、「障害者プラン～ノーマライゼーション7か年戦略～」において、ソフト面・ハード面ともに整備し障害者スポーツの振興を図ることが明記され、2002年に策定された「重点施策実施5か年計画」においても、生活支援という括りの中でスポーツ活動の振興が謳われている。また、「障害者白書」の中でも、毎年、「スポーツ・文化芸術活動の推進」という項目が日々の暮らしの基盤づくりという章の中に盛り込まれていることから、障害者にとっての身体活動は自立・社会参加に繋がる大きな要因であることが窺える。しかしながら、長く社会的排除の対象となってきた障害者にとって、スポーツ活動に取り組むことの意義は認められながらも、「障害者がスポーツに親しみ、喜び楽しむ」ことの権利の享受に対する社会的認知や理解は歴史的にも浅く、支援体制や受け皿がまだまだ少ないのが現状である(渡邊,2006)。とりわけ、身体障害者スポーツに比べ知的障害者スポーツにおいてはその傾向が強い。

藤田(2008)は、日本における障害者スポーツの歴史を、4期に分けて説明している。まずは、国際ストークマンデビル競技大会への参加、東京パラリンピックの開催、(財)日本障害者スポーツ協会の設立、第1回日本車椅子バスケットボール選手権大会開催など、今日まで障害者スポーツの普及発展をリードしてきた重要な団体の組織化され、その基礎が作られた時期である①障害者スポーツの基盤形成期(~1975年)。チェアスキーや視覚障害者のマラソン・柔道、車いすテニスなど様々な障害者スポーツが紹介され、実施されるようになり、その普及・多様化を支える指導者の育成が本格的に始まった時期である、②障害者スポーツ種目普及期(~1990)。長野パラリンピック開催を機に、ジャパンパラリンピック開催など選手強化が本格的に始まり、また、メディアでも障害者スポーツをスポーツとして扱い始めた、③競技志向化期(~1998)。そして、(財)日本身体障害者スポーツ協会が、(財)日本障害者スポーツ協会となり、身体・知的・精神障害を統合的に扱われるようになり、第1回全国障害者スポーツ大会が開催されるなど、統合化と競技の高度化が推進した、④高度化・統合化期(1998~)である。

ここでも確認できるように、知的障害者スポーツが注目され、その推進が図られるようになったのは近年になってからである。②種目普及期に、知的障害者のスポーツ大会が各地で開催されるようになってはいるが、各都市や民間レベルでの開催に留まり、全国的な動きとなるには至っていない。国が施策として知的障害者スポーツを推奨し始めたのは1990年代に入ってからであり、これ以前は民間団体が中心となり推進してきたのだが、当事者運動としての推進がみられた身体障害者スポーツに対し、



知的障害者は自らの意思や考えを訴えることが困難である場合が多いため、当事者運動としての推進も難しかったことが推測される（渡邊,2006.）。

望月（2007）は、経済的要因、施設などの物的環境要因、指導者などの人的環境要因によって、障害者はスポーツ活動への参加が妨げられていると指摘している。この三点について知的障害者に該当するようまとめると、下記の通り概説できる。

①経済的要因：「平成17年度知的障害児(者)基礎調査結果の概要」(厚生労働省,2007)によると、月の給料が「ない」と「1万円まで(1万円以内)」である知的障害者は48.2%とほぼ半数であり、障害の程度による内訳は、軽度が17.2%、中度が27.6%、重度が32.8%、最重度が13.2%、不詳が9.1%となっていた。知的障害者全体における程度の割合が軽度24.4%、中度25.5%、重度24.4%、最重度14.9%、不詳12.0%であったので、そこからすると、月1万円以下の給料は軽度の人割合が低く、重度の人の割合は高いことになる。重度知的障害者は付き添う介護者がいなければ外出できない場合が多く、余暇保障はガイドヘルパーなど社会福祉の領域を視野に入れて考えていく必要があるため（丸山,2004）、軽度の知的障害者より出費が多くなってしまいう重度・最重度の知的障害者にとっては、一層スポーツ活動への出費が難しくなっている。

②施設などの物的環境要因：障害者が利用できるスポーツ施設としては、障害者が優先的に利用できる専用施設としての建設がなされ、現在までにはほぼ各都道府県には1箇所以上の施設が設置されるに至った（望月,2007）。身体障害者と比較した場合、知的障害者（身体障害を重複しない）は物理的な制限が少ないようにも思える。しかし、望月（2007）は、施設が構造上障害者の利用が可能であるだけでなく、施設の管理者が障害の内容に対する正しい知識を持ち、障害者スポーツに対して理解がなければ、障害者の利用は困難であると指摘している。その具体例として『ダウン症の女性（当時16歳）が、1998年、民間のスイミングクラブへ入会しようとしたところ、「中学生以上の障害者は断っている。ダウン症の人は突然暴れることがあるので」という理由から入会を断られた』という例を紹介している。知的障害者自身は、スポーツ支援をしてくれる組織が少ないと感じている者が多いという実態（金子・南條,2007）もあり、次の人的環境要因も関係する問題でもあるだろうが、受け入れ先がない、または、あっても当人たちにその情報が行き届いていないことが考えられる。

③指導者などの人的環境要因：日本障害者スポーツ協会が障害者スポーツ指導者の養成に取り組み、障害者スポーツ指導員の登録者数は着実に増加しているが、未だ全ての障害者がスポーツに参加することを支えるだけの指導者数とはなっていない（望月,2007）。藤田（2004）は、全国の市の障害者スポーツ大会および教室・講座の担当組織に対して、障害者スポーツ関連の大会の開催状況、障害者スポーツ関連の教室や講座の開催状況、それらに対する障害者スポーツ指導者の関わり方の実態、その可能性に関するアンケート調査を行っている。その結果、障害者スポーツ指導者の存在の

認知度が低いことや、障害者スポーツ指導者が障害者スポーツ関連の大会に組織的に関わっていない実態があること、障害者スポーツ指導者の関わりを推進するには、資金面の問題の解決や、調整・企画・運営等のマネジメント面の資質向上が必要であることなどが明らかとなった。安井（1998）も、地域の障害者スポーツイベントを開催する際、指導者の確保・育成が課題となり、特に在宅の障害者にとって指導者確保が難しいことを指摘している。

溝口・岩田（1999）は、全国の知的障害児施設 295 箇所に対してスポーツ活動の実施に関する質問紙調査を行ったが、知的障害者の入所施設では、比較的重度者が多い上に、知的障害者の運動プログラムや指導知識を持った指導員が少ないため、スポーツ活動を行うことが困難な現状にあるという。指導の際の注意として、特に中重度の知的障害者は指導者の影響を受けやすいため、本人の意向が十分に反映されない危険性があるという問題もある（安井,2004）。障害特性、それに伴う心身の状態、興味の方向、生活スタイルなど、知的障害者個人の実態に即した適切なサポートが求められるため、スポーツ指導の際は専門的な知識や経験がなければ指導が難しく、それゆえに指導者の確保が十分にできていないということが課題となっている。

知的障害者は、これまで身体障害者スポーツに比べて目を向けられてこなかったという社会的な背景と、それによる制度の不備からくる経済的要因・物的環境要因・人的環境要因によってスポーツ活動への参加が阻害され、余暇活動としてスポーツ活動を積極的に選択することが難しい状況に置かれている。冒頭でも述べたように、余暇の過ごし方は一様ではなく、各人のニーズに合わせて選択されるべきである。余暇は必ずスポーツをして過ごさねばならないというわけではないが、知的障害者は、心身ともに非常にポジティブな効果が期待できるスポーツに参加したくても参加できない現状にあり、このことは看過することができない重大な問題であるといえる。

### 第三節 ボランティア依存の現状と若年層を焦点としたマネジメントの意義

知的障害者のスポーツは、これまで日本知的障害者スポーツ連盟やスペシャルオリンピックス日本などの民間・非営利活動組織によって支えられてきており（渡邊,2006）、国の施策として注力されてきてはいない。そのため、活動のほとんどが、保護者や関係者、知的障害者スポーツの振興を目指す有志者、つまりは「ボランティア」によって支えられている実情がある。

障害者スポーツにおけるボランティアの活用に関しては、1995年に示された「障害者プラン～ノーマライゼーション7か年戦略～」において、指導員の養成研修の強化、ボランティア参加の促進、障害者スポーツに対する理解と関心の高揚を図ることが明記されている。このことから、知的障害者のスポーツ活動が普及・発展するためにボランティアの存在が重要となることがわかる。近年は、地域のスポーツ組織や団体におけるボランティアの重要性が取りざたされている。スポーツ組織・団体において、

ボランティアが果たすことのできる役割は大きく幅の広い活躍が期待されており（野村, 2002）、現在、我が国の代表的なスポーツ組織・団体の半数がボランティアを活用している現状があるという（仲澤, 2002）。特に非営利のスポーツ組織にとっては、価値ある人的資源を有効に活用することが、組織の成功への1つの鍵となる（松岡・小笠原, 2002）。それどころか、松本ら（2004）の指摘するように、組織の構成員たるボランティアの不足や離脱は、組織活動の成否、ひいては組織の死活問題に発展する危険性を孕んでいる。

以上のことから、特に知的障害者のスポーツにおいては、ボランティアの有効活用による今ある活動の維持、推進を行う必要があると考えられ、指導者の充足・活用が重要課題となる知的障害者のスポーツにおいては、木谷（1997a）が指摘するように、若年層が多い大学生がマンパワーとして期待できると考えられている。日本私立大学連盟学生委員会（2015）の調査によると、大学生が「現在興味持っていること・行っていること」としてボランティア活動のポイントが3期連続で上昇しており、学生支援機構（2006）の報告では、65%の学生がボランティア経験を有しているなど、大学生にとっても関心事となっている。豊かな社会経験が得られるため、学生のボランティア活動を推進している大学も多い（文部省高等教育局, 1999）。

また、ボランティア活動においては、ボランティアがその支援の対象者へ影響を与えるという一方通行のものではなく、ボランティア側も様々な影響を受けていることが報告されている。特に、接触経験による障害者に対する意識の変容については多くの報告がある。

内閣府（2012）が平成24年度に実施した「障害者に関する世論調査」（n=1,913）では、世の中に障害を理由とする差別や偏見が「あると思う」者が89.2%存在しており、平成19年の調査（n=1,815）よりも6.3%増加していた。また、差別・偏見の改善状況についても、平成24年度調査（n=1,706）と平成19年度調査（n=1,505）を比べると、「改善されている」という回答は57.2%から51.5%に減少し、「改善されていない」という回答は35.3%から40.8%に増加する結果となっていた。背景には、障害者問題についての問題意識の高まりも影響しているのであろうが、共生社会を目指すうえでは、障害に対する社会の無理解や誤解は解消すべき課題といえる。しかし、制度や物的環境については整備が進められ改善されてきたものの、地域住民の障害についての正しい理解や、誤解や偏見の解消には至っていないのが現状である。

インクルーシブ教育が叫ばれるなか、障害についての理解を深めることを目的の一つとした障害児者との交流体験が一般的となってきた。これまで、障害者に対する意識や態度についての研究は多くされてきており、障害児者との接触・交流経験が障害者に対する意識を肯定的に変化したという例は少なくない。例えば Jones et al.（1981）は、精神的・身体的にハンディキャップがある人に対する児童の認識に関して、集中的なプログラムを受けることでどのような効果をもたらされるのかを検証した。結果、児童は、聴覚障害の中学生と指文字を使っての質疑応答、目が不自由な大学生との会話など、ハンディキャップがある人々のニーズや能力を観察したり、経験した

りすることができるような活動を通じて、肯定的な変化を生じさせたことを報告している。また、生川（1995）は、高校生から40歳代の469名を調査対象として多次元の観点から精神遅滞児（者）に対する健常者の態度について検討をしており、精神遅滞児（者）との接触経験が有る人の方が、実際に関わろうとする気持ちが強く、地域での交流を推進しようという気持ちも強いことを報告した。山田（2007）の障害者スポーツにおいてボランティア活動をした者の調査においても、活動前よりも活動後の方が障害者に対する肯定的意識が高まり、障害者と直接的に関係する機会が多いほどその変容の程度が大きいことが指摘されている。その他にも、障害者に対する意識の肯定的変容に接触経験の影響を示唆する報告が複数確認できる（Thomas et al, 1985. 橋本, 2000 など）。

他にも、ボランティア活動に参加することは、人間関係の広がりや人生への意欲喚起などポジティブな影響を与えることが報告されており（妹尾・高木,2003）、特に若者のボランティアにおける成功的援助経験は教育的効果が高く、多様な能力の育成が見込めるものである（妹尾,2003）。しかし、現状ではボランティア活動をする者の多くが老年の者であり（全国社会福祉協議会,2010）、若年層は年齢の高い層に比べボランティア活動への継続的な参加の期待値が低いという実態もある（長ヶ原ら,1991. 金崎,2005）。松岡・小笠原（2002）が、非営利のスポーツ組織にとっては、価値ある人的資源を有効に使うことが組織の成功への1つの鍵となると述べるように、ボランティアに対しては適切な「マネジメント」が必要であると考えられる。

ボランティアを十分に確保し、継続的な参加を促すためには、ボランティアの実態について把握する必要がある。例えばボランティアをマネジメントする立場の者が、ボランティアの動機を理解しそれぞれの動機に対して適切に対処できれば、ボランティアのやる気を喚起させ、活動の活性化を図ることを可能とする（松岡・小笠原,2002）。Winniford,et al.（1997）も、大学生のボランティアの動機として、利己的動機、利他的動機、社会的な義務とその他の可能性について挙げ、これらを管理者がよりよく理解することで、大学生がサービス活動に関わり、継続する機会をより生み出せるであろうと述べている。これまでボランティアの実態について、参加動機、継続意欲、ドロップアウトについてなど、様々な視点から多くの知見が得られている。

例えば、ボランティア活動について Clary et al（1998）は、①他者に対して、利他・人道主義的な関わりができるという「Values（意義）」、②新たな学習経験や知識・技術・能力を発揮する機会となることの「Understanding（学習・理解）」、③友人と共にいる機会、または大切な人に好意的にみられる活動に従事する機会であるという「Social（社交）」、④ボランティアに携わることでキャリアに関して受益が期待される「Career（キャリア）」、⑤将来自己に生じた問題を対処するのに役立つかもしれないという「Protective（保護）」、⑥「Enhancement（向上）」の6つの要素を提示している。

また、非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機として、松岡・小笠原（2002）は以下の8要素を見出している。①人との出会い、交流、協力を通して得られる喜び

を求めてボランティア活動を行う「社交 (Social)」。②知識を獲得、学習、または経験を積むことを通して、自分の能力を伸ばすためにボランティア活動を行う「学習・経験 (Learning and Experiencing)」。③実益に関係なく、単に何かを知りたい、何かに興味があるという理由からボランティア活動を行う「個人的興味 (Personal interests)」。④自分の現在の仕事あるいは就職に役立つような人的ネットワークの拡大を求めてボランティア活動を行う「キャリア (Career)」。⑤実益の獲得というレベルをはるかに超えた、人間としての成長を求めてボランティア活動を行う「自己陶酔 (Self-development)」。⑥組織、あるいは組織に関わっている人々に対する義務感から、特定の組織のためにボランティア活動を行う「組織的義務 (Organizational obligation)」。⑦自分の実益に関係なく、他人、社会に貢献するためにボランティア活動を行う「社会的義務 (Social obligation)」。⑧スポーツに関心があるため、スポーツに関する活動ができる組織でボランティア活動を行う「スポーツ (Sport)」、である。

松岡・小笠原 (2002) はスポーツに関わる女性を支援している NPO 法人のボランティアを対象としていたが、車椅子マラソン大会のボランティアを対象とした松本 (1999) の調査でも、「ボランティア」「自己成長」「技術習得・発揮」「レクリエーション」「社会参加」「他律参加」「報酬」「参加者交流支援」という同様の参加動機が確認されている。知的障害者のスポーツ活動を支援するボランティアの参加動機については、田引 (2005) は「社交」「個人的興味」「スポーツ」「社会的奉仕」「報酬」「選手支援」「組織的義務」「学習・経験」の 8 つの要素を見出しており、松本ら (2004)、田引 (2008) もほぼ同様の結果を得ている。障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機には、障害種や活動の形態にかかわらず、共通している部分があるといえる。

また、参加動機と継続意欲と個人の属性などとの関連を検討することから、ボランティアの充足に繋がる示唆を得ることが試みられている。谷田 (2001) は、福祉ボランティア活動をする大学生の参加の動機と継続の動機について分析し、大学生は、自らの学びや、視野・人間関係の広がり、活動のやりがい動機として強く、ボランティア活動を推進する立場の者は、これらの欲求を満たすことができるよう環境を整えることが重要であると述べている。スポーツ・ボランティアを対象とした調査では、長ヶ原ら (1991) が、日頃、自身もスポーツを実施している者ほどボランティア活動の継続意欲が高いことや、参加選手や大会運営に対する貢献、地域活性化に対する社会的関心よりも、ボランティア活動やスポーツそのものに対する興味といった個人的関心に基づく参加動機の方が、継続意欲をより強く規定していることを報告している。田引 (2008) も、障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機と活動経験の関係性を検討し、当初利他的な動機であったものが活動を通してスポーツ活動を意識したものへと変容することを示唆し、新たにボランティアを開拓する場合と、すでに活動に参加している人に活動継続へのアプローチをする場合では、その視点や取り組み方に違った工夫が必要であると述べている。

松本ら (2004) は、スポーツ・ボランティアの参加動機と組織コミットメント (構

成員の組織に対する同一性や関与の程度、ロイヤルティ、役割意識などの感覚)が継続意欲に影響を及ぼす要因であるとして、参加動機によって組織コミットメントが影響を受け、活動の継続意欲に影響を及ぼすことを明らかとしている。北村ら(2005)も、日常において定期的な活動を行うボランティアの組織コミットメントの視点から、組織マネジメントの基礎資料を得ることを試みており、継続年数や組織における役職などで組織コミットメントが異なることや、組織に対して強い愛着がある一方で活動に対する不満も抱いている現状があることなどの知見を得ている。

また、ボランティアの「ドロップアウト」の実態とその背景にある「日常生活への支障」についても重要なテーマのひとつとなっている。Weiss and Sisley (1984)は、青年スポーツ組織の直面している主要な問題のひとつとして指導者の高い離脱率を挙げ、そこから年間を通じての継続的指導ができていない点を問題として指摘している。松尾ら(1994)は、地域を基盤とするボランティア・スポーツ指導者671名を対象に、指導に伴う生活支障の実態とその関連領域について調査している。その結果、指導者は集団の継続化に伴いボランティアでありながら指導への過度な没頭が余儀なくされ、結果他の生活領域とのアンビバレントな関係を生起すること、内容としては家庭と職場での時間的減少、生活関係の限定化、金銭的負担の増大などが主であることを確認した。実に、およそ3割の指導者に生活における支障・葛藤が認められていたのである。さらに、松尾(1996)は、福岡市とアメリカの Urbana-Champaign 市の少年スポーツのボランティア指導者を対象に、指導に伴う生活支障とその状況について比較検討している。その結果、両国の指導者はボランティア活動に対する意識役割観念において差異があるものの、両国の指導者ともに35%以上が「生活支障がある」と回答しており、ボランティア指導者にとって生活支障が普遍的な問題であることが示唆された。

全国社会福祉協議会が実施した全国ボランティア活動実態調査(2010)でも、ボランティア活動を行う個人(n=2,288)の抱えている問題が浮き彫りになっている。ボランティア活動を行うにあたって困っていることについて、「特に困っていることはない」という回答者は34.3%にとどまっていた。各項目については複数回答可であったが、「困っていることはない」という項目と、自らの困っていることに該当する項目のいずれにも回答することは考えにくいので、実に6割近くもの人が何らかの困りを抱えていると判断できる。困っていることについては、「活動と仕事、家事、学校等との時間調整が難しい」が17.5%と最も多い回答であった。また、ボランティア活動中断、休止の意向についても、回答者の27.9%がやめたいと思ったことがあるとしていた。その理由としては、最も多かったのが「健康上の理由や体力的な限界を感じた(34.3%)」で、次いで「学校や仕事が忙しくなった(20.3%)」、「期待や要請が大きくなって負担になった(19.6%)」となっていた(複数回答可)。健康上の理由が最も多かったことについては、回答者の属性を見ると実に65.7%が60代以上となっており、50代も17.7%と、比較的高齢の回答者が多かったことが考えられる。注目すべきは、このように定年を迎える世代がほとんどであったにも関わらず、全体の約2割の回答者が「学

校や仕事が忙しくなった」こと、「期待や要請が大きくて負担になった」ことを理由として挙げている点である。本来は自身の裁量によって、自発的に行われているはずのボランティア活動であるが、その実態は、私生活での役割との兼ね合いについて多くの困難を抱えながら活動しているのである。このことから、ボランティアがより負担なく継続的に活動できるよう、適切な働きかけをすることが求められると考える。つまり、「実行力のあるボランティアマネジメント」の手法が求められていると言える。

#### 第四節 理論的枠組み

ボランティアマネジメントとは、桜井（2007）によると、「ボランティアという特殊な人的資源の開発・活用と、それにより、事業を成果へ導く方法を探求した体系」と紹介されている。これまでボランティア需要の高まりに準じてボランティアコーディネート理論（例えば、宮城,1989）が注目されてきたが、桜井（2002）が指摘するように、福祉分野におけるボランティアの需要と供給を調整する方法論（＝つなぐ・結ぶ）が主な関心事であったため、ボランティア活動が多様化するなかで理論を問い直す局面となり、マネジメント理論に焦点が当てられるようになった。マネジメントに資するボランティア研究としては、参加動機の整理が重要なテーマとして挙げられ、これまで利他的動機から説明しようとする試みや（例えば、Hoffman,1979）、自己利益という利己的動機を前提として理解する試み（例えば、Smith,1981）、動機を複合的、多次元的なものと捉える試み（例えば、Clary et al,1998）が行われてきた。また、個人の属性や環境とボランティア参加との関連性について検討した研究（例えば、Smith,1994. Omoto,2000）や、参加満足度に関する研究（例えば、Costa et al,2006）など、様々な観点から議論されてきた。

吉田・桜井（2004）は、NPO のボランティアマネジメントに関して、ボランティアの特性を十分に活かし競争優位性を保つためには、新たなボランティアマネジメントのモデルを構築する必要があると述べ、戦略的人的資源管理論（SHRM : Strategic Human Resource Management）の適用可能性について理論的考察を行っている。具体的には、NPO の経営戦略タイプの類型化と事業成果の定義づけおこなったうえで、「経営戦略」「HRM 編成」「企業業績」を変数として、実証的にマネジメントのあり方を探ることを提言している。知的障害者のスポーツ分野に置き換えると、「団体・組織のミッション及び理念」達成に向けた「ボランティアの獲得・養成・役割分担等」をおこなうことが、「ミッションの達成度、+ $\alpha$ の成果(知的障害者本人の成長や喜び、障害の理解啓発等)」に寄与すると捉えることができるであろう。SHRM に関しては、戦略と HRM との対応が業績向上との因果関係として実証されてこなかったという側面もある（小林,2014）が、木村（2007）はこの点について、業績向上の効果がないのではなく理論的枠組みに不足があったことを指摘している。つまり、異なる企業が同様の戦略をとったとしても、企業規模や人材の質などの要素が異なるため、戦略達成のための行動計画や内部の人的資源の状況も HRM のあり方を決定する要因として捉えることが重要であるという主張である。もちろん、知的障害者スポーツの団体は

前述の通りボランティア依存（＝企業のような採算ベースにない）であるので、企業経営の理論をそのまま適応させることは現実的ではない。よって、ボランティアの動機や技能、それらに応じた役割分担・役割認識といった、HRM に配慮した組織マネジメントモデルについて提唱する必要がある。

桜井（2007）は、ボランティアの人的管理を適切に進める際、Hobson et al（1996）らの「親しみやすいボランティア団体（Volunteer-friendliness）」モデルの活用に期待ができると述べている。Hobson et al（1996）のモデルは、①ボランティアの引きつけと募集、②組織スタッフとの最初の対話、③ボランティアの活用と配置、④ボランティア後のフォローアップの4つの概念から成っている。ボランティアは非営利団体における貴重な資源であるため、最大限の尊敬、配慮、感謝の気持ちが払われなければならない、ボランティアができるだけ肯定的な活動をできるようにあらゆる努力をする必要性を説いている。知的障害者スポーツにおいては、ボランティアマネジメントが十分におこなわれておらず、前述したようなボランティアの活動支障が生じやすく活動離脱も少なくない。シンプルで重要なポイントが盛り込まれているため「親しみやすいボランティア団体」モデルを活用することができれば、これらの課題を解決できる可能性がある。

しかし問題は、Hobson et al（1996）のモデルは、非営利組織のマネジメントに資するモデルとして提唱されているが、「知的障害者スポーツ」における適応を前提としていないという点である。例えば、当該論文において非営利組織における理事会（意思決定機関）に対する具体的な提言がなされているが、知的障害者スポーツにおいては、そもそもサークルや自助グループのような自然発生的に活動をスタートさせているケースが多く、明確な意思決定機関や役割分担がなされていないなかったり、会員同士でビジョンの共有ができていない場合が考えられる。前述したように、組織規模や人材といった「実情」に即して戦略を変えていく必要があるため、ボランティアマネジメントを行う場面として、例えば、高齢者施設における導入（柏原,2010）や、災害支援活動（綾部・秦,2012）、病院組織（桜井,2004）、まちづくり（塩野,2014）など、それぞれ各領域における実状に即した観点から検討がなされている。知的障害者スポーツにおいても、社会的動向から保護者や関係者を中心としていることが多い点や、終着点のない永続的活動である点、マンパワーの獲得に難しさがあり特に若年層が少な点など、実態を考慮したマネジメントをおこなわなければならない。よって、「親しみやすいボランティア団体」モデルを援用しながら、より適応可能性の高い新たなモデルを構築する必要があると考える。



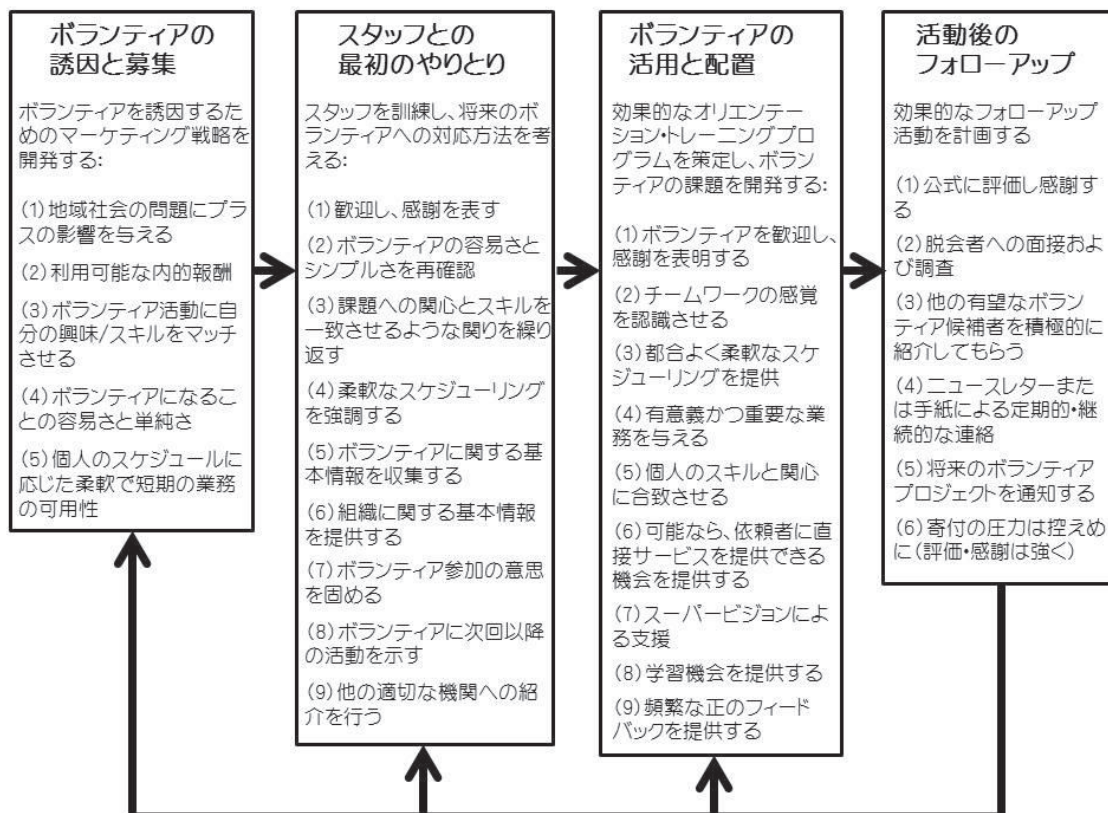


図1 Hobson et al(1996)の「親しみやすいボランティア団体」モデル  
 (Hobson et al,1996. pp32 から筆者作成)

### 第五節 本研究の目的

知的障害者スポーツに関する研究は、金山・山下（1996）が指摘するように多くは指導方法や実践事例の報告（例えば、高畑・中道,2005. 関根ら, 2005. など）であり、若年層の参加実態や、若年層ボランティアに対する障害当事者のニーズについて扱った論文は管見の限り見当たらない。加えて、知的障害者スポーツにおけるボランティアの研究は、活動満足度について（例えば高見ら,2008）や、前述したような参加動機や継続意欲（例えば、松本ら,2004. 田引,2005. Khoo & Engelhorn,2011.など）などが主たるテーマとなっており、負担感や指導不安といった活動離脱を促進しかねない要因の検討は不十分である。壮年層や高齢層と異なり、若年層は業務内容への満足がボランティア活動の継続要因として挙げられていること（桜井,2005）や、活動率は低いもののスポーツボランティアの希望率は高いなど潜在的ニーズがあること（内藤,2007. 木谷,2007b）からも、若年層に応じたマネジメントが可能となれば、知的障害者スポーツの活動継続・発展に大きく貢献できると考えられる。

以上のことから、本研究では、知的障害者スポーツにおいて若年層に焦点を当てた検討をすることから新たなボランティアマネジメントのモデルを構築することを目的とする。知的障害者スポーツにおいて特に若年層の獲得・定着を企図したボランティ

アマネジメントの理論生成には、まず、①ボランティアの離脱リスクを高める要因、②若年層ボランティアの活動継続を促進する要因、について把握し、ボランティアが活動を続けやすくするためのポイントを整理する。同時に、③当事者が求める指導者像、④若年層ボランティアの指導者としての役割認識および指導力の発揮実態についても明らかにし、指導者－被指導者の認識の相違点についても検討する。①～④に関して総合的に考察し、「親しみやすいボランティア団体 (Volunteer-friendliness)」モデルを援用することから、知的障害者のスポーツ団体に適応できる、若年層ボランティアの定着に寄与する新たなボランティアマネジメントモデルを構築する。

## 第二章 ボランティアはなぜ辞めるのか

### 第一節 スポーツ指導に伴う負担感

#### 第一項 調査の概要

知的障害者のスポーツ支援団体である「スペシャルオリンピックス（以下 SO）」において、主にスポーツ指導をしているボランティアを対象として質問紙調査を行った。質問紙は、スペシャルオリンピックス日本（SO の本部：以下 SO 日本で）登録されているボランティアが 25 名以上確認できる地区組織を通じて配布した。調査期間は 2009 年 7 月 17 日から 8 月 31 日まで、配布総数 930、有効回答は 398（回収率 42.8%）だった。

質問紙の配布は、各地区の事務局を通じておこない、各地区内で実施されている各種スポーツプログラムに配布し、質問紙を配布した。また、各地区組織のスポーツプログラム担当者や事務局スタッフが回収作業を担うことになるため、記入済みの質問紙が回答者以外の目に触れないよう、質問紙と同数の封筒を同封し、封入して提出できるよう配慮した。

調査内容は、属性・基礎項目、負担感を生じさせる要因を設定した。基礎項目は、身分、性別、年代、SO 以外でのボランティア頻度、SO での活動経験、SO 以外での障害者の存在、現在のスポーツ活動状況、これまでのスポーツ活動状況、SO における役職経験の有無、辞めたいと思った経験である。身分は、「大学生」か「社会人」。活動経験については、「1 年未満」「1 年以上 3 年未満」「3 年以上 5 年未満」「5 年以上 7 年未満」「7 年以上 10 年未満」「10 年以上」の選択肢の中から回答を得た。当該組織の活動が調査時点（2009 年）で 15 周年であり、地区組織として 10 年以上活動を展開している地区が少なかったため、最も経験の長い選択肢が「10 年以上」であっても不都合は生じないと判断し設定した。

負担に感じる要因については、ボランティアとしてスポーツ指導を行う際に負担感が生じる要因について 26 の質問項目を設定し、質問項目ごとに「とても負担に感じる (5)」「負担に感じる (4)」「どちらともいえない (3)」「負担に感じない (2)」「まったく負担に感じない (1)」の 5 件法で評価をしてもらった。

また、負担感の項目は、当該組織のボランティア 6 名を対象とした予備調査（インタビュー）で得られた回答をもとに設定した。質問紙においては、知的障害者を「アスリート」、知的障害者の家族を「ファミリー」と記載するなど、当該組織において一般的に使用されている用語を用いた。

得られたデータは、下記の通り分析を進めた。

- 1) 回答者の基本属性を単純集計によってまとめた。
- 2) ボランティアの負担感が生じる要因として設定された 26 項目について、平均値、

標準偏差を算出し、天井効果・フロア効果を確認して因子分析を行った（最尤法・プロマックス回転）。

3) 各因子の下位尺度得点を算出し、「10代・20代」「30代・40代」「50代・60代」をグループとしてまとめ、年代ごとに因子得点の平均値の差を確認した（一元配置分散分析）。

いずれの分析も有意水準を 5%とした。全てのデータの集積・統計処理は、IBM SPSS® Statistics Desktop Ver.22 を用いた。

調査内容及び質問項目については、事前に SO 日本による確認の上、実施の了解を得た。質問紙への回答についても、回答者に協力の意思を確認の上、調査が実施された。また、プライバシー保護の観点から、個人が特定されないよう配慮した。

## 第二項 人口統計学的属性

全体の傾向として、性別による人数の差はほとんどなく、年齢別にみると、ほぼ半数が 50 代以上であり、10 代は 25 人（6.3%）と少なかった。回答者の活動参加歴は、3 年以上 5 年未満という層が最も多く（115 人、28.9%）、10 年以上継続している人はわずか 28 人（7.0%）であり、7 年以上 10 年未満の人も 48 人（12.1%）と少ない結果となった。

当該活動以外のボランティア頻度については、約 4 割が「していない」と回答しており、他の選択肢の割合にも大きな違いはみられなかった。

身近に障害者がいるかどうかについては、壮年・高年層においては「家族にいる」ケースが最も多かったが、若年層においては「友人・知人にいる」ケースが最も多かった。

スポーツ指導者を対象とした調査のため、過去・現在のスポーツ実施状況についても確認したところ、全体としては「していない」が 121（30.4%）と最も多く、次いで「週 2～3 回（20.1%）」であった。世代内の割合を確認すると、壮年・高年層においては、全体の割合同様、「していない」「週 2～3 回」の割合が高かったが、若年層においては「ほとんど毎日」の割合が最も高かった。文部科学省（2015）の運動・スポーツの実施状況調査によると、1 年間のうち「運動やスポーツはしなかった」と答えた者の割合が 22.6%存在していたが、本調査におけるサンプルでは、全体としては 55.0%がスポーツをおこなっていないという実態が確認された。

役職経験に関しては、若年層は「ない」割合が高く、壮年層は「ある」「ない」同程度、高年層は「ある」割合が高いという、年齢が上がるにつれて役職に就く割合が高まる傾向が確認された。

辞めたいと思ったことが「ある」者は 115（28.9%）存在しており、世代内の割合をみると、若年層 20.0%、壮年層 38.8%、高齢層 28.7%と、壮年層がもっとも高い割合であった。

表2-1-1 回答者の基本属性

		全体	(%)	学生	(%)	社会人	(%)
性別	男性	186	46.7	20	31.3	159	48.8
	女性	201	50.5	44	68.8	156	47.9
	無回答	11	2.8	0	0.0	11	3.4
年代	10代	25	6.3	25	39.1	0	0.0
	20代	71	17.8	39	60.9	33	10.1
	30代	47	11.8	0	0.0	47	14.4
	40代	75	18.8	0	0.0	75	23.0
	50代	92	23.1	0	0.0	91	27.9
	60代～	77	19.3	0	0.0	69	21.2
	無回答	11	2.8	0	0.0	11	3.4
活動歴	1年未満	56	14.1	24	37.5	32	9.8
	1年～3年	83	20.9	22	34.4	61	18.7
	3年～5年	115	28.9	11	17.2	102	31.3
	5年～7年	64	16.1	5	7.8	58	17.8
	7年～10年	48	12.1	2	3.1	43	13.2
	10年以上	28	7.0	0	0.0	27	8.3
	無回答	4	1.0	1	1.6	3	0.9
当該活動以外の ボランティア頻度	していない	170	42.7	25	39.1	143	43.9
	年数回程度	96	24.1	21	32.8	74	22.7
	月1～2回	66	16.6	10	15.6	55	16.9
	週1回程度	29	7.3	1	1.6	27	8.3
	週2～3回	22	5.5	6	9.4	15	4.6
	ほとんど毎日	4	1.0	0	0.0	4	1.2
	無回答	11	11.0	0	0.0	8	2.5
障害者の存在	家族にいる	101	25.4	9	14.1	88	27.0
	親族にいる	33	8.3	5	7.8	28	8.6
	友人・知人にいる	109	27.4	12	18.8	96	29.4
	よく見かける	34	8.5	9	14.1	25	7.7
	たまに見かける	34	8.5	11	17.2	23	7.1
	いない	84	21.1	18	28.1	63	19.3
	無回答	3	0.8	0	0.0	3	0.9
現在のスポーツ 実施状況	していない	219	55.0	43	67.2	173	53.1
	年数回程度	21	5.3	2	3.1	19	5.8
	月1～2回	37	9.3	3	4.7	34	10.4
	週1回程度	53	13.3	9	14.1	42	12.9
	週2～3回	59	14.8	6	9.4	50	15.3
	ほとんど毎日	6	1.5	1	1.6	5	1.5
	無回答	3	0.8	0	0.0	3	0.9
過去のスポーツ 経験	していない	121	30.4	21	32.8	99	30.4
	年数回程度	27	6.8	2	3.1	25	7.7
	月1～2回	29	7.3	1	1.6	26	8.0
	週1回程度	57	14.3	1	1.6	53	16.3
	週2～3回	80	20.1	15	23.4	63	19.3
	ほとんど毎日	74	18.6	23	35.9	51	15.6
	無回答	10	2.5	1	1.6	9	2.8
当該活動におけ る役職経験	あり	169	42.5	8	12.5	158	48.5
	なし	220	55.3	55	85.9	160	49.1
	無回答	9	2.3	1	1.6	8	2.5
辞めたいと思っ た経験	あり	115	28.9	9	14.1	103	31.6
	なし	235	59.0	42	65.6	189	58.0
	わからない	36	9.0	12	18.8	23	7.1
	無回答	12	3.0	1	1.6	11	3.4

### 第三項 負担感の背景因子

ボランティアの負担感が生じる要因について質問した 26 の項目について、平均値、標準偏差を算出し、天井効果・フロア効果を確認した。結果、フロア効果が確認された 8 項目のうち、「日ごろ仲の良い友人が SO には参加していないこと」「義務、半強制的な空気があること」「SO の場以外での SO メンバーとの付き合い」「日常生活での立場関係が SO の場においてももちこまれること」「仕事を与えられないこと」「自分の好みの異性が SO に参加していない」の 6 項目は除外した。「ファミリーとの人間関係」「他のボランティアとの人間関係」の 2 項目についてもフロア効果が確認されたが、予備調査でも頻出した項目であり、調査対象とした団体の性質上重要な項目と考えられたため、除外しなかった。

次に、残りの 20 項目に対して最尤法による因子分析を行った。固有値の変化をスクリープロット及び数値により確認したところ、5 因子構造が妥当であると考えられたため、再度 5 因子を仮定して因子分析を行った（最尤法・プロマックス回転）。結果、下位項目の因子負荷量が 0.4 に満たなかった「会員加入や参加登録などの事務的な手続き（0.338）」を除外し、再度因子分析（最尤法・プロマックス回転）をおこなった。また、Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性 0.871、Bartlett の球面性測定  $p < 0.001$  であり、因子分析をおこなうに適切なサンプルであると判断した。最終的なパターン行列と因子間の相関、分散の説明の割合を表 2-1-2 に示す。

次に、この 5 つの因子について尺度としての信頼性の検討を行った。第 1 因子から第 5 因子までそれぞれ Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、第 1 因子 0.803、第 2 因子 0.818、第 3 因子 0.871、第 4 因子 0.725、第 5 因子 0.691 と、十分な値が得られた。

第 1 因子は 7 項目で構成されており、「プログラムでの実際のコーチング」、「自分の時間が取れないこと」、「他のコーチとの熱意に差があること」、「他のコーチとの作業量に差があること」など、コーチとしての活動場面において生じる実働面の課題についての項目が高い負荷量を示していた。よって、「コーチング課題」と命名した。

第 2 因子は「ファミリーとの人間関係」、「自分以外の人同士の間人間関係」、「他のボランティアとの人間関係」、「アスリートとの人間関係」という人間関係に関する項目の負荷量が高かったことから、「人間関係因子」と命名した。

第 3 因子は、「SO の理念から外れている意見がまかりとおること」、「アスリート本位でない意見がまかりとおること」という、当該活動の本質とは異なる現象が生じることについての項目の負荷量が高い因子であるため、「理念乖離因子」と命名した。

第 4 因子は、「プログラム参加に付随する経費（ガソリン代や昼食代）」、「プログラム参加自体の経費（会場利用料など）」、「プログラム会場への移動」の 3 項目によって構成されており、コーチとして活動する際に発生するコストに関する項目であることから、「参加コスト因子」と命名した。

第 5 因子は、3 項目で構成されており、「怪我などのアスリートの安全に責任を負う

こと」、「社会性や競技能力などアスリートの成長に対する責任を負うこと」、「参加者の個人情報管理すること」という、コーチとして活動する上で果たさねばならない義務・責任に関する項目の負荷量が高かったため、「責務因子」と命名した。

表 負感度の因子構成及び回転因子タテ

項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	$\alpha$
<b>Ⅵ コーチ課題</b>						
立場の異なるコーチ	.8	.2	.51-	.6-	.2	.86
立場の異なる年代の選手と	.6	.2-	.7	.9-	.0-	
自派の選手と	.5	.0	.4	.9	.2-	
他年代の選手と	.5	.0	.2	.6	.9-	
立場の選手	.8	.6-	.7-	.7-	.7	
他年代の選手と	.2	.6-	.2	.5	.2	
実力より別派の選手と	.4	.4	.2	.7-	.2-	
<b>Ⅶ 人間関係</b>						
支那の関係	.7-	.8	.9-	.8-	.9-	.86
自派同年代の関係	.9-	.7	.9	.7	.9	
他年代の関係	.9	.5	.6-	.9	.9	
支那の関係	.9	.6	.91-	.9-	.9-	
<b>Ⅷ 理解難</b>						
言葉の異なる選手と	.9-	.2-	.9	.4-	.9	.86
文化の異なる選手と	.9	.2-	.8	.6-	.2	
<b>Ⅸ 参加費</b>						
立場の異なる選手と	.6-	.9	.9	.5	.3-	.86
立場の異なる選手と	.9-	.4-	.9	.8	.9	
立場の異なる選手と	.9	.9-	.7-	.8	.6-	
<b>Ⅹ 責務</b>						
作戦の決定や選手との関係	.91-	.7-	.9	.9	.8	.86
社会情勢や選手の成長や選手との関係	.7	.9	.7	.9-	.7	
選手の指導や選手との関係	.9-	.2	.9	.9	.8	
因子間相関						
I	-	.645	.373	.517	.544	
II		-	.361	.326	.565	
III			-	.269	.388	
IV				-	.374	
V					-	

#### 第四項 負担感の強度—属性による差異—

世代間の差を検討するため、各因子の下位尺度得点について一元配置分散分析をおこない、その後 Bonferroni 法による多重比較をおこなった結果、「若年層」、「高齢層」と比べて「壮年層」のコーチング課題得点が有意に高く、人間関係に関しても、「若年層」よりも「壮年層」が有意に高いことが明らかとなった（表 2-1-3）。また、他の属性の特徴も把握するため、性別（男性—女性）、辞めたいと思った経験の有無（ある—ない）、役職経験の有無（ある—ない）についても平均の比較を行った（対応のない t 検定）。結果、辞めたいと思った経験の「ない」者よりも「ある」者の方が、コーチング課題（ $t(324)=5.17, p<.001$ ）、人間関係（ $t(319)=4.21, p<.001$ ）、参加コスト（ $t(336)=4.08, p<.001$ ）、責務（ $t(329)=2.19, p<.05$ ）について、有意に高い得点を示していた（表 2-1-5）。

その他は、どの因子に関しても属性による得点差は生じていなかった。

これらの結果から、30代・40代の壮年層は、若年層・高齢層に比べて直接的なコーチングに関する負担感が強く、若年層よりも人間関係に関して強い負担感を抱えていることが伺えた。また、負担感の強さには、性別、役職経験の有無は関連しないが、辞めたいと思った経験の有無と、「コーチング課題」「人間関係」「参加コスト」「責務」の負担感の強度は関連していることが伺えた。

表 2-1-3 負担感因子下位項目得点の世代間比較結果(分散分析)

因子	度数	時期	平均	標準偏差	F値	多重比較
コーチング課題 n=359	95	若年	2.15	0.66	7.31**	若年, 高年 < 壮年
	117	壮年	2.44	0.72		
	147	高年	2.14	0.72		
人間関係 n=354	93	若年	1.70	0.71	2.81	若年 < 壮年
	115	壮年	1.94	0.71		
	146	高年	1.84	0.73		
理念乖離 n=362	95	若年	2.58	1.16	0.10	n.s.
	116	壮年	2.66	1.06		
	151	高年	2.62	1.19		
参加コスト n=371	95	若年	2.24	0.89	3.66*	n.s.
	120	壮年	2.24	0.87		
	156	高年	1.99	0.86		
責務 n=365	95	若年	2.38	0.80	2.61	n.s.
	120	壮年	2.64	0.81		
	150	高年	2.53	0.87		

\*\*p<0.01, \*p<0.05, n.s.= not significant

表2-1-4 男女別の各因子得点の差

	男性			女性			t値
	度数	平均	標準偏差	度数	平均	標準偏差	
コーチング課題	175	2.23	0.69	184	2.25	0.74	0.37
人間関係	173	1.90	0.72	181	1.78	0.72	1.49
理念乖離	175	2.53	1.10	187	2.71	1.18	1.43
参加コスト	183	2.17	0.91	188	2.10	0.81	0.76
責務	178	2.54	0.83	187	2.50	0.85	0.46

表2-1-5 辞めたいと思った経験の有無による各因子得点の差

	辞めたいと思ったことがある			辞めたいと思ったことはない			t値
	度数	平均	標準偏差	度数	平均	標準偏差	
コーチング課題	108	2.50	0.77	218	2.07	0.66	5.17***
人間関係	107	2.05	0.77	214	1.70	0.65	4.21***
理念乖離	106	2.79	1.13	222	2.57	1.16	1.60
参加コスト	109	2.36	0.89	229	1.97	0.79	4.08***
責務	109	2.65	0.85	222	2.43	0.84	2.19*

\*p<.05, \*\*\*p<.001

表2-1-6 役職経験の有無による各因子得点の差

	役職経験がある			役職経験はない			t値
	度数	平均	標準偏差	度数	平均	標準偏差	
コーチング課題	158	2.29	0.75	198	2.22	0.69	0.94
人間関係	152	1.86	0.70	198	1.81	0.74	0.71
理念乖離	156	2.75	1.18	200	2.56	1.09	1.54
参加コスト	164	2.18	0.83	203	2.12	0.89	0.63
責務	161	2.56	0.83	200	2.52	0.85	0.38



## 第二節 抱える指導不安とバーンアウトのリスクの検討

### 第一項 調査の概要

第二章の第三節で述べたように、若年層のボランティアは少なからずスポーツ指導者としての「不安」を感じながら、スポーツ指導をおこなっている。そこで、具体的にどのような事象に関して不安感が強いのかを把握するべく、知的障害者のスポーツ支援をおこなう団体、「スペシャルオリンピックス日本・青森」において、スポーツ指導者として参加している若年層ボランティア 31 名を対象に質問紙調査を行った（回収率 100%、期間 2012 年 8～9 月）。

調査項目は、「当該活動の経験年数（2 年以下・3 年以上）」、「性別（女性・男性）」、「当該組織における役職経験（あり・なし）」を問う基礎項目の他、「コーチとして不安に感じる事（不安事項）」について 16 項目を設け、回答を得た。「不安事項」は、予備調査として若年層ボランティア 3 名にインタビューを実施し、得られた結果をもとに設定し、回答は、強く不安を感じる場合は 10 点、不安を感じない場合は 1 点、というように、不安に感じる強度によって 1～10 点のどれかを記入してもらった（図 2-2-1）。また、活動離脱リスクについて確認するため、久保・田尾（1992）の「バーンアウト尺度」を参考に、バーンアウトの因子とされる Emotional exhaustion（情緒的消耗感：EE）、Personal accomplishment（個人的達成感：PA）、Depersonalization（脱人格化：DP）の強度についても、5 件法にて確認した。質問紙においては、回答のしやすさを考慮し、知的障害者を「アスリート」、保護者を「ファミリー」とするなど、当該活動で一般的に使用される用語を用いた。

分析は、「不安事項」の各項目の得点及び、「バーンアウト」の各因子の評定値を合算した、EE、PA、DP それぞれの合計得点を用いておこなった。具体的には、対応のない t 検定により各項目の属性ごとの平均を比較し、相関分析（Pearson）により項目間の関連性についても確認した。

0.S0での活動について、現在コーチとして不安を感じることはありますか？  
それぞれの項目で当てはまると思う数字を、□に記入してください。（S0について）

とてもあてはまる(10)・・・どちらとも言えない(5)・・・まったくあてはまらない(1)

例	おなかが減っている	※ほぼ満腹だ～ ⇒	2
例	おなかが減っていない	※かなり空腹だ～⇒	10
1	自身のアスリート本人についての知識		
2	自身の知的障害についての知識		
3	自身の当該スポーツについての知識		
4	自身のコーチング技術		
5	日常生活(学業・アルバイト等)との兼ね合い		
6	ファミリーとの人間関係		
7	臨機応変に動くこと		
8	アスリートの安全確保		
9	アスリートに楽しんでもらえること		
10	アスリートのスポーツ技術の成長に貢献すること		
11	アスリートの社会的な面の成長に貢献すること		
12	他のコーチとの意思疎通		
13	プログラム責任者との意思疎通		
14	自分の有用性		
15	何をしてよいかわからないこと		
16	経済的な負担		

0.あなたは最近6か月くらいのあいだに、次のようなことをどの程度経験しましたか？  
それぞれの項目で当てはまると思う番号を□に記入してください。（S0について）

いつもある…5、しばしばある…4、時々ある…3、まれにある…2、ない…1

1	「S0なんか、もうやめた」と思うことがある
2	我を忘れるほどS0に熱中することがある
3	ごまごまと気配りをするのが面倒に感じることもある
4	S0は私の性分に合っていると思うことがある
5	他のコーチやアスリートの顔を見るのも嫌になることがある
6	自分の仕事がつまらなく思えて仕方のないことがある
7	S0の活動が終わると「やっと終わった」と感じることもある
8	家を出るとき、S0に行くのが嫌になって家にいたいと思うことがある
9	S0を終えて今日は気持ちの良い日だったと思うことがある
10	他のコーチやアスリートと、何も話したくなくなることもある
11	コーチングの結果はどうでもよいと思うことがある
12	S0のために心にゆとりがなくなると感じる
13	S0に心から喜びを感じることもある
14	S0に、私にとってあまり意味がないと思うことがある
15	S0が楽しくて知らないうちに時間が過ぎることがある
16	体も気持ちも疲れ果てたと思うことがある
17	我ながらコーチングをうまくやり終えたと思うことがある

図 2-2-1 配布したアンケートの不安事象・バーンアウト項目

## 第二項 指導者としての不安

対象とした若年層ボランティア 31 名のうち、経験年数が 2 年生以下は 18 名 (58.1%)、3 年生以上は 13 名 (41.9%) であり、女性は 22 名 (71.0%)、男性は 9 名 (29.0%) であった。また、当該活動における役職経験がある者は 11 名 (35.6%)、ない者は 20 名 (64.5%) となっていた。

「不安事項」に関して性別による得点比較を行った結果、各項目の得点は図 3-2-3 の通りであった。最も得点の高かった項目は「スポーツ技術の成長に貢献すること (M : 6.61、SD : 1.91)」であり、次いで「社会的な面の成長に貢献すること (M : 6.48、SD : 1.57)」、「アスリートについての知識 (M : 6.34、SD : 2.39)」、「自身のコーチング技術 (M : 6.26、SD : 2.57)」となっていた。逆に、最も得点が低かった項目は「経済的な負担 (M : 2.06、SD : 1.46)」であり、次いで「ファミリーとの人間関係 (M : 4.81、SD : 1.82)」、「アスリートの安全確保 (M : 4.84、SD : 1.75)」となっていた。

直接指導に関する知識・技術と、指導による成果に関する項目については不安感が高い傾向が確認された。

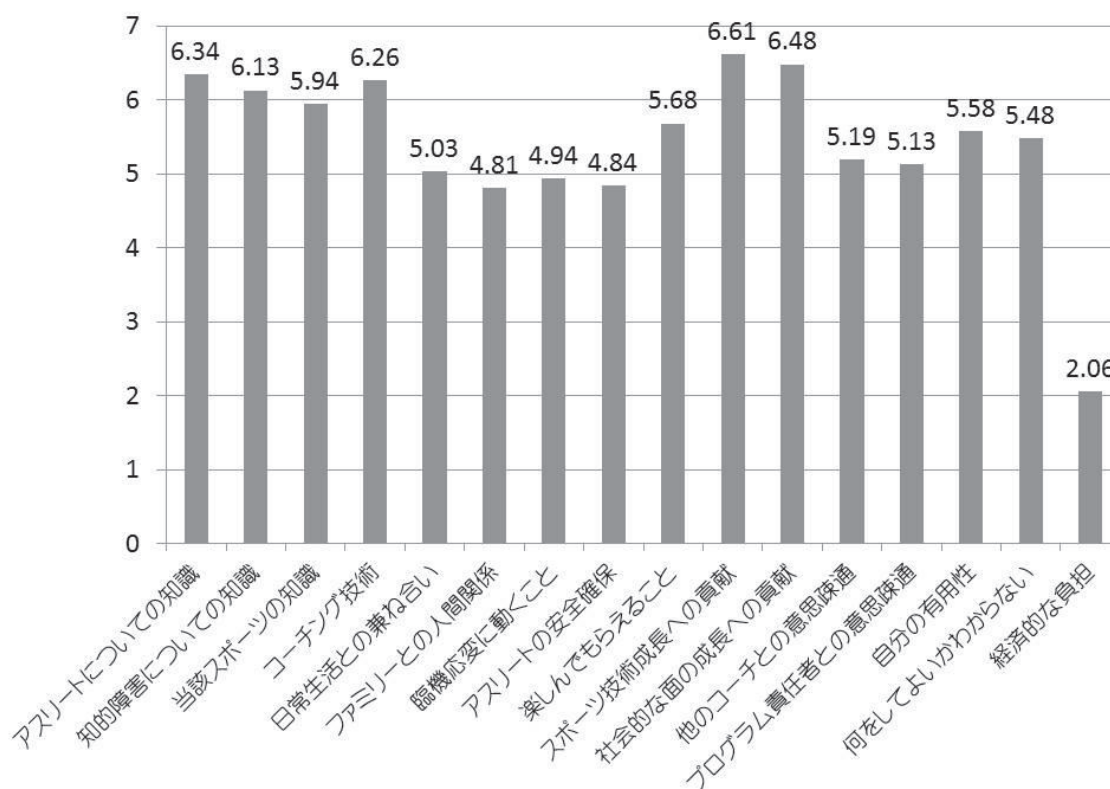
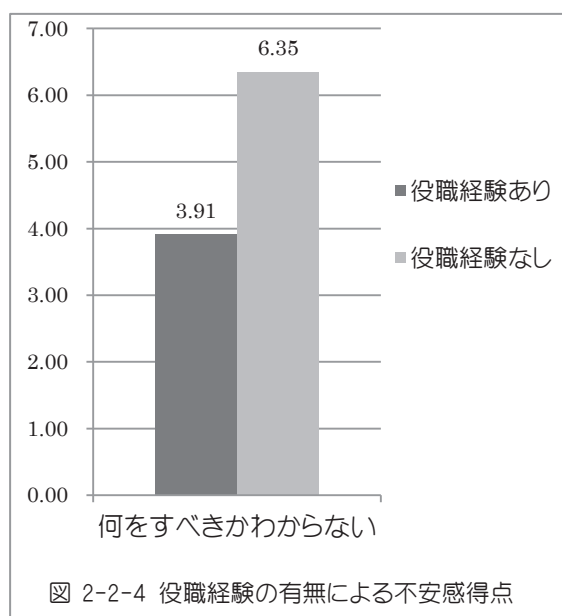
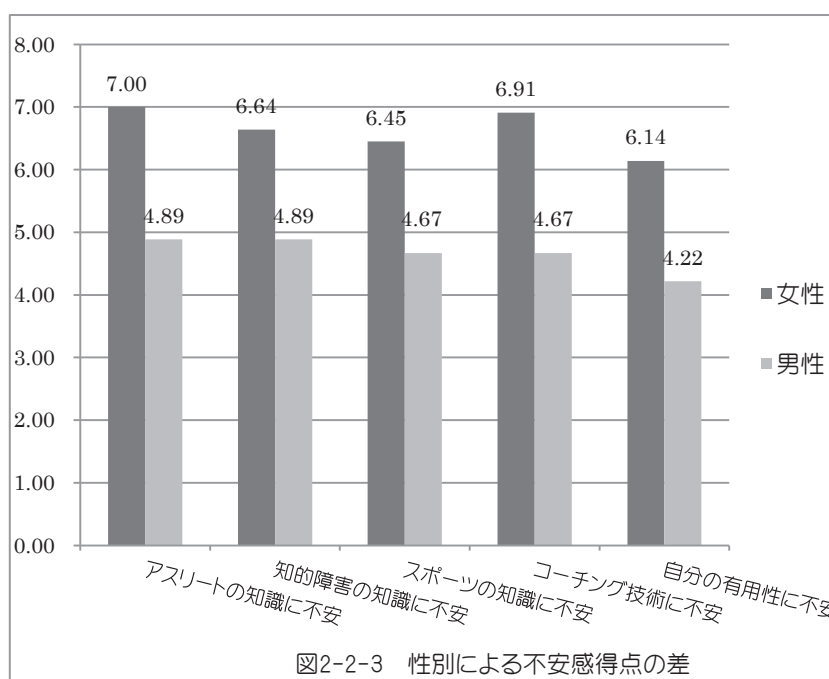


図 2-2-2 不安感項目の得点

各属性内で得点差を比較した結果、「アスリートについての知識」(t=2.40, p<.05)、「知的障害の知識」(t=2.23, p<.05)、「スポーツの知識」(t=2.09, p<.05)、「コーチング技術」(t=2.37, p<.05)、「自分の有用性」(t=2.22, p<.05) の項目において女性の平均が男性よりも有意に高いことが確認された (図 2-2-3)。この差は、実際の知識量・技術の差を示すという

よりは、女子の方が男子よりも高い不安傾向を示す（中村,2001）といった、性的特徴が反映している可能性がある。また、役職経験の有無で比較したところ、「何をしてもよいかわからない」（ $t=2.85, p<.01$ ）の項目において、役職経験の「ない」者の方が、「ある」者よりも得点が高いことが明らかとなった（図 3-2-4）。役職を経験するという事は、指示を出す側にまわり、スポーツプログラムの設計・運営に携わることもあるため、役職経験によって必要とされる行動が推察できるようになったことから、「何をすべきか」についての不安感が低かったのではないだろうか。



不安事項の各項目間の関係性は表 2-2-1 の通りであった。「自分の有用性」に着目す

ると、「アスリートの知識」、「知的障害の知識」、「コーチング技術」とのやや強い正の相関関係が確認できる。逆に、アスリートの「スポーツ技術の成長への貢献」「社会性の成長への貢献」「自分の有用性」という、自身の貢献度や有用性についての不安感が強いほど、「経済的な負担」について不安に思わないという傾向は、自身が貢献できていないかもしれないという負い目からコストに関して「やむを得ない」と認識する傾向を示しているのではないだろうか。

表 2-2-1 不安事項の各項目間の相関関係

	アスリート の知識	知的障害 の知識	スポーツ の知識	コーチ ング技術	生活との 兼ね合い	ファミ リーとの 人間関係	認知応 答	アスリー トの安全 管理	アスリー トが楽し む	アスリー トの技術 向上	アスリー トの社会 性向上	コーチと の意思疎 通	責任者と 意思疎通	自分の有 用性	何すべき か不明	経済的負 担
アスリートの知識	1	.697**	.347	.760**	.277	-.005	.369*	-.176	-.263	.260	.375*	-.062	.229	.745**	.468**	-.227
知的障害の知識		1	.335	.541**	.369*	.059	.265	-.012	-.118	.120	.474**	.340	.531**	.686**	.548**	-.317
スポーツの知識			1	.652**	.155	.061	.456**	.206	.356*	.186	.289	.142	.137	.385*	-.063	-.229
コーチング技術				1	.170	-.110	.436*	-.013	-.141	.327	.448*	.027	.108	.628**	.205	-.289
生活との兼ね合い					1	.638**	.443*	.259	.017	-.076	.036	.333	.292	.192	.304	.318
ファミリーとの人間関係						1	.423*	.241	.033	-.070	-.118	.333	.272	.138	.252	.194
認知応答							1	.325	.422*	.490**	.466**	.394*	.178	.364*	.104	-.287
アスリートの安全管理								1	.340	-.119	.017	.298	.014	.065	-.199	.148
アスリートが楽しむ									1	.268	.211	.297	.106	-.086	-.240	-.327
アスリートの技術向上										1	.755**	.086	.035	.233	.287	-.505**
アスリートの社会性向上											1	.395*	.225	.296	.215	-.480**
コーチとの意思疎通												1	.642**	.167	.206	-.113
責任者との意思疎通													1	.459**	.467**	-.123
自分の有用性														1	.510**	-.356*
何すべきか不明															1	-.215
経済的負担																1

N=31

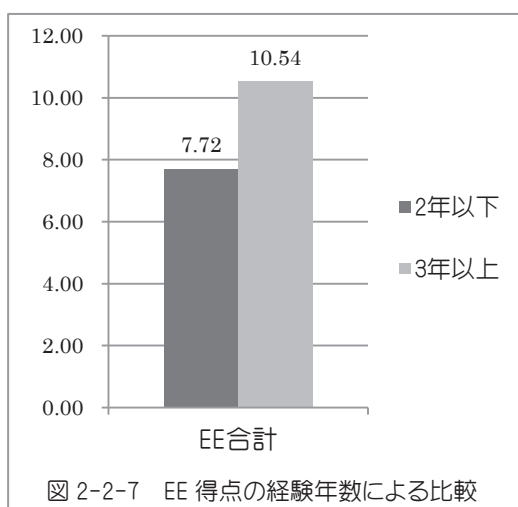
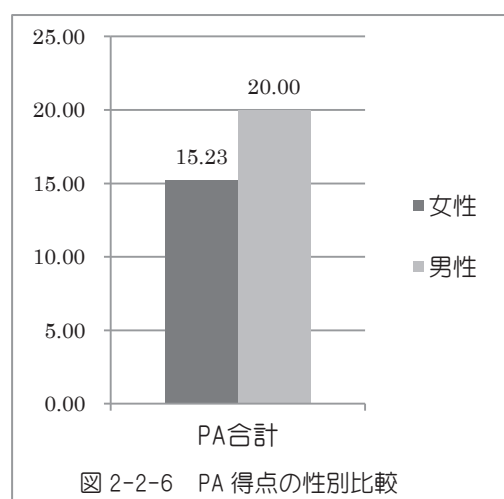
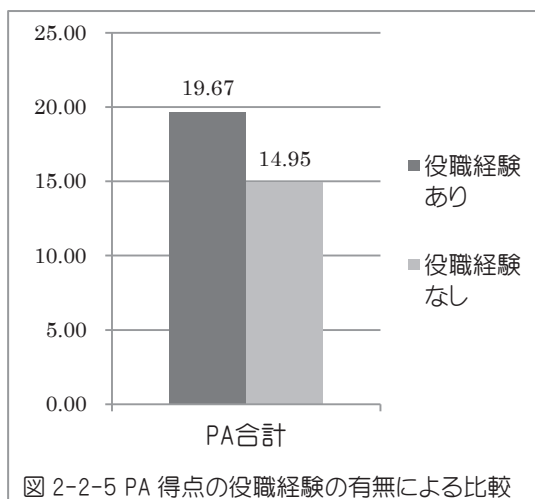
\*\*p<.01, \*p<.05

### 第三項 消耗感、達成感、脱人格化の実態

「バーンアウト」に関しては、「個人的達成感 (PA)」項目の合計得点は、役職経験がある者の方がいない者よりも高く ( $t=2.69, p<.05$ ) (図 2-2-5)、女性よりも男性の方が高かった ( $t=2.58, p<.05$ ) (図 2-2-6)。「情緒的消耗感 (EE)」項目の合計点が、活動年数2年以下よりも3年以上の者の方が高い結果となっていた ( $t=3.03, p<.01$ ) (図 2-2-7)。

効力感や成功感を示す「PA 得点」は、高いほどバーンアウト症状を示さない好ましい状態を示すが、役職経験者の方が未経験者よりも高い結果となっていた。各学校段階において、部長や副部長、委員長などの役職を経験した者は、経験していない者よりも意欲的な生き方であることが指摘されており (本間,2000)、当該活動においても役職経験は、若年層ボランティアにとってポジティブな影響を与える可能性が示唆された。女

性よりも男性の方 PA 得点が高かったことは、前述したように本研究対象における女性の不安感の強さが反映された可能性が考えられる。一方、経験年数が 2 年以下の者よりも 3 年以上の者の方が消耗感が高かったことは、経験の蓄積によって不可の高い役割を担う機会が増えたり、長期に渡って参与することによる疲労や消耗感があったことが伺える。や参加者との人間関係といった負担事象も増えることが影響していると考えられる。



「不安事項」と「バーンアウト」の関連性を検討した結果、「PA 合計得点」と「アスリートの知識」において弱い負の相関関係が確認され ( $r = -.357, p < .05$ )、自身の効力を実感できている者ほど、アスリートに関する知識に不安を感じていないことがわかった。

### 第三節 小括：若年層ボランティアの離脱促進要因の解消に向けて

本章においては下記のこと明らかとなった。

①若年層は、基本的に活動参加歴が浅く、障害者が家族にいる者の割合が低く、壮年層・高年層と比べると役職経験者が少なく、辞めたいと思った経験がある者の割合も低いという特徴があること。

②知的障害者のスポーツ活動に継続的に参加するボランティアが、活動の際に負担感が生じる要因として「コーチング課題」「人間関係」「理念乖離」「参加コスト」「責務」の5因子構造であること。

③「若年層」、「高齢層」と比べて「壮年層」のコーチング課題得点が有意に高く、人間関係に関しても、「若年層」よりも「壮年層」が有意に高いこと。

④負担感の強さには、性別、役職経験の有無は関連しないが、辞めたいと思った経験の有無と、「コーチング課題」「人間関係」「参加コスト」「責務」の負担感の強度は関連していること。

⑤直接指導に関する知識・技術と、指導による成果に関する項目については不安感が強い傾向があること。

⑥指導対象に関する知識や指導技術に不安がある者ほど、自分の有用性に関しても不安が強く、自身の貢献度や有用性に関する不安感が強い者ほど、経済的負担については不安に感じないこと。

⑦役職経験者は未経験者と比べて個人的達成感が強く、何をしてよいかわからない不安感も弱いこと。

⑧経験年数が長いほど、情緒的消耗感が強いこと。

⑨個人的達成感が強いほど、アスリートに関する知識に不安を感じていないこと。

負担感に関して5つの因子を抽出することができ、指導者には、直接的なコーチングに伴う負担感、人間関係に関する負担感、団体の理念と乖離した事象が生じることに關する負担感、参加コストに関する負担感、責務の重さに関する負担感があることが明らかとなった。「コーチング」を構成する質問項目は、「プログラムでの実際のコーチング」や「自分の時間が取れない」「作業量に差がある」などであり、これは、先行研究で指摘されているような、日常生活における諸活動との間のアンビバレンスな状況（松尾ら, 1994. 松尾, 1996. 全国社会福祉協議会, 2010）や特定人物への過重負担が伺える。このことから、「親しみやすいボランティア団体」モデルの新たな観点として、作業量の軽減や責任の分担をおこなうため、運営やスポーツ指導に必要となる業務を明確化し、分業することを追記すべきと考える。また、加入時に団体理念やチームの方針について丁寧に説明し、同意を得たうえで参加してもらうなど、理念を共有することも徹底する必要がある。

示す負担感の強度に関しては、壮年層（30代・40代）が、若年層に比べてコーチングおよび人間関係に関して、より強く感じていた。ただし、年代での差異は生じていた

が、役職経験の有無とは関連しておらず、むしろ役職経験がある者は「何をしてよいかわからない」という不安が弱いことが明らかとなった。役職経験者は個人的達成感も大きかったことから、何かしらの責任ある役割を担うという経験は、活動離脱に繋がりにくい要因の解消に肯定的に影響すると考えられる。若年層は自己の成長・学び・交友関係といった自己の利益を求めてボランティア活動に参加する傾向が強い（平岡,1986. Fitch,1987.など）ので、過剰な負担感を生じさせない程度の作業であれば、担当することでやりがいや自己有用感を感じ、自信を持って指導者として活躍できることにつながってゆくのではないだろうか。

また、前節において、若年層ボランティアはスポーツ指導にあたって自身の知識・技術について少なからず不安を感じている現状が確認されたが、特に、指導対象に関する知識やスポーツに関する知識に関する不安が強く、そのことが自身の有用感に関してまで不安に感じさせる可能性が示唆された。よって、具体的な不安感解消策としては、Hobson et al.もモデルで提示しているように、「学習の機会」を設けることが考えられ、その学習させる内容としては、若年層ボランティアが特に不安を感じている、コーチング方法や知的障害に関する事項が効果的であると考えられる。団体が定期的な学習機会を提供し、運営側の意図や指導者への要望も継続的かつ丁寧に説明できれば、「知識・技術」「何をしたらいいのかわからない」不安の軽減のみならず、組織理念からの逸脱リスクも回避できるのではないかと考える。

よって、本章における知見をまとめると、「親しみやすいボランティア団体モデル」に次の観点を組み込むことが重要であると考えられる。

- ・ 特定人物への過重負担を避けるために業務を明確化し、適切に分業する
- ・ 加入時には団体理念を丁寧に説明し、同意を得る
- ・ (過重負担にならないよう配慮しながら) やりがいや責任を伴う役割を与える
- ・ 若年層ボランティアには知的障害に関する知識や指導技術に関する学習の機会を設ける

### 第三章 若年層ボランティアはいかにして継続参加に至るのか

#### 第一節 若年層ボランティアの継続参加プロセス

##### 第一項 成功事例の抽出ースペシャルオリンピックス日本・青森の事例ー

若年層ボランティアの継続参加に至るプロセスを説明するため、知的障害者にスポーツ活動を提供している「スペシャルオリンピックス日本・青森（以下 SON・青森）」に参加している大学生 8 名を対象に、半構造化インタビューを実施した。スペシャルオリンピックス（以下 SO）は 47 都道府県でその活動が展開されているが、多くの地区は若年層のボランティアの獲得・継続的な参加を課題としている。そのようななか SON・青森は、設立当初から大学生を中心とした若年層ボランティアが多く参加しており、その多くが一過的な参加ではなく継続的に参加している点が特徴的である。

インタビューの場所は、調査協力者の居住地との距離や利便性、調査協力者にとって心身ともに負担の少ない場所であることを考慮し、不特定多数の人が立ち入ることがない、静かな環境を用意した。インタビューの時間はひとり 90 分～150 分で、データ収集期間は 2009 年 5 月～2010 年 10 月である。居住地変更などの理由で再度インタビューを実施できなかった 4 名（Info.1,3,7,8）を除き、1 年 5 カ月後に再度インタビューを実施し、得られた追加データも分析に含めた。

知的障害者に直接的にスポーツ指導を行っていることを条件とし、登録年数だけでみるのではなく実際の参加状況も判断材料として抽出した。抽出の際は、全会員の参加状況を把握している SON・青森の事務担当者及び、ボランティアリーダーの協力を得て、経験年数や役職経験など大きな偏りがないよう配慮した。調査協力者のプロフィールは表 3-1-1 のとおりである。

表 3-1-1 調査協力者のプロフィール

調査協力者	性別	経験年数	役職経験
Info.1	男	4 年	ボランティアリーダー
Info.2	女	3 年／4 年	主任コーチ／副主任コーチ
Info.3	女	2 年	副主任コーチ
Info.4	女	2 年／3 年	副主任コーチ／副主任コーチ
Info.5	女	2 年／3 年	なし／ボランティアリーダー
Info.6	女	1 年／2 年	なし／副主任コーチ
Info.7	男	1 年	なし
Info.8	男	1 年	なし

※調査協力者のプロフィールはインタビュー時のもの

※再度インタビューを行った場合スラッシュを挟み(1/2 回目)と表記

※個人が特定されないよう役職の具体的な競技名などは記載しない

分析は、「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）」（木



下,2003)を採用した。M-GTAは、主に看護や介護分野での研究に用いられてきた手法であるが、近年は、スクールカウンセラーの活動継続要因についての仮説生成(岡本・谷口,2009)や、5歳児クラスへの鬼ごっこの指導プロセスのを明らかにする研究(田中,2010)など、様々な分野で一定の成果をあげている。M-GTAの適合性については、「人間と人間とが直接的にやり取りをする社会的相互作用に関わる研究」であること、「ヒューマンサービス領域」であること、「研究対象とする現象がプロセス的性格をもっている」ことが、条件として挙げられている(木下,2003)。本研究は、「知的障害者のスポーツ活動」というヒューマンサービス領域で、ボランティアの「継続参加のプロセス」を明らかにすることを試みるものであり、方法論としての適合性があると判断できたためM-GTAを採用した。

具体的には、まず、分析のテーマを「知的障害者のスポーツ活動に参加する若年層ボランティアの継続参加プロセス」と設定した。続いて、最も情報量の豊富な調査協力者のインタビューデータ(Info.1)に着目し、テーマに照らして重要と思われた部分の意味を検討し、理論構成の最小単位となる概念を生成した。概念を分析ワークシートに記載し、2例目以降は、Info.1との類似例や対極例を意識しながら、新たな概念を生成していった。次に、概念同士の関係性について検討し、複数の概念を説明するより抽象度の高いまとまりであるカテゴリーを生成した。カテゴリーが生成された段階で、カテゴリー同士、またはカテゴリーと概念との関係性や時系列について解釈を行い、結果図としてまとめた。

信頼性を担保するため、インタビューデータをまとめた後に、調査協力者にデータの解釈に齟齬がないか確認した。さらに、質的研究法に造詣が深い研究者によるスーパービジョンや、研究者や学生による教育・福祉に関する自主ゼミの場において調査結果を報告し解釈についての意見を仰ぐ手続きも踏んだ。

なお、調査協力者にはプライバシーの厳守及び、研究の趣旨、録音・フィールドノートの作成・分析手順・結果の公開といったデータの扱いについて説明し、すべての事項に同意する意思の確認を行い、協力の了承を得たうえで実施している。

## 第二項 継続参加プロセスの概要—ストーリーライン—

分析結果を図3-1-1に示す。文中では、インタビューデータの重要と思われる部分を解釈し抽象化した『概念』を『 』、概念間の関係性を示す[サブカテゴリー]を[ ]、それらを説明するより大きな括りである【コアカテゴリー】を【 」、調査協力者の具体的回答を「 」の記号を用いて表記する。回答内の( )は筆者による補足である。またSOにおいては、知的障害者をアスリート、保護者をファミリーと呼称しており、調査協力者もこれらの用語を用いていたため、具体的回答の部分はそのまま表記している。分析結果の概要を簡潔に文章化したストーリーラインを以下に述べる。

若年層ボランティアは、【多様な参加動機】をもちながら知的障害者のスポーツ

活動へ参加し、活動のなかで【ジレンマの蓄積】を経験し、それを通して【指導者としての使命感】を形成するに至っていた。また、使命感が形成されることによって、スポーツ指導の実績ではなく社会的地位によって評価される【日常生活上の身分から評価されることへの不満】が生じていた。特に注目されるプロセスは、【ジレンマの蓄積】と、【日常生活上の身分から評価されることへの不満】の2点である。【ジレンマの蓄積】については、継続参加の背景には単純に楽しいというポジティブな感情・意識だけでなく、同時に負担感も抱えているということを示している。また、【日常生活上の身分から評価されることへの不満】は、【指導者としての使命感】を形成することによって、学生という社会的地位が自己の評価に影響することに不満を感じるようになっていくことを示している。

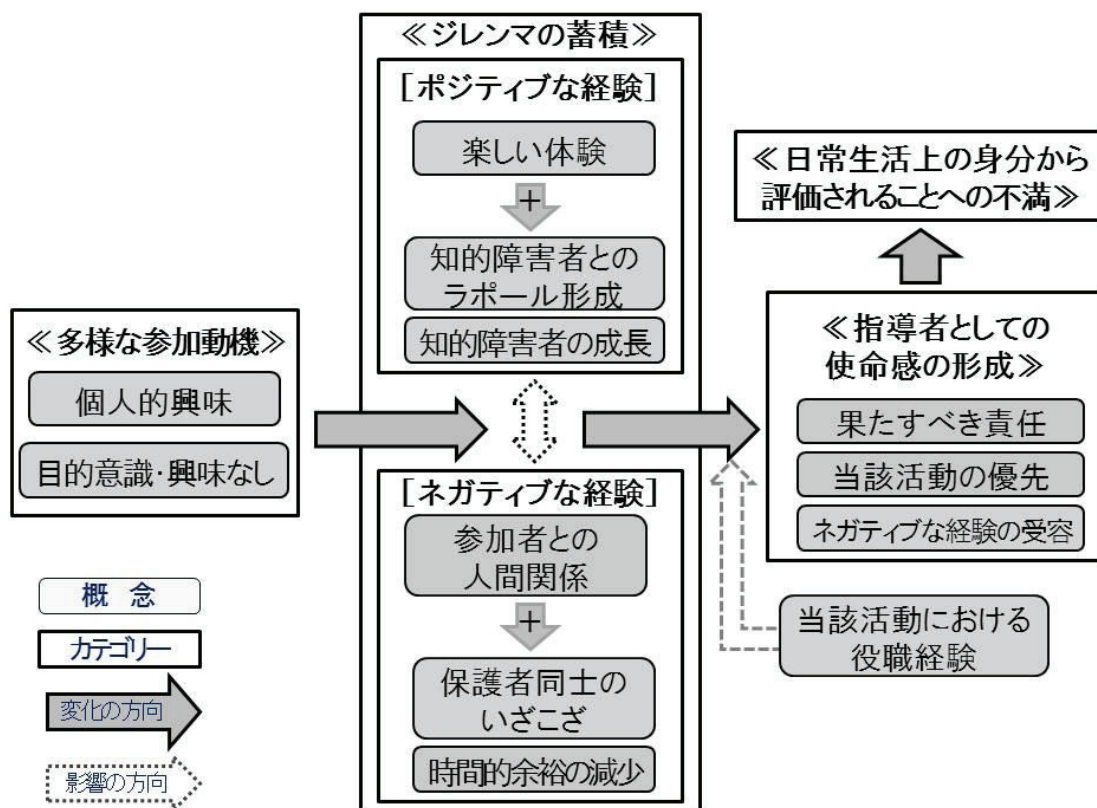


図 3-1-1 若年層ボランティアの継続参加プロセス

### 第三項 参加のきっかけは多様

以下、カテゴリーに対応させて、詳細の検討をすすめていく。まず、若年層ボランティアは【多様な参加動機】があることが確認された。これらは個人の興味や関心が、当該活動と合致していたため積極的に選択された『個人的興味・関心』と、特に目的や興味・関心があるわけではなく、消極的な動機で参加を決めた『目的意識・興味なし』の二つに大別することができた。

まず『個人的興味』であるが、これは「ボランティア系を探していたので (Info.2)」

「小中と自閉症の男の子と 9 年間一緒だったんですよ、それで（自閉症・知的障害に）興味あって（Info.4）」「スポーツ好きだったんで（Info.2）」など、個人の興味や関心が、当該活動と合致していたため積極的に選択されたものである。一方の『目的意識・興味なし』は、「(行ってみただ中で) 他におもしろそうなサークルなかったんで（Info.1）」「先輩が 1 年生いる前で説明してたのがきっかけで、とりあえず皆で行ってみよっかって（Info.6）」「なんとなく（Info.5）」など、特に目的や興味・関心があるわけではなく、消極的な動機で参加を決めたというものである。

若年層のボランティア活動への参加動機について先行研究では、自己の学びや豊かな経験を得たいなど利己的な動機が確認されることが報告されており（(財)内外学生センター,1999. 谷田,2001. 加藤ら,2004）、今回の若年層ボランティアの結果についても利己的な動機は確認された。一方で、松本ら（2004）や田引（2008）などの、障害者スポーツにおけるボランティアの参加動機調査では確認されていない、『目的意識・興味なし』というケースがみられたことは特徴的であろう。いずれにしても、共通して、社会や他者のためになりたいという利他的な動機が参加動機の根幹をなすものとはなっていなかった。

#### 第四項 雪だるま式に増大する「ポジティブ経験」と「ネガティブ経験」ージレンマ経験の蓄積ー

継続的な参加をしている若年層ボランティアは、[ポジティブな経験]と[ネガティブな経験]の両方を経験し、【ジレンマの蓄積】を生じさせていた。

[ポジティブな経験]は、活動へ参加した当初は『楽しい経験』という一過性のものであったが、参加を重ねるごとに、『知的障害者とのラポール形成』『知的障害者の成長』といった長期的にかかわらねば得られない経験が継続参加につながる新たな動機として加わっていた。

『楽しい経験』とは、単純に、活動に何か楽しみを見出せたということである。「何もできなかったんですけど、普通にバスケ自体好きだし、楽しいんで、もっかい行ってみようかな的な（Info.6）」「先輩方皆いい人で、飲みとか楽しいから（Info.8）」など、活動のどの部分が楽しみをもたらしたかはそれぞれでありながらも、楽しい経験が次回以降の参加を促していた。これは、知的障害者へのスポーツ指導という活動の本質の部分に楽しみを見出せなくとも、当該活動の関係者という括りの中でポジティブな経験ができれば、それが当該活動以外の場面であっても当該活動の楽しさとして評価されることを示唆している。

『知的障害者とのラポール形成』とは文字通り、活動に参加している知的障害者とラポールを形成できたとボランティア本人が自覚し、喜びを感じることである。「(知的障害者の)Hさんに名前覚えてもらって、それがすごい嬉しくて(Info.7)」、「(自分が休んだ時に)前いたお姉さんは？って聞いてみたいで、覚えてくれてた一みたいな(Info.3)」など、知的障害者に認識してもらえたり関わり方が

親和的に変化したことが嬉しく、継続的な参加を動機づけることになっていた。

『知的障害者の成長』とは、自分が指導している知的障害者の成長を実感し、手ごたえや喜びを感じることである。「うまくなってるってか、アスリートの成長見てると嬉しいってゆーか (Info.6)」、「毎回来てくれるようになったし、プログラムに対する姿勢が変わったっていうか (Info.5)」、「背おっきくなったねーとか、ボラ同士で話してて (Info.4)」というような、技術や取り組む姿勢といったスポーツに関することのみならず、様々な面で成長が確認できることが、一層継続的な参加の動機づけとなっていた。

「たいてい施設のイベントとか、その時だけのボラ (ボランティア) じゃないですか、継続的に触れ合っていけるのが他のボラではあまり経験できない (Info.4)」というように、『知的障害者とのラポール形成』『知的障害者の成長』という継続的に参加することによって初めて得ることのできる感動が、より一層の継続を誘発しているものと考えられる。妹尾 (2008) によると、ボランティア活動への継続は、参加動機が自発的かどうかにかかわらず活動を通じて自らの行動に役立ちを実感できることが動機付けになること、また、若者は目前の被援助者に及ぶ援助の効果で自らの活動の良し悪しを決めることが示唆されていた。「なんとなく (Info.5)」参加してみた者もいるような、『多様な参加動機』でありながら継続的な参加を可能とした背景には、参加してみて『楽しい経験』をし、次回以降の参加意欲を促進され、回を重ねるうちに『知的障害者とのラポール形成』『知的障害者の成長』という、新たな参加意欲を促進する要因が生じたことが示唆される。

ポジティブな経験を重ね、継続参加の意欲が高まる一方で、[ネガティブな経験]も同時に生じている。[ネガティブな経験]も、参加当初は一樣に『参加者との人間関係』がうまく築けないという問題を抱えていたが、人間関係が築けるようになってからは『保護者同士のいざこざ』がみえてきたり、『時間的余裕の減少』が負担感を生じさせたりと、時期による変化が生じていた。

『参加者との人間関係』とは、まだ環境に慣れていない状態で、周囲の人といかにして打ち解けるかと四苦八苦することが負担となっていることである。「(保護者に) めっちゃ見られてて怖いときありました (Info.6)」、「一年生のときとかだったら、ファミリー (保護者) の人との関係とかも考えたんですけど、もう関係もできてきたし、全然負担には感じないです (Info.5)」など、スポーツ指導を行う知的障害者とうまくかかわれないことの他に、保護者との関わりについても負担感を生じさせていたことがうかがえた。

『保護者同士のいざこざ』とは、ボランティア自身と保護者ではなく、保護者同士の関係性の不良について負担感を生じさせていることである。「あと負担・・・はファミリー (保護者) 同士の人間関係、いざこざ・・・ですね (Info.1)」、「AさんとBさん (保護者の個人名) めっちゃ仲悪いじゃないですか (Info.3)」など、一部保護者に確執があることを知り、そのことがスポーツ指導のやりにくさにつながっていると解釈できる。気持ちの面でやりにくく感じるだけでなく、「(会議中

保護者が愚痴を言う旨の話をし) 関係ない話とかもでてくるじゃないですか、そっちの方が長いんで (Info.2)」というように、指導内容に関する会議やスポーツ指導場面など、指導者としての実際の業務においても支障が生じていることが見受けられた。

『時間的余裕の減少』とは、参加を重ねるうちに徐々に組織の一員として認められるようになり、担わなければならない作業が増え、結果、時間的な余裕がなくなってしまうことに負担感を感じることである。「時間の負担大きくなりました (Info.1)」、「テストとかあると時間が・・・ (Info.6)」など、単純に作業に費やす時間が増えたことが負担感を生じさせる場合と、アルバイトや学業など自身の生活場面との兼ね合いにおいて支障をきたすことに負担感を生じさせる場合とが確認された。「最初の頃は時間よりも気持ちの面での負担が大きかったんですけど、今は逆ですね。時間の負担は大きくなりました (Info.1)」という回答が顕著に示すように、初期は『参加者との人間関係』がうまく築けていないことで負担感が生じていたが、継続するにつれ『保護者同士のいざこざ』があることが目についたり、慣れてきたことで様々な作業を担わされることから『時間的余裕の減少』が新たな負担となっていた。

#### 第五項 指導者使命感の形成とそれによる「レッテル評価」への不満

若年層ボランティアは、これまでは『楽しい経験』ができたことや、『知的障害者の成長』が確認できる喜びによって、次回以降の参加意欲がわいていた。しかし、継続的な参加をするうちに【指導者としての使命感の形成】に至り、そのことも継続参加の意欲に影響を与えるようになっていた。具体的には『果たすべき責任』、『当該活動の優先』、『ネガティブな経験の受容』が確認されたことから、使命感が形成されたと判断した。

『果たすべき責任』とは、知的障害者にスポーツ指導をする以上、指導者としてやらねばならないこと、果たさねばならない責任があるという認識をすることである。「責任を感じるようになりなった (Info.5)」「組織として考えて義務として今提供しているサービスの質を落とせない、なのでやらなきゃならない (Info.1)」など、これまでは、自分のことだけ、または自分のことを優先的に考えていたのが、組織や活動全体における自らの役割という点を重視するよう変化したことがわかる。

『当該活動の優先』とは、日常生活と SO 活動との兼ね合いを考えた際、SO 活動の予定を優先してスケジュールを組んでいることである。具体的に、「基本的には SO は (優先順位として) 一番最初にきて、あとは (予定に) 入れないようってか、考えてない (Info.5)」「日曜日は SO で、2,3 回は T 園 (施設) の運動会とか日曜日に重なったんで、そっち行ったんですけど、今は土曜日にそういうボランティアとか探してます (Info.4)」などの回答が得られていた。SO 活動のある日は、活動日時が重なる他のボランティアサークルに入らない、アルバイトのシフ

トを入れないようにするといった時間的な調整をしており、中には、「(交際相手が SO 休んで遊ぼうと誘ってきた場合でも) それを理解してくれてる人じゃないと(付き合えない) (Info.3)」と回答する者もあった。

『ネガティブな経験の受容』とは、先に述べた『保護者同士のいざこざ』『時間的余裕の減少』という負担感を生じさせている事象を、活動をする上で止むを得ないことであると認識するようになることである。「負担て思うのは、それは楽しい事のためだし、負担とは言ってるけど、それは最後には楽しいことになってるんで、そんなに苦ではなくて (Info.3)」、「別に SO のことがあって動くのはかまわないんですけど、負担でも何でもありません (Info.2)」というように、ネガティブな経験があることを認めながらも、それから避けようとするのではなく、受容するようになっていく。むしろ、楽しい経験をするためには避けて通れない、必要なコストであるという認識すらされていた。

これらのカテゴリーは、若年層ボランティアの意識に変化が生じていることを示している。SO 活動への参加当初は、自らの興味や楽しい経験ができるといった、自己の利益になることが継続参加意思に影響を与えていたが、活動を継続するなかで、組織や参加者のために頑張りたい・頑張らねばならないという利他的な動機が生じている。河崎ら(2011)は、キャリア教育の実践としてボランティア活動に参加した大学生の意識について、複数回の葛藤経験を経た結果、最終的に向上心を持って取り組めるようになり、明確な目標設定へとつながった事例を報告している。本研究においても、[ネガティブな経験]をすることによって具体的な問題点について意識する機会が生じ、自らの利益や楽しみを実感できる活動であるため、問題を解決・改善しようという意識が芽生えたと解釈できるのではないだろうか。[ポジティブな経験]が継続意欲を高めることはもちろん、[ネガティブな経験]も【指導者としての使命感】形成に関係しているものと思われる。

ボランティアを対象とした研究では、組織への帰属意識が継続意欲、積極的活動意欲に影響を及ぼすことが報告されている(安藤・広瀬,1999)。今回の若年層ボランティアも、活動に「参加」しているのではなく、指導者として SO という組織に「所属」しているという意識が醸成されたことが、継続参加を促す要因になったと判断できるのではないだろうか。一方では負担感を生じさせつつも、指導者であるという自負、自分が担っている作業の重要さの自覚が、継続的な参加をより強く決意させていると考えられる。

また、「これるときに来ればいっかっていう人との熱の差を、サブリーダーやっから感じます (Info.3)」、「ボランティアリーダーってのもありますし、今までにはただ取り組んでいるだけってのもあったんですけど、けど今は、ボランティア(全体)のこともみながら、どうしていこうっていうふうに考える (Info.5)」、「サブコーチになって、プレッシャーってかそこまでズシッて感じじゃないんですけど、ちょっと。前よりはちゃんとやらなきゃみたいな (Info.6)」などの回答からは、【指導者としての使命感】の形成は、『役職経験』があるとより強化される

ことも示唆された。しかし、役職に就いて変わったという回答がある一方で、役職経験がない調査協力者でも【指導者としての使命感】が形成されていたことから、『役職経験』は【指導者としての使命感】形成に影響を及ぼすが、必ずしも不可欠なものであるとは判断できない。

【指導者としての使命感】形成後、組織への貢献の度合いや実績ではなく、学生という身分が評価に影響を与えていることについて不満をもつ、【日常生活上の身分から評価されることへの不満】が生じていた。これは、SON・青森においては、若年層ボランティアのほとんどが大学生であったことに起因するものであろう。回答例としては「学生には任せられない、同じことやってても学生だからと信頼されないのが悔しいです (Info.1)」、「やっぱり学生という甘く見られる、学生だから子ども扱いされる、とかはあります (Info.2)」などが挙げられる。このことは、各人が強い自覚と使命感をもってスポーツ指導を行っていることから、単純に日常生活における社会的地位から評価されることを不快に思っていると判断できるだろう。不満の背景として、使命感が形成された段階ではボランティア活動を極めて職業的に捉えていることが確認される。自己の成長や余暇の充実のために、楽しみながら関わっていながらも、活動場面においては頭を切り替え、ビジネスのように捉えているのである。だからこそ、『果たすべき責任』を自覚し、『当該活動の優先』という意識をもち、『ネガティブな経験の受容』を可能とし、その分実績ではなく、日常生活上の身分によって評価されることに不満を抱くのではないかと考えられる。

## 第二節 小括：若年層ボランティアの継続参加にむけた示唆

本章においては、下記のこと明らかとなった。

①若年層ボランティアは、知的障害者のスポーツ活動に参加する動機は様々であるが、何か楽しみを見出すことができれば継続的な参加が期待できること。

②活動を継続するほど、より楽しい経験・感動的な経験ができるが、同時に負担感を生じさせる事象も増えるというジレンマが生じていること。

③楽しいことだけではなく、負担感が生じるような経験もすることで指導者としての使命感を形成させ、それが継続意欲をより強化する要因になりえること。

④指導者としての使命感を形成した若年層ボランティアは、日常生活における社会的地位など指導者としての実績以外の要因から評価されることに不満をもつこと。

内藤（2007）の調査では、スポーツ・体育系の大学生がスポーツ・ボランティアをしたことがない理由として「行う機会がない」、「情報がない」が挙げられており、スポーツ組織側が十分なPR活動ができていないという実態が伺える。今回の結果では、活動内容に興味のなかった若年層ボランティアでも、一度楽しい経験をするを契機に継続的に参加し、ボランティア指導者として責任もって関わる事ができていた。このことから、当該活動への関心が高くない層に対し

でも、情報を与え、参加機会を設け、楽しい経験ややりがいを感じてもらうようなアプローチが必要であることが考えられる。

また、スポーツ指導者として活動しているという自負がある故、日常生活上の身分ありきで評価されることに不満が生じていることから、スポーツ指導中は各自が「当該活動における役割」に徹することが強調されるべきであろう。これは、役割分担が曖昧になりがちなボランティアな活動において、さらに事故や怪我のリスクを伴うスポーツ領域において、前章で述べたような「分業」の推進・徹底や、インシデントの抑止にもつながりうるものと考えられる。

また、使命感の形成にあたって、役職経験は必須要件とまでは言えなかったものの、肯定的に影響していることが確認された。第二章でも述べたように、ある程度参加経験を重ねたボランティアに対しては、多少の負荷がかかっても何かしら責任ある業務を担わせることが、やりがいや自己有用感を感じさせ、結果として組織への帰属意識や継続性を高めることにつながるということが伺える。

以上のことから、若年層の獲得、定着を目指すには、「親しみやすいボランティア団体モデル」に次の観点を組み込むことを提唱する。

- ・強い参加動機のない者に対してもアプローチし、「やってみやすい雰囲気」と「楽しめる」ポイントを作る
  - ・「指導者」に徹することの重要性を説明する
  - ・(過重負担にならないよう配慮しながら) やりがいや責任を伴う役割を与える
- ※第二章でも確認



## 第四章 当事者が求めるボランティアの指導力

### 第一節 知的障害者本人の求める指導者像

#### 第一項 調査協力者と方法

本研究においては、A 県 H 市「知的障害者バスケットボールチーム K (以下、チーム K)」に所属する選手 8 名を対象とし半構造化インタビューを実施した。チーム K には選手 14 名、コーチ約 20 名の登録があり、H 市内では唯一の知的障害者のバスケットボールチームである (2013 年 12 月時点)。調査協力者は、チーム K のヘッドコーチ及びサブヘッドコーチ、保護者らの協力を得て、言語能力やインタビュー実施時期の心身の状態、日々のトレーニングへの参加率などを考慮して抽出し、その中で調査への協力が得られた者とした。調査協力者のプロフィールは表 2-1 の通りである。女性選手の登録は 1 名あるものの 1 年以上トレーニングや懇親会等への参加実態がないことから調査協力者として除外したため、今回は全て男性となっている。また、調査協力者 H には厳密には知的障害の診断はないものの、発達障害 (ADHD) があり、日頃他のメンバーと同じトレーニングをしている。

インタビューの場所は、調査協力者の居住地との距離や利便性、調査協力者にとって心身ともに負担の少ない場所であること、不特定多数の人の立ち入りが無いことを条件とし、H 市内にある大学の一室とした。インタビュー時間は一人あたり約 50~60 分、調査期間は 2013 年 2 月~5 月である。

インタビュー内容は、活動ニーズに関する 4 項目 (「①バスケットボールは楽しいか、(楽しい・楽しくないいずれにしても) それはなぜか」「②バスケットボールをはじめたことで変化したことはあるか」「③バスケットボールがない日は何をしているか」「④バスケットボール以外でやりたいことはあるか) と、指導者ニーズに関する 4 項目 (「⑤今のコーチたちについてどう思うか」「⑥若いコーチと年配のコーチ、どっちがいいか」「⑦どのような人にコーチになってほしいか」「⑧どのような人にはコーチになってほしくないか) であり、大枠で質問項目は設けても基本的に自由に語ってもらうよう努め、全項目においてより簡素な言葉で問いかけた。インタビューの場所は H 市内にある大学の一室で、時間は一人あたり約 50~60 分、データの収取期間は 2013 年 2 月~5 月である。

インタビューの進め方としては、まず、調査協力者が過度な緊張状態に陥ることなく自身の考えを述べるような環境づくりを第一とした。インタビュー開始前に世間話や本人の好きな話題などをしたり、所々雑談をしたり、脱線しても積極的に話をしていく場合は継続させたりなど、調査協力者が話しやすい雰囲気を作ることを第一とした。また、調査協力者が質問の意味を理解しやすいように、質問は簡単な言葉で端的に問うよう努め、質問の意図が伝わりにくい場合は、趣旨を変えずに、言い回しや言葉を変えて言い直した。質問②や⑤、⑦⑧などの個人の考えを問う質問については、調査協力者からできるだけ自由な回答を得るため、選択肢を与えるようなことはせず、あえて抽象的に問

うことにした。

本研究においては、分析手順が確立されておりデータに立脚した分析ができる点から M-GTA の手法を参考にして分析をすすめることとした。具体的には、インタビューによって得られた逐語録の文脈から意味のまとまりを判断し、そのまとまりを説明するラベルである「概念」名を当てはめていった。全ての概念が生成された後、各概念の相違点を考慮し、複数概念をより抽象度の高いまとまりである「カテゴリー」としてまとめていった。

調査協力者には、プライバシーの厳守、研究の趣旨・目的・意義、インタビュー時の録音及びフィールドノートの作成、結果の公開について伝え、全ての事項に同意する場合、同意書の提出をもって研究協力の了承とした。さらに、どの段階でも研究協力の中止ができること、それによるペナルティがないことも説明した。同意書は保護者用と調査協力者用とで 2 枚用意し、未成年の調査協力者に関しては原則両方の提出がなければ同意とみなすことはせず、成人の調査協力者についてもできる限り保護者からの同意書も得られるように依頼した。調査協力者用の同意書は、読解しやすいように文字フォントを大きめにし、できる限り簡単な表現を用い、漢字には全てルビをふった。全ての調査協力者とその保護者からの同意書の提出を確認している。

把握調査協力者が明瞭な言葉で回答しなかった場合（例えば、「楽しい？」という質問に対して、頷きながら「ええ・・・」と肯定とも単なる相槌とも取れる発言をした場合）や、発現が反復とも解釈できる場合（例えば、「楽しい？」という質問に対して「楽しい」など）は、調査協力者の自発的な意見であるか疑問が残るため、全ての質問を終了した後再度同様の質問をし、回答の内容が一致しているかどうか確認した。

表 4-1-1 調査協力者のプロフィール

協力者	性別	年齢	参加年数	所属・勤務先
A	男	15	6 年	高校生
B	男	21	6 年	作業所勤務
C	男	18	7 年	高校生
D	男	16	9 年	高校生
E	男	22	6 年	作業所勤務
F	男	34	10 年	更生施設
G	男	26	4 年	農園勤務
H	男	13	7 年	中学生

## 第二項 当事者調査の意義

まず、知的障害者本人に対してインタビューによる調査を行うことの意義について整理しておきたい。障害者基本法の第二条において「障害者」は下記のように定義されているが、「知的障害」の法律上の厳格な定義はない。

**障害者 身体障害、知的障害、精神障害(発達障害を含む。)その他の心身の機能の障害(以下「障害」と総称する。)がある者であつて、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものをいう。(障害者基本法 第一章 総則 第二条 一)**

しかし、アメリカ精神医学会の診断マニュアル DSM-5 においては、知的障害の診断基準は「学力領域 (Conceptual Domain)」、「社会性領域 (Social Domain)」、「生活自立領域 (Practical Domain)」において、臨床的に総合的に判断することに重きを置いている。つまり、知的障害者は、学力や社会性に関して著しい制限が認められる者であると解釈できる。そうであるならば、言語を用いてコミュニケーションしながら進められる「インタビュー」によってデータを収集することの、方法論的妥当性について検討の必要があるかもしれない。

実際、知的障害者の余暇・スポーツに関する研究では、保護者や教員、施設職員など関係性の強い周辺者を対象としているケースが多く確認される (山田,1990. 石黒ら,1999. 伊藤ら,2007. など)。しかし、主観的な福利に関して代理者が応答することには本質的な部分に欠落があるという指摘 (Cummins, 2002) や、代理者によって報告内容に差異が生じることから、当事者の意見として置き換えるべきではないという指摘 (Umb-Carlsson, 2006.) もある。また、当事者から得られたデータを分析することは、当事者に寄り添ったサービスの提供に寄与するだけでなく、阿部 (2011) が述べるように、専門職側によって固定化された理論に新たな知見を加える可能性をもつ。回答者が真実を述べやすくなる工夫を講じることは研究者の責務であるが、回答者からのアウトプットが当人の思考を反映しているかどうかを疑っている、社会調査はおこなうことができない。我が国が平成 26 年に批准した障害者権利条約の制定にあたっては「Nothing About Us Without Us (我々抜きに、我々のことを決めるなかれ)」がスローガンとして掲げられており、条約では、障害者は普遍的人権の主体として扱われている。これらのことに鑑みても、知的障害者のスポーツマネジメントに提言する本研究においては、知的障害者本人からデータを収集し考察に含めることは極めて重要な手続きであると考えられる。

### 第三項 指導者に求める「快活さ」と「確かな指導力」

文中では、記述内容の意味を解釈し抽象化した『概念』を『 』、複数概念を説明するより大きな括りである【カテゴリ】を【 】を用いて標記することとする。

「どのような人にコーチになってほしいか」という質問に対しては、大別して【親しみやすい人柄】と【確かな指導力】と解釈できる要素が抽出された (表 4-1-2)。**【親しみやすい人柄】**は明るさや朗らかさ、気さくさに関する言及である『明朗快活さ』の概念と、チームの活動に対する意欲の高さを示す概念、『熱意がある』から構成されている。**【確かな指導力】**は、指導者自身も競技能力が高く、選手に益をもたらしてくれることを求める内容であり、『糧になることを教えてくれる』、『競技の専門性』の 2 つの概念から構成されて

いる。彼らは、パーソナリティとしては明朗快活で熱意があり、基本的な身体能力の高さや、バスケットボールの豊かな経験といった競技に関する専門性が高い指導者を求めていることがわかった。

表 4-1-2 指導者に求める要素

親しみやすい 人柄	明朗快活さ	んと、それと朗らかな性格の人。あと、キレ者。頭のキれる人(A)
		ま、でもまずは明るい性格の人がいいです。活発な人、元気な人(A)
		んと、誰でも仲良くできそつな人(C)
		徐々に厳しくなってくるとちゃんと指導やる人いいですね。ええ、徐々に徐々にって厳しくなってく。最初っから厳しいのはあんまり(F)
		あの、いろんな考えを聞いてくれる人(F)
		やさしい人。やさしい人も、ちょこつとなら厳しい人もいればいかなって思います(G)
		それから、面白い人。気軽に話したり(H)
	熱意がある	0さんみたく言うことはビシッって言って教える人(C)
		話しかけてくれるところもあるけど、ちゃんと真面目に取り組んでいるというのも大事。そういう人が(D)
		いつもチームのことをよく考えて(E)
確かな指導力	糧になることを 教えてくれる	社会に出たらどうということが大事か教えてくれる人がいいのではと(A)
		楽しく教えられて技術も上がるコーチ(C)
		色んなアドバイスしてくれる人(E)
		やっぱり他の人に勝てるような技術を教えてくれる人がいい(C)
		そしてなんかその人を強くしてくれるみたいな人がコーチだったらいいのかななんて(D)
	競技の専門性	他はやっぱりバスケがうまい人(A)
		んー、そつですね。バスケの経験が豊富で、もっと色々な公式の試合とかのこととかわかっているような人ですかね(E)
		んつと、結構バスケット経験してる人とか、あと動きが速い人とか、こう、ま、(バスケを)やってなくてもちょつとくらいうまいかなって人もいますけど。動ける人(G)
		この前の、外国人の来てくれた人みたいに、背高くて、何もかも上手な人(H)

また、指導者としてふさわしくない要素としては、『覇気がない』、『軽薄な印象』、『怒りっぽい』という【親しみにくい人柄】であることと、【技術・指導力がない】ことが挙げられた(表 4-1-3)。これらは、前述した求める指導者像とは逆の価値であることから、逆説的にも指導者には【親しみやすい人柄】と【確かな指導力】を求めていることが確認された。

加えて、調査協力者たちは、現在指導を受けているボランティアに対しては、指導者に求める資質で挙げられた要素が備わっていると認識しており、非常に好意的・肯定的に評価していることがわかった(表 4-1-4)。ここからも、指導者に求める要素については一貫性ある回答をしていることが伺える。

表 4-1-3 指導者にふさわしくない要素

高い親和性	感謝	皆さんいつもいつも、ご苦労さまですって感じですよほんと。どもども(A) ありがたいです(D) 今のコーチの皆さんは皆やさしいし、説明もよくわかりやすく教えてくれるので、ほんと助かってますね(G)
	親しみ	ただ、あなたはほんとに大学生？って感じの老けてる人がいる(笑)(A) 仲良くやってるんじゃないすか(B) みんな、やさしい(C) ポケモンとかモンハン一緒にやったり、おもしろい(C) 今のコーチの人は、すごく、あのこれからも続けてほしいと思います(F) 普通にやさしくて、運動できるから、嫌いとかはない(H)
確かな指導技術	技術・運動能力の称賛	バスケうまい人は、こりゃ相手チームとかなったとき、こりゃ勝てないって最初に戦意喪失ですよ(A) すごいと思う。運動、動きが速いし(C) 結構皆コーチさんたちも動きも結構速いなあって思う人いるので。皆うまいなあって(G)
	的確な指導	何て言うかな、教え方がうまい。理解してるところがすごくうまいと思って。(F) バスケ教えるのに障害者の人たちそれぞれの特徴に合わせて教えてくれるとこ(F) 悪くないですね。ちゃんと教えてくれるので、いいと思っています(D) えー、チームのみんなひとりひとりをちゃんと、ルールと教えたり、今後のこと考えて練習メニューとか。そういうのをみっちりやってくれる。それですかね(E)

表 4-1-4 現在の指導者に対する評価

親しみにくい人柄	覇気がない	冷たすぎる人。かと言って松岡修造みたいに熱すぎる人もどーかかって思いますがけどね。死んだ魚のような目の人、やる気のない人とか(A) 半分ふざけたり。声ぼそぼそって小さかったりとか、それですね(E) 途中でなげちゃう人。どーでもいいやって気持ちになる人(F) なんだろう、暗い人とか(H)
	軽薄な印象	あ、それとチャラチャラした人。見た目とか性格(A) 遊び半分でやるって人も。やっぱり、続けて、ずっと続けてやるぞって気持ちない人ですね。個人情報外に漏らしちゃう(F) あんまり、いやがらない人(が良し)。最後まで説明して、しっかり教えてってやってくれないと(G)
	怒りっぽい	怒られるのが嫌です。じゃないとやる気をなくしてしまう。傷つく、余計やる気でなくなる(B) やっぱり、すぐ怒る人はだめだと思う。うん、厳しすぎる人はちょっと(C) なんか今のコーチにはいないですけど、ポールを上にあげてなんか、それで、手のひらをグーにしてパンチしたりする人。そういう人は向いてないなと思います。乱暴な(D) んー、そですね。どなったり、自分のことしか考えない人(E) あんまり厳しくはないほうがいいかなあ(H)
技術・指導力がない	技術・指導力がない	あと、いないとは思んですけど、逆に僕らに教わっちゃったりなんかして。そういう人いたら何のために来たのって感じですよ(A) コーチなのにどうしたらうまくなるか教えられない人(C) ああ、もう一言でいえばコケる人。なんか、もうパスした方が違う方向に行く。後ろからなんか投げるのあるじゃないですか(速攻練習のこと)。あれ例えば股間に当たるとか(笑)(D) バスケ、あんまりうまく説明できなくしてる人とか(G)

調査協力者は、激昂する指導者を望まない一方で、「言うことはビシって言って教える人 (C)」、「その人を強くしてくれるみたいな人がコーチだったらいい (D)」、「徐々に厳しくなってちゃんと指導やる人いい (F)」など、スキルアップへの意欲や、練習負荷や指導の厳しさを伴うことを承知している回答をしていた。この背景としては、バスケットボール技術の上達に対する強い熱意が伺える。「うまくなりたい」と考えているからこそ、叱責されても仕方がない状況、またはハードな練習をする必要性を理解しており、だからこそ適切な指導ができない指導者や、技術が備わっていない指導者に対しては遠慮願いたいという意識があるのではないだろうか。

さらに、指導者の年齢に関しては、若年層を望む者もいれば、高年層もいた方が良くと考える者もあり、指導者の年齢は特に問わないという者もいた。全体的な傾向として年代そのものが指導者としての資質として影響しないようであるが、前述したような要素を備えてほしいという意図から、間接的に若年層に対する期待が伺えた。特に指導者の接しやすさは、社会性や意思表示に困難性がある知的障害者にとっては重要な要素であることが推察された。

表 4-1-5 指導者の世代に関する意識

若い指導者への期待	若い人は動きが良い	若い人の方がいいです。バスケめっちゃめっちゃうまいし (A) 若い人、現在若い人ばかりでしょ (B) そーだな、僕はどっちでも構わないですけど。若い人は体が、動きがいいとか。年いった人はなんか、くずれるかなと (D) 年齢差あると、あれ、年いった人とか、バスあるじゃないですか。あれ、そういうのとかの力加減があんまできてないというか、それが心配 (D) どちらでも、いいんじゃないですかね。若い人だけ動きいいので、体力ある人多い。年齢はそう気にしないですね (G)
	若い人とは関わりやすい	年ってる人は厳しいイメージがあるので。大人より話しやすいです。人によって冗談言える時と言えないときもあつたりしますがね (A) 半々がいい。若者多い方がゲームの話とかできて、できるけど、ベテランもいたらいいと思う (C) 若い人。もっとボランティアの人増えてほしい。自分と年一緒くらいの人いいですね。あの、やっぱり話しやすいところがあります (F) 若い人たちにこれから世の中に出ていくのに障害者問題とか学校の先生なるのにいい勉強になるんじゃないかとか、福祉関係とかそういうところでね (F)
	年齢は気にしないが若い人は関わりやすい	特にどっちでも。若い人はまあ悪くない感じです。話して (E) どっちでも。若い人の方が年取ってる人よりも接しやすいけど。年取ってても嫌とかじゃないから。あまり別にどっちでも (H)

#### 第四項 コミュニケートの場としてのスポーツ

今回調査協力者となった知的障害者は、全員がチーム K への参加を「楽しい (A・B・C・D・E・F・G・H)」と回答しており、【バスケットをプレーすること】と【バスケットを通じた交流】を魅力と感じていることが伺えた。

また、バスケットボールを始めたことによって生じた変化として、【バスケット技術の向上】、【交友関係の広がり】、【心身の肯定的諸変化】を認識していた。【交友関係の広がり】は「み

んなど会話が続くようになった (G)」といった『交友関係の質的变化』と、「友達が増えていく (C)」などの『交友関係の量的変化』から構成されている。【心身の肯定的諸変化】は、『肥満解消や』『身体機能の増強』など、バリエーションは豊富であるものの、自身に肯定的な変化を実感しているという内容のカテゴリーである。

総括すると、バスケットボールというスポーツ自体を楽しみ、それを媒介として他者との交流を楽しんだ結果、バスケ技術が向上し、交友関係が広がり、自身の心身にも好ましい変化が生じたことが伺えた。

表 4-1-6 チーム K の活動の魅力

バスケットをプレーすること	プレー・練習での達成	シュート決まったときとか (A) 全力出しきった時 (A) リバウンドをとれたときとか (B)
	プレー・練習自体が楽しい	練習中にドリブルを一往復とか (B) バスケットが一番好きで、なんかあの、対戦するのが好き (D) まあちょっとアレ。シュートとか邪魔されたりもしますが、よけたりパスしたりも大事です。そついう戦略が楽しいです (D) 最初の初期の頃とか0さん(コーチの名前)大学入った頃とかの思い出ありますね。練習。プログラムが楽しい (F) 試合とか。走るの好きだから (H)
バスケットを通じた交流	コミュニケーション	みんなでやるところとか。ボール怖いけど (C) チームワークのところとか、あとそのチームの何というかな。かけ声とか。んーと、練習のあとの、今後の感想とかそれですかね (E) あの、試合で大会で行くのと楽しいですね。色んな人と交流できるので (F) んーと、まあドリブルとかして、みんなでパスしながらシュートするのがすごく。みんなと交流して楽しいなあと思ひまして (G)

表 4-1-7 バスケットボールを始めての変化

バスケット技能の向上	バスケット技能の向上	バスケットうまくなった (A) ちょっとは上達もしたかなって (D) バスケットがやることによって、練習重ねてうまくなってきた (F)
交友関係の広がり	交友関係の質的变化	(仲間の名前を)呼び捨てできるようになった (C) んーそうですね。んと、人と接客することが多くなったというか。チームの中で前はそうでもなかった (E) 学校の。授業ありますよね。時に比べれば、何て言えばいいのかな。まわりの学生(ボランティア)さんと話ができるようになった (F) 結構みんなと会話が続くようになったかな (G)
	交友関係の量的変化	友達が増えていく (C) なんか楽しくなってきたので。友達増えて。増やしていきたいですね (G)
心身の肯定的諸変化	肥満解消	正直言えばちょっと痩せたかなと。ずっと前にアンパンマンぽかったですから。写真を見たら、あ、アンパンマンだ、って (D) そうですね。あとは、バスケット始めて少しやせた気もしたというか (E)
	身体機能の増強	僕が思っているだけかもしれないんですけど、足速くなった気が (A)
	運動に意欲的	運動まあまあ好きになったことかな。前は。そんなには (H)
	広範的成長	ずいぶん成長したとか。バスケットの腕もそうだし、いろいろ (B)

また、「バスケがない日は何をしているか」という質問に対しては、表 4-1-8 の通り、先行研究（山田,1990. 高畑・武蔵 1997.）同様、主にテレビ鑑賞や漫画、ゲームなど、屋内で一人で過ごしている傾向にあった。また、バスケ以外にやりたいこととして、具体的なバリエーションとしては『レジャー』や『新奇な競技』、『大勢での活動』と様々であったが、総じて【普段できない活動】に対するニーズが確認された。加えて、「全員でカラオケ (A,B,C)」、「人数いるから一回、大人数の方が楽しいのをやりたい (H)」など、複数名で一緒に取り組める活動を期待している内容が主であり、これらのことから、チーム K はバスケットボールを楽しむ場としての機能を持ちながら、仲間作りやコミュニケーションできる場としての機能も備えていることが推察された。

表 4-1-8 チーム K の活動がない日の過ごし方

屋内で一人で	だらける	あぁ。注意されるかもしれないんですけど、基本だらけてます。家で。ほげーっ、ほげーっとしてます (A) 寝てたりですかね (F)
	テレビ・ゲーム等	うん。遊んだりしてる。DS。家で (C) お母さんがいなくなったら家にいてテレビ見たりとかゲームしたりとかして ますね (D) あとは、何でしたっけ。テレビを見てたり、寝てたり (F) ずっとテレビ見てたりとか。マンガ読んだりとか (H) んと、そうですね。基本的にテレビ見たり、趣味をしたりとかですかね。(趣 味は)映画とかガンブラとか (E) パソコン。あの、家にいてインターネットやったり (F)
屋内で友人と	友人とゲーム	たまに友達と遊んだり。ゲーム (H)
屋外で一人で	ひとりで外出	たまにゲーセンとか、ツタヤで暇つぶし (ひとりで) (C)
屋外で誰かと	親と外出	あれ、まぁ、お母さんがいたらいろんな店とか行ってますけど (D)
	福祉施設	あとは、あの、福祉関係のとこ行ったりしてますね (F)
	友人と外出	バスケがない日、は、ま、暇だから遊びに行ったりしてますね。出かけた りしてます。えー、友達と呼んでボウリングやったり、カラオケ行ったりかな。ま、 映画も行ったりしますね (G)

表 4-1-9 バスケットボール以外のやりたいこと

普段できない活動	レジャー	カラオケとか、焼き肉とか。普段は全然行かないです。K(弟)がうるさいの 嫌いなもので (A) カラオケとか。カラオケはたまーに。(家の人とは)行かない。前(チームで カラオケに行ったとき)は、7曲くらい歌えたんで (B) 夜に焼肉とか (B) ボウリングも、行きたい (B)	
		新奇な競技	バドミントンとか。いいんじゃないかなーて (D) やってみたいのは、種目にあるのかわかんないんですけど、卓球とか。フ ライングディスク。フットサル。やってみたいですね (F)
			大勢での活動



## 第二節 知的障害者の保護者の求める指導者像

### 第一項 調査協力者と方法

知的障害者のスポーツ活動支援団体 S（仮名）において、会員である保護者 6 名に対し、1 対 1 の半構造化インタビューを行った。実施にあたっては、大まかな質問項目は設定したが、一問一答ではなく会話の体でなるべく自由に話してもらい、不明瞭な点があれば、話の妨げにならないよう配慮しながら確認した。

インタビューの場所は、調査協力者の居住地との距離や利便性、調査対象にとって心身ともに負担の少ない場所であることを考慮し、地域の社会福祉センターの会議室を利用した。不特定多数の人が立ち入ることがなく、外からの不必要な音や声をシャットアウトすることができるため、インタビューを実施するに適切な環境である。インタビューの時間は、ひとり 100 分～150 分程度であった。調査期間は 2010 年 10 月～11 月である。

6 名の調査協力者については、データの妥当性を考慮し、ある程度の頻度当該活動へ子供が参加しており、保護者自身も見学や応援をするなどして活動内容について理解していることを条件として S のコーチの助言のもと抽出した。毎回活動場所に足を運んでいても、子供の送り迎えをしているのみであるケースは除外した。なお、ダウン症児の母親よりも自閉症児の母親の方が、子供のハンディの状態においてストレス度が高い（Holroyd and McArthur, 1976）など、子供の障害の状態によって保護者の心情も異なることが考えられた。そのため、子供の障害の診断名と知的障害の程度、子供の年齢、保護者の年代、活動参加歴において、偏りが生じないように抽出した。調査協力者の抽出には、全会員の参加状況を把握しているチーム S の事務担当者及び、ボランティアリーダーの協力を得た。調査協力者のプロフィールは以下の通り（表 4-2-1）。

分析は、得られた回答のテーマとの関連性があると判断される部分を抽出し、言葉の意味の解釈を行い、調査協力者間での比較を行い、相違点や類似点について把握した。文中の「 」は調査協力者の回答の引用、（ ）は筆者の補足である。回答の引用にあたっては、具体的な個人名や団体名などは仮名に修正し、方言によって意味の理解が難しい回答に関しては発言通り記載し、ニュアンスを変えないよう配慮しつつ標準的に用いられる言葉も併記することとした。

また、データの信頼性を確保するため、インタビューデータをまとめた後に、解釈に齟齬がないか調査協力者に確認してもらった。さらに、質的研究に造詣が深い研究者によるスーパービジョンや、大学院生・大学生が在籍しているゼミにおいて調査結果を報告し意見を仰ぐなどの手続きもふんだ。

倫理的な配慮として、調査協力者にはプライバシーの厳守及び、研究の趣旨、録音・フィールドノート作成・分析手順・結果の公開といったデータの扱いについて説明し、すべての事項に同意する意思の確認を行い、研究協力への了承を得た。

表 4-2-1 調査協力者のプロフィール

対象	性別	年代	参加歴	子の性別	子の年齢	知的障害の程度
A	女性	40代	5年目	男性	16歳	中度(自閉症)
B	女性	30代	2年目	女性	8歳	軽度
C	男性	60代	7年目	女性	31歳	中度(ダウン症)
D	女性	40代	5年目	男性	14歳	軽度(自閉症)
E	男性	40代	7年目	男性	17歳	軽度
F	女性	50代	8年目	男性	32歳	中度

## 第二項 指導者に求める我が子・障害・スポーツに関する理解と意欲

スポーツ指導者に必要な資質としては、主に『『子供理解』に関する言及』、『『スポーツの専門性』に関する言及』、『『心構え』に関する言及』と解釈できる、3つの要素が挙げられた(表 2-2-2)。

保護者は、障害特性についての知識をもっていることを、指導者に必要な資質として挙げているが、単純に障害に関する知識を有していれば良いというわけではなく、参加者個人の性格や個性についても理解してほしいと考えていた。ここからは、性格や障害特性など様々な情報をもとに、子供個人の心身の状態について詳細に正確に把握してほしいという願いがあると解釈でき、子供それぞれの実態に即した指導を求めていることが伺える。

**「やっぱり、この子供たちの性格とか、特徴ちゃんと覚えてもらえないと、ケガもするし。前もって自閉症とか、学習障害者の子供たちのこともちゃんと、こういう特徴持ってる子供たちだっていうのをわかって、Sに来てもらわないと(A)」**

**「障害のある子なので…その、障害も様々ですよ。私は今のは満足なんですけど、あえて言うならば(笑)。いろいろな障害の知識っというか、そういうのあるのかな～?と思えますけど…そういうの、どう…だろ?(B)」**

筋肉の動かし方や競技における知識・技能といった「スポーツ」に関する知識・経験が豊富であることも、指導者に求める資質として挙げられていた。このことから、「お母さん方は連れて行って見てるだけですごく満足してるって状態なので、誰かが見てくれるってだけですごく嬉しいものですよ(B)」や、「何もさ、ホントに見てくれるだけで親は嬉しいわけよ(E)」など、スポーツできる場があること自体を喜んでいると同時に、競技能力や運動技術の向上も求めていることがわかる。これは、「レクリエーション」や「体を使った遊び」ではなく、Sのように「スポーツ団体」だからこそみられる特徴であると考えられる。様々なスポーツ競技の指導をおこなう団体だからこそ、競技志向の当事者が参加したり、活動を継続したりする中で、技術向上の意識が醸成されていった可能性が考え

られる。

**こう手の動かし方だとか、こう筋肉がどうゆうふう動くかとか、どこの部分がどうゆうふう動いてるとか、そういう、やっぱり知識があってこそ部分がわかると思うんですね (B)**

**やっぱり専門的な知識ですね。種目によって身につけていたほうが説得力あるし (C)**

**ルールとか、そういう競技のことをしっかりやってほしい (F)**

『子供理解』、『スポーツの専門性』を備えるうえで必要とされる要素でもあるが、指導者としての『心構え』も重要視していることがわかった。保護者は、ボランティアでありながらもスポーツ指導者である以上は、子供たちの特性やスポーツについてはある程度学んでおくことが必要であり、そもそもそういった意識をもって臨んでほしいという認識をもっていた。指導する点はしっかり指導して、必要な知識は学ぼうとする、指導者としての自覚や威厳、気構えが求められている。

**アスリートに対して差別しない。例えば、この子はちょっと、うん…何するにもうましくない、この子は何でもハイハイって言うだとか、個性もった様々な、いますね (C)**

**この子たちは、普通のってばアレだけでも、違うじゃない。うちの T なんかも、パツと見つけてせばわかんねけど、出来ない事こと多いし、もう、バババーって何のこと？って思う話するし。それでも、うんうんって聞いて丁寧に、あーでもねこーでもねてしてくれるボラさんいれば、ありがたいですよ (D)**

**最低限のことは勉強しようって気持ちがないかできないと思う。私たちの頃と比べれば、今は本でも何でも出てるんだし、ネットでも簡単じゃない。してもらって偉そうに言うわけではないけども、学ぼうって意識しっかりある人じゃないとなかなか (E)**

また、保護者はボランティアのことをよく観察し、我が子や他の知的障害者との接し方、指導の方法、指導のための予備知識、指導に臨む姿勢などから、指導者として信頼に足る人物かどうかを個別に評価をしていることが確認できる。

**ちゃんと向き合って子供たちとこう、接する…してないのかなっていうボランティアさんも何人かみられてたのでー。多分、こういう子供たちのことちゃんとわかってなくて入ってきたのかなって、そういうのもちょっとみられるかなって思ってたので (A)**

動き見てれば私達だってわかるわけ、この人あんまり大したことないとか、そういうの感じてるわけさ（笑）。コーチずっとさ、見てたらこの人の言うことは聞こうかなってなんて（C）

表 4-2-2 保護者が指導者に求める資質

対象	「子供理解」に関する言及	「スポーツの専門性」に関する言及	「心構え」に関する言及
A	・子供の性格の把握 ・障害についての知識		・勉強してから参加する姿勢
B	・障害についての知識	・スポーツ指導の造詣の深さ	
C	・個性に応じた指導	・スポーツの専門的な知識	・指導すべき点は指導 ・人によって差別をしない姿勢
D	・子供の性向の理解 ・障害についての知識		・指導の丁寧さ
E	・子供の状態把握	・スポーツの専門性 ・競技経験	・学ぼうとする気概 ・やるべきことはしっかりやる
F	・子供の性格の把握 ・障害についての知識	・競技性の尊重 ・競技経験	・全員に公平に接する

### 第三項 「大学生」に対する期待と懸念

保護者は若年層ボランティアを、参加している我が子と年齢が近いことから、友人的なかかわりができる存在であり、知的障害者にとって親しみやすい存在であると認識していた。知的障害者はプライベートな時間を友人と過ごすことが少ない傾向にあり（中山,2000）、山田（1990）は通所施設に通う知的障害者の保護者は「友だちを作ってほしい」「友だちと遊んでほしい」というニーズがあることを報告している。また、於保（2004）の調査でも、10代の知的障害児の親は、卒業後の子供の余暇活動について期待したいこととして、親以外の人との交流についての回答が最も多かった。今回の結果も、知的障害者の親は子供の交友関係に対して不安を抱えていることがうかがえ、先行研究と同様であることが確認された。Sにおいては、参加している知的障害者の年齢は最年少が7歳で最年長は32歳でその多くが中学生や高校生であったため（調査実施時）、指導場面でこそ指導者—被指導者という関係性になるが、下記の発言みられるような「友人的かかわり」への意義の実感やは、同世代の指導者がいるからこそ生じ得ることだと考えられる。

**選手（知的障害者）とあんまり年の差もはなれてないから、選手も慕ったりなんか、指導**

面でもさ、すごくいいと思うんですよ (C)

やっぱり年が近いからお兄さんみたいな感じで、接しやすくっていいですね。「年寄りはいまね (ダメだ)」って言うんでもねけども、どうしても教えてやる…ってのが強い。先生みたくなるんじゃないですかね (D)

学生さんいれば同世代との交流にもなる。こういう子たちはそんなには (同世代との交流が) ない (E)

また、保護者は、スポーツ指導の際に参加者である知的障害者にわかりやすい指導方法を取り入れたり、効果的な支援ツールを作成したりといった、ボランティアが講じる様々な工夫について肯定的に捉えており、それを若さゆえの発想力であると認識していた。従来になかった新しい手法を取り入れたり、保護者が考え付かない意見を述べるといった、発想の豊かさが若い世代ならではの良さとして認識されていた。

(作成した支援ツールに関して) そういう発想あるのってすごいよね。いや～、考えたなーと思って。親でもここまで考えられないなと思って。今日逸れはすごくすごく感心して見えました。さすがわけはんで (若いから) (A)

そういう頭も丁度きれてるときだから、発想もね。すごい…だから良い時なわけさ。良いとき (C)

話してももう、頭の回転早い。私達はもう認知症始まってるし何も考えねで「わかた」てしゃべて (笑)。ほんつとに頼もしい (F)

加えて、上述のような様々なことを試みるという行動力や、それらを準備・実行したり毎回スポーツ指導をするだけの体力があるということも若年層の良さとして認識していた。

いつ行っても「こんにちわー！」って元気ですよ。ファミリーみたくくたくた～ってしてない (笑) でも聞いたら「夜中まで飲み会してました」とかってー。さすが若さだなと (B)

そして若い人は体力もあるしさ、それとあの、行動力やっぱりあるわけでしょ (C)

一緒になって走り回るのとか、私たちには無理。学生さんまだ若いから、もう、親はおんぶに抱っこで (F)

さらに、今後社会人となったときに、現在の知的障害者スポーツでのボランティア経験を生かし、知的障害者に理解ある社会を構築することができるという、将来性に期待できる点も若年層ゆえの特徴として挙げられていた。例えば、Bは、排泄の失敗経験や、子供が集団とうまく行動できないことなどから、過去に一般のスイミングスクールになじめなかった経験があるが、若年層への期待の背景には、知的障害者スポーツの振興や知的障害者に対する社会の認知をよりよいものにしてほしいという、親としての期待も伺えた。

**若い人がそういう活動を通して社会さ出てくわけでしょ、そうするとあの…いろんな人と関わる時点でさ、そういうのをね、こういうの（知的障害者スポーツ）もあるんだよってね、いっぱい広げてもらえるんですよ（C）**

学生のうちにSみたいなことやっておくと、ボラさんにも経験にもなるけども、Oさん（ボランティア名）達がこれからの社会を引っ張っていく世代なわけ。うん。これからの人が知的障害のある人のことも理解していれば、アスリートたちも今より活躍できるかもしれないし、親としても安心できるわけさ（E）

冗談じゃないんだけど、信じられない話だけど、理解のない施設職員もいるのよ。ホント、もう頭さきて。…（中略）…。預けるおやとしてみたら、学生のうちにこういう子たちと関わって、理解してもらいたい（F）

やっぱり知的な障害もあって、皆と同じにやることもできなかったの。それで水泳は考えてたんですけど、そこでちょっとその…。排泄の失敗があって、なかなか機会を見ていたんですけど（B）

若年層ボランティアに対しては様々な観点から大いに期待を寄せていると思われるが、「大学生」に関しては、実習や就職活動など学年が上がるにつれてスポーツ指導に充てる時間が減ってしまうことや、卒業に伴う活動離脱が生じやすいといったライフステージ特有の課題を感じていることが伺えた。

**いや、O君がそうしてずっとやってってければいんだけどもさ（笑）。やっぱり学生ったとこで、いずれはね（いなくなってしまう）（A）**

今はOさんとかMさんとかいてくれるんでー。いやでも卒業したらどうしましょう。大学に残ってくださいって言うてみたりして（笑）（B）

学生さんも忙しいはんで。この前の陸上もさ、実習だはんで（だから）仕方ないんだけど、人いなかったみたいだし。だよー。アルバイトもあるだろし、デートだってしにゃまいんだよ（笑）（D）

いや～、皆卒業したらいなくなっちゃう。Sさんとかー、今T園だっけか？うん、にいるSさんとかさ、Yさんとか、卒業したらいっさい、来ない。あんた達いなきゃSまわんないんだーって言うておいたけども。多分来ねびよん（来ないだろう）（E）

また、

100%（の力）でなくてあと10%さ、なんかの時に残しといて、それでフルでやればさ。なんかあった時に10%頑張った感じで、それよりかは長くやってもらいたい（C）

一定のボランティアさんつくつと、そのボランティアさんがすごく気に入ればずっと、人について懐いてもいくし、活動にもすごくのめりこむって言うか（B）

などの発言から、保護者には子供へのスポーツ活動を長期的に行ってほしいという願いがあり、指導者が定着することで、より子供と良い関係性を築けると考えていることが伺える。これらのことから、長期的かつ一貫した指導が求められていると考えられる。

遠藤（2008）は、発達障害児の保護者が、子供の余暇活動など、外部資源から支援を求める際、ボランティアの対応可能なニーズの制限を踏まえながらも、子供に対する個別的な対応を強く望んでいたことを報告している。前述のスポーツ指導者に必要な資質についても、子供個人への知識が豊富であることが挙げられたように、より、個に応じた適切な指導を求めることから、なるべくわが子にスポーツ指導をおこなうボランティアを一貫してほしいという思いに至るのではないだろうか。

子供のことをよく理解した状態で指導してもらうためには、ある程度長期的な接触経験が必要になる。しかし、大学生は進学のために他県から来ている場合もあり、卒業後に当該地域で就職するとは決まっていない。むしろ、得られた回答からは、過去に卒業後に当該地域周辺で就職をした者がほとんどいなかったこと、もしくは、卒業後に近隣地域に就職をしたとしても、環境の変化や職場の協力、忙しさなどから大学生のころのように参加できていないことが推測される。つまり、大学生ボランティアは、大学の卒業がそのままSからの卒業となってしまうという認識があった。信頼のおける指導者として活躍できるようになっても、いずれいなくなってしまう、また新たなボランティアに一から子供のことを理解してもらうということを、できるならば避けたいと考えていることが伺えた。

また、全体的に、ボランティア間に『力量の差』があることが否定的な要素として確認された。保護者は、ボランティアの挨拶や知的障害者との接し方、指導者としての姿勢などが大きく異なっている実態を報告しており、良い指導者として個人名が挙げられる人物は共通していた。このことから、ボランティアを呼称する際は、便宜的に「ボランティア」や「学生さん」としているが、評価については一括りではなくボランティアそれぞれに対して個別に行っていることがわかる。そして、そのボランティアの指導力格差につい

では、良く思っていないと考えられる。

**でも、(子供が)名前覚えているのはやっぱり目立ってるお兄さんお姉さんのお名前ばかりですよー (B)**

**やっぱりさ、Oさんは別格だけどさ、MくんいないとチームS成り立たない。うん。弱音吐かないでしょあの人。責任感も強いしね。大黒柱だからさ、大黒柱が崩れればウチ崩れてしまうんだ (C)**

**しっかりやってる学生さんもいれば、ほとんど来ない人もいるからね (E)**

**子供たちも『この学生さんがいい』とかあるのよ。頑張ってる人のはあの子らちゃんとしてるからさ。朝「今日はこのボラさん」でときに、合わない人だったら「くっ！(しかめた表情)」でしてさ。やっぱりできる人は違う (F)**

保護者の評価軸としては、前述した指導者に求める資質について、しっかり満たしているかどうか大きな判断材料となっている。

**親御さん見てるからね。自分の子供の、ほれ、親であればすべて知ってるわけだから、親でもあましてる(手にあまる)、それをコーチがどういうふうにしてるかわかってるからね (C)**

という発言が顕著に示しているように、保護者は、ボランティアの参加の頻度や知的障害者に対する知識・接し方、指導者としての姿勢などについて、とてもよく観察し、「できる」指導者に対しては高い信頼をしていることがうかがえる。



表 4-2-3 保護者の若年層ボランティアに対する印象

対象	「友人」的な存在	柔軟な発想ができる	バイタリティがある	将来性への期待	大学生は卒業による離脱が懸念	指導力のばらつき
A	・年齢近く友人的存在	・柔軟な発想力			・有能な学生も卒業に伴って離脱する	・指導技術の格差がある
B	・兄や姉のような存在		・元気がある	・子供の居場所を作ってくれるだけで親として満足	・有能な学生も卒業に伴って離脱する	・子供も名前を覚えるのは頑張る人だけ
C	・子供と年齢差ない	・発想力がいい	・体力がある ・行動力がある	・若者が知的障害を理解することは社会全体の理解につながる	・実習や就活で活動できる期間が限定的 ・有能な学生も卒業に伴って離脱する	・一部の人が全体を支えている
D	・年が近く接しやすい		・体力がある ・行動力がある	・若者の知的障害者への理解が進めば住みやすい社会になる	・学生生活が忙しい ・有能な学生も卒業に伴って離脱する	・指導力のある者となない者が混在している
E	・同世代との交流	・既存概念にとらわれずいいものを採択	・フットワークの軽さ ・体力	・学生時代の当該活動の経験は学生にも社会にもいい影響	・有能な学生も卒業に伴って離脱する	・人によって熱意や知識、指導力に開きがある
F	・若くてよい	・頭の回転が速い	・体力的に親世代はスポーツ指導が困難	・理解のない施設職員もいるので学生のうちに知的障害者と関わるといい	・有能な学生も卒業に伴って離脱する	・特定の人だけが大変そう ・皆に声掛けしてくれるのは一部の人

### 第三節 小括：求められる「かかわりやすさ」と「指導力の高さ」

本章においては下記のことが明らかとなった。

①知的障害者は、スポーツ参加を楽しみ、自身の達成や成長を自覚ながらも、スポーツの場を単なる運動機会や練習機会としてではなく、仲間づくりやコミュニケーションの場として認識していること。

②知的障害者本人は、明朗で熱意があり、指導する競技に関して高い専門性をもっている指導者を望んでおり、怒りっぽかったり、情熱がなかったり、的確な指導ができない者には指導を受けたくないと思っていること。

③知的障害者本人には、技能の上達が見込めるのであれば負荷のかかる練習であっても納得して取り組む意思があり、現在の指導者に対してはパーソナリティや指導内容を含めて満足していること。

④知的障害者の保護者は、スポーツ指導者に必要な資質として、「子供（障害）の理解」、「スポーツの専門性」、「心構え」が備わっていることを挙げていること。

⑤知的障害者の保護者は、友人的な関わりができ、柔軟な発想力やバイタリティがあり、将来性にも期待ができるという点で、大学生を中心とした若年層ボランティアの積極参加を歓迎している一方で、継続的な指導を望んでいるため卒業に伴う活動離脱について懸念していること。

⑥知的障害者の保護者は、ボランティアの参加の頻度や知的障害者に対する知識・接し方、指導者としての姿勢などについてとてもよく観察し、「できる」指導者に対しては高い信頼をしていること。

これらの結果から、知的障害者本人、保護者とも「スポーツ」に「コミュニケーション」の要素を強く求めていることがわかる。特に、若年層ボランティアが参与していることが肯定的に影響しており、知的障害者はその接しやすさや若さゆえの体力や身体能力を評価しており、それが活動への満足につながっている。保護者も、友人のように関わるという点から好ましく感じており、若年層ボランティア自身も知的障害者が豊かなコミュニケーションを経験できることを重要視して指導している。それぞれの願望が一致しており、また、十分に満たされているという好ましい状態となっていることが伺えた。

また、知的障害者本人とその保護者は、指導者に対して確かな指導能力や好ましいパーソナリティを期待しており、保護者はさらに、選手個人についての高い理解も求めていることが明らかとなった。守田・七木田（2004）は知的障害児の保護者を対象とした調査をおこない、指導者が障害についての専門性をもっていることが、スポーツ参加の促進要因となっていることを報告している。本稿の保護者調査でも明らかとなったように、保護者には「障害特性も含めて子供のこと理解してもらいたい」という願いがあり、その背景には、知的障害に対する無理解や否定的なイメージ（河内, 2006. 大山・増田, 2016）を実体験としてもっていることが想像できる。知的障害者のなかは意思疎通が難しい者も多いため、保護者はいかに感情的・行動的に寄り添うことができるかを重視しているのではない

だろうか。

ここで、留意しておかねばならない点がある。知的障害者本人は、的確な指導を受けていると認識しており、指導内容に満足しているものの、第二章で述べたように、若年層ボランティアは、自身の知識や指導内容、指導効果に不安を抱く傾向にあることである。保護者も、指導者の資質としてスポーツの専門性を要求しつつも、若年層ボランティアに対しては、子供との丁寧な関わりやひたむきな姿勢などを評価しており、感謝と大きな期待を抱いている。つまり、スポーツ指導に関して、「ニーズ」と「シーズ」に齟齬が生じている可能性はあるが、受け手側の知的障害者・保護者はそうは捉えておらず、提供側の若年層ボランティアが一方的に不安を感じている可能性が考えられるのである。もちろん、自身の指導内容を省みることは重要であるが、不安を抱えた状態で指導し続けることは精神衛生上好ましくない。離脱リスクを軽減するためには、スポーツ指導にあたっての不安感解消に繋がる学習機会を提供し、同時に Hobson et al. (1996) の提唱するような公的に感謝を示す機会をつくるのが大切ではないだろうか。

本章で得られた知見から、マネジメントモデル構築にあたっては下記の点を重要なポイントとして組み込むべきと考える。

- ・知的障害者が、ボランティアや他の知的障害者とコミュニケーションでき、相互に感謝を示す機会を確保する
- ・積極的な若年層のリクルート
- ・若年層ボランティアの学習機会を設ける ※第二章でも確認

## 第五章 若年層ボランティアの指導力の実際

### 第一節 スポーツ指導場面における指導力の発揮

#### 第一項 観察の対象

若年層ボランティアの指導力の発揮について把握するため、知的障害者に年間を通じてスポーツ活動を提供するボランティア団体である「スペシャルオリンピックス日本・青森（以下 SON・青森）」の協力を得て、知的障害者とボランティアの相互作用場面を観察した。観察方法は、観察者がフィールドとの関わりをもちながらデータを収集する、参与観察法を採用した。

2007年9月から予備観察を実施し、データの収集は2008年1月～2009年9月までの期間、SON・青森での活動場面41回を観察した。具体的な場面としてはアルペンスキープログラム14回、バスケットボールプログラム13回、陸上競技プログラム6回、フットサル体験プログラム5回、食事会2回、レクリエーション1回である。スポーツ活動は全て1回の活動時間は2時間前後であり、トレーニング開始までの準備時間や、休憩時間、終了後の後片付けや雑談の時間における相互作用についても観察の対象とした。

参与観察法を用いた理由としては、予備観察やボランティア陣・保護者などの情報から、質問紙調査やインタビュー調査では、言語能力から鑑みて複雑な問いに対しては意見を十分に表現しきれない対象が存在したことが挙げられる。また、面識のない人物が観察した場合、少なからず視線を意識してしまったり、見られていることで緊張してしまったり、普段とは違った様子を見せる可能性が高い対象も存在した。しかし、筆者は日頃当該活動にボランティアとして参加しているため、行為者としても観察者としても、フィールドにいたことが違和感を生じさせるものではなく、むしろ、普段のようにスポーツ指導を行わずに、観察に徹している方が、周囲からの注意を引いてしまうと考えられた。よって、普段のありのままの様子を観察するため、参与観察を採用した。

観察は、主に知的障害者とボランティアの相互作用場面についておこなった。観察及び記述の基本的視点として、相互作用場面を可能な限り詳細にノートに記録することに留意した。その際、知的障害者へのスポーツ指導、スポーツプログラムの進行を最優先し、ノートへの記録はプログラム終了後に行った。また、電子機器類を設置した場合、観察対象に緊張感を与えることや、興味を引きスポーツ指導を阻害することに繋がるのが予想されたため、ビデオカメラやICレコーダーなどの機器は用いなかった。

今回対象としたのは知的障害者4名、ボランティア5名(表5-1-1)、ボランティアの役割分担は図5-1-1の通りである。役職としては、各競技プログラムのリーダーと、ボランティア全体を管理統括するリーダー・副リーダーがおり、それぞれ必要に応じて補助を設けている。スポーツプログラム担当が、自身がリーダーを務める各競技プログラムを運営し、ボランティア管理のメンバーが体験プログラムや各種交流イベント等を担当している。

分析は、観察から得られた知的障害者と学生ボランティアとの相互作用場面の記述から、特徴的なエピソードを抽出し、それぞれに解釈や検討を行うという手続きを踏んだ。観

観察対象の行動で確認が必要と思われるものについては、保護者や他のボランティアに対して聞き取りを行った。また、データの妥当性を確保するため、参与観察の際、誘導的になつてしまわないように通常通りスポーツ指導をするよう努めた。

観察は、SON・青森、該当するスポーツプログラムの責任者、当事者・保護者に対して、プライバシーの厳守及び研究の趣旨、フィールドノートの作成、結果の公開について説明し、許可を得ておこなった。

表 5-1-1 観察対象

知的障害者				
A	13 歳	男	4 年目	軽度知的障害、ダウン症
B	13 歳	男	2 年目	軽度知的障害
C	27 歳	男	6 年目	中度知的障害、ダウン症
D	13 歳	男	2 年目	軽度知的障害

ボランティアコーチ				
ⓍE	19 歳	女	1 年目	アルペンスキーリーダー補助
ⓍF	21 歳	男	3 年目	ボランティア副リーダー
ⓍG	23 歳	男	5 年目	ボランティアリーダー
ⓍH	21 歳	男	3 年目	ボランティア副リーダー
ⓍI	21 歳	男	3 年目	アルペンスキーリーダー

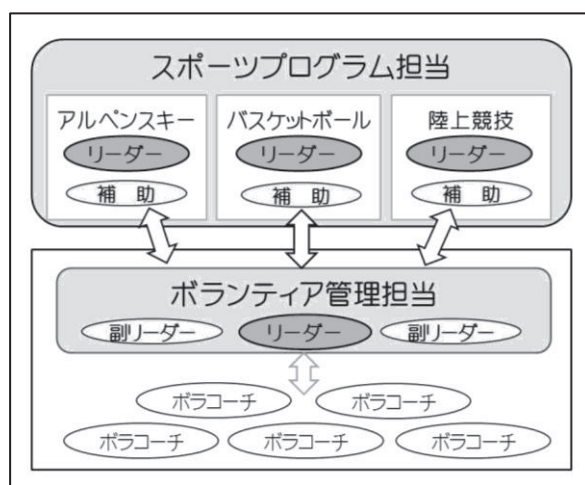


図 5-1-1 SON・青森のボランティアコーチの役割分担

## 第二項 知的障害者から受ける権限・能力に関する評価

特徴的なエピソードを抽出し、それぞれに解釈や検討を行った結果、スポーツプログラム中の知的障害者とボランティアとの相互作用のなかで、知的障害者が、指示を出した相手によって接し方や態度を変えているという場面が観察できた。具体的には以下のような場面である。

### 【エピソード①】

バスケットボールプログラムの最中、ボランティアと向かい合っのバス練習の場面。胸もとから押し出すようにパスをする「チェストパス」の練習である。

A:「カーメーはーめー波ー。」と、両の手のひらで腰からボールを押し出すような形でボールをパス。相手まで届かずに、転がっている。

⑦E:「(笑いながら)ちょっと、みんなと違うじゃない。こうだよこう。」と手本を見せながらボールを返す。

A:「いくよ。カーメーはーめー波ー。」と、先ほどと同様にパス。

⑦E:「今はこのパスの練習だよ。いい、いくよ。えい。」と、手本を見せながら返球。

A:「んふふ。カーメーはーめー波ー。」ボールが狙いの⑦E よりもかなり右に外れ、隣でパスをしているペアのところへと転がる。

⑦E:「ほら、周りのみんなにも迷惑かけちゃうよ。ちゃんとやろうね。」

と、少し強めに注意するがCはやめない。結局、チェストパスは10往復×2セットであったが、1セット目は1度もチェストパスをしなかった。2セット目の1本目のパスでも修正がみられなかった。

⑦F:「A、できることはちゃんとやろや。ええか。」

注意を受けたAは下を向きうつむいたが、それ以降は逸脱することなく練習に参加した。

≪2008年6月1日≫

### 【エピソード②】

アルペンスキープログラム。練習開始前、室内の待機場所でBと⑦Gが話をしている。

⑦G:「よう、B。今日の調子はどうよ？」

B:「うん。いい。」

⑦G:「お前、気合い入ってんのか？元気ねーじゃん。どした？」

B:「だって今日⑦Gさんじゃないって言ってたよ。」

⑦G:「ん？あぁ、一緒に滑るやつね。俺もBとも滑りたいけどね、仕方ないさ。」

B:「〇〇さん(この日一緒に練習するボランティア)おもしろくないから。⑦Gさんがよかった。」

⑦G:「ご指名嬉しいけど、〇〇さんに失礼だな。〇〇さんスキーうまいし、また一緒に滑る機会あるからさ、頑張れ。」

B:「…はぁ…(ため息)。」

≪2008年1月27日≫

エピソード①においてAは、再三にわたる⑦Eの指示には従わなかったのに対し、⑦F

からの指示にはすぐに従った。ここには明らかな違いが生じている。なぜ A は㊦E の指示に従わず、㊦F の指示には従ったのだろうか。これに関しては、まず A はそもそもチェストパスができないことや㊦E の指示が理解できていなかったことなどが考えられる。しかし、エピソード①の前の回のバスケットボールプログラム(2008年5月25日)やエピソード①以降もチェストパスができていたことが確認できている。また、A は言語でのコミュニケーションにおいては若干の吃音がある程度で、理解については大きな困難はないこと、また A の筋力・技量を考慮してパスの距離も無理のない範囲で設定されていたことなどから、能力的なこととは別の要因が考えられた。保護者によると、「最近お気に入りのアニメキャラクターの影響を受けている」ということであったが、A がその素振りをトレーニング中に見せたのはこのエピソード①のプログラムのみであった。これからは、A の中でのボランティアへ対する意識の違い、つまり、そのボランティアが指示に従うべき対象なのかどうかというような、ボランティアへの個別評価が存在していることが推測できる。

また、エピソード②では、ボランティアに対する評価の差が生じていることを、知的障害者本人の言動から解釈できる。自分にアルペンスキーの指導をするボランティアに対して B が明らかに不満をもっており、割り当てられたボランティアではなく、㊦G と一緒に滑りたいと㊦G 本人に打ち明けている。同様に、ボランティアに対する評価に優劣が確認できる例として以下の2例を挙げる。

【エピソード③】

バスケットボールプログラム。C がフットワーク中に座り込んでいる。㊦E は C のサポートではないが近くにいるので声をかけた。

㊦E:「Cさん、疲れたんですか？」

C:「うーるせ、あっちいけ。」

㊦E:「…大丈夫ですか？」

C:「うーるせこの。」

㊦G:「Cさんちょっと疲れただけですよ？」

C:(無言でうなずく)

㊦G:「ちょっと休んだらまた練習しますよね。」

C:「そそそ。やっぱりコーチは違うな。」

《2008年6月8日》

【エピソード④】

フットサルプログラム、試合形式の練習のためのチーム分けの場面。

D:「㊦Hさんは僕のチームですか？」

㊦G:「いや、㊦Hさんは今回敵チームだよ。」

D:「どうしてですか？」

㊦G:「今回はたまたまね。」

D:「嫌だ、㊦Hさんいないと負けます。」

㊦G:「そうかな？Dのチーム強いよ。一番うまい経験者いるんだし。それにいつも思い通りのチームにはならないよ。」

試合が始まると、Dはドリブルしたまま会場の外へと出てしまった。注意をし、練習を再開するが、Dはボールを受け取るとまた外へと出ていった。Dに理由を尋ねると

D:「㊦Hさんいないと負ける、負けるの嫌です。」と答えた

《2009年3月14日》

エピソード③では、C は二人のボランティアから同じようなニュアンスのことを言われているが、㊦E には反抗的に接し、㊦G に対しては親和的な対応であった。また、このエピソードに限らず、㊦G に対しては「さすが」や「やっぱり」という言葉を用いる場面が多く、他のボランティアと比べても優れているという認識がうかがえた。

エピソード④からは、D は㊦H と同じチームではないと知り、「㊦H がいないと負ける」と述

べており、㊦H の技量を高く評価していることがわかる。しかし、㊦H はフットサルやサッカーの経験がまったくなく、むしろ㊦H 自身は苦手意識をもっていた。また、㊦H は他のスポーツプログラムを通じて、D に直接的に指導をした経験はなく、㊦H 自身も D との接触経験の記憶はほとんどなかった。にもかかわらず、D は㊦H が「他のボランティアよりも上手である」と認識していた。これらのことから、知的障害者は、ボランティアを一括りで捉えるのではなく、ボランティアによって評価と接し方を変えていることが考えられる。

また、エピソード③では、㊦E に対して反抗的な態度をとっていた C であるが、エピソード⑤では㊦E の指示通りに行動している。さらにエピソード⑥のように、C が自ら㊦E のもとへ向かい、会話をしたり身体接触を求めるなどコミュニケーションをはかる場面も確認された。これらのエピソードからは、ボランティアに対する評価は普遍的なものではなく、親和的・肯定的に変化する可変性あるものだとわかる。

【エピソード⑥】 アルペンスキープログラム。㊦E がボランティアと知的障害者のグループ分けを発表する。㊦E と C は同じグループになっている。

㊦E:「今から名前を呼ばれる人は、会長のところに集まってください。では…(2人呼ぶ)、次、C さん。」

C:「おす。」(指定された場所に移動する)

《参加者全員の名前を呼び終わる》

㊦E:「はい、それでは各グループ練習を始めてください。」㊦E も自分の担当するグループのところへ移動。C はスキー置き場にスキーを取りに行くと、C のグループの場所とは違うグループの場所へ移動。

㊦E:「C さん、こっちですよー。」

C:「(本来のグループの場所へ戻り) ああ、こっちだったか。おーねさん(お姉さん)、そうだった。」

㊦E:「(笑いながら) うっかりですね。」

C:「んーそそそ。まーちがった。」

《2009年2月8日》

【エピソード⑥】 アルペンスキープログラム終了後、C がホールでピプスをたたんでいる㊦E のもとへ向かう。

C:「お、おーねさんは、○○○※知ってる？」(※聞き取れず)

㊦E:「え？なんですか(笑)。すみません、もう一度言ってもらえますか。」

C:「だからー、『え○○※』。知ってる？」(※聞き取れず)

㊦E:「…すみません、ちょっとわからないですね。」

C:「僕はー、いつもー、見てる(笑顔)。おねさんもー見ればいいじゃん」と握手を求めるように右手を出す。

㊦E:「あ、テレビですか？わかりました。」と手を握る。

C:「ふふ(笑う)」 5秒ほど握った手を上下に揺らす。

※保護者に確認しバラエティ番組のことと推定

《2009年2月15日》



### 第三項 挙動によって生じる指導力

次に、ボランティアは具体的にどういった条件・要素をもとに評価されているのか確認したい。先の C と㉖E の例では、スポーツプログラムの基本方針として、なるべく同性対応となるようにしているのが、トレーニング中に男性である㉖E と女性である C が直接的に接する機会はなく、㉖E に尋ねてみても、親密になったという認識はなかった。しかし、エピソード⑤では、㉖E はリーダー補助として参加者全体を指揮して活動することができ、C をはじめとする知的障害者たちの誘導も可能であった。㉖E は当該活動への参加歴が短く、調査対象となった他のボランティアよりも低年齢であったことから、単純に年齢や性別、参加年数から、指示に従うかどうかを決めているとは考えにくい。

エピソード③と⑤の違いとして、エピソード⑤においては㉖E に「リーダー補助」という立場・肩書きがあったことが挙げられる。しかし、次のエピソード⑦からは、ボランティアの肩書きが、必ずしも指示を聞き入れるに足る条件であると言えないことがわかる。㉖I は立場としては、プログラムのリーダーであったが、エピソード⑦においては、C は㉖I の指示には追従しなかったが、エピソード⑤ではリーダー補助である㉖E の指示通りに行動していた。アルペンスキープログラムを通して、リーダーである㉖I よりも補助係である㉖E の方を重んじていると思われたので、プログラムの休憩時間に C に「スキーのリーダーは誰でしょう？」と尋ねたところ、㉖E を指差した。また、このような「リーダーの認識のずれ」は同様に、D のエピソード⑧からも確認できた。

<p>【エピソード⑦】 アルペンスキープログラム。リーダーの㉖I が C へ直接指導している場面。</p> <p>㉖I:「C さん、今のも良かったんですけど、もっとからだを前に向けてみましょう。」</p> <p>C:「…(無言)…。」</p> <p>㉖I:「ちょっと後傾になってたので、もう少しからだをこう(手本にやって見せる)。」</p> <p>C:「わーかってるよ！」</p> <p>㉖I:「ですよ。すみません。」</p> <p>C:「ま、まったくー。」</p> <p>その後も、㉖I の声掛けに対しては顔をそむけている。</p> <p style="text-align: right;">≪2009年2月1日≫</p>	<p>【エピソード⑧】 アルペンスキープログラム。この日の練習が終了し、知的障害者もボランティアも入り混じり、各々ゲレンデから室内へと移動している。D は練習中着用しているビブスを脱ぎ、近くを歩いていた㉖G へ放るるように渡す。</p> <p>D:「ん。」</p> <p>㉖G:「おーい D、ん、じゃないっしょ？」</p> <p>D:「ありがとうございました。」</p> <p>㉖G:「いえ、こちらこそ。じゃなくて、俺に渡すじゃなくてちゃんとリーダーに返しておいでや。」</p> <p>D:「はい。」</p> <p>D は㉖E にビブスを手渡した。</p> <p style="text-align: right;">≪2009年2月15日≫</p>
---	---

エピソード⑧では、D は㉖G から、リーダーにビブスを返却するように注意を受けたが、ビブスを返却しに向かったのは㉖I ではなく、㉖E のもとであった。C のケースと同様に D に「アルペンのリーダーって誰かわかる？」と確認したところ、「㉖E さん」と回答していた。

大橋(1962)は、リーダーシップは状況に応じて発揮が必要となる状態であるため、常に同じ人物・状況に存在するわけではないと述べている。また、リーダーシップは、権威や

職階のある人物が必ずしも発揮するわけではないこと (Selznick、1957) や、フォロワー (本研究においては知的障害者と主任コーチ以外のボランティア) の中で認識されて初めて存在することなどが報告されている (薄羽、2006)。リーダーである㉖I は、㉖E に経験を積ませるため、集団を誘導したり声掛けをしたりするような役回りはほとんど任せており、スキー場との練習場所や利用料金についての打ち合わせ、保護者への事務連絡、㉖E への指示などを担っていた。一方で㉖E は、2009 年のアルペンスキープログラム開催中は一貫して、リーダー補助ながらも練習の区切りごとに全体に指示をしたり、積極的に準備体操の進行をしたりと、「全体の前に出る機会」が㉖I よりも多かった。そのことが、C や D に「指示に従うべき対象」だと認識させ、結果として実際のリーダーよりもリーダーシップを発揮していったのではないだろうか。同様にエピソード①においても、㉖G は全てのスポーツプログラムを通じて参加者全体に指示をしたり、事務連絡をしたりする機会が多かったことから、バスケットプログラム時はまだ役職についていなかった㉖E と比べ、A にとっては指示通りに行動すべき存在であると認識したと考えられる。

ちなみに、アルペンスキープログラムにおいて他のボランティアや保護者に、リーダーは誰であるか尋ねたところ、全員の認識に全くずれがなく、アルペンスキープログラムにおけるリーダーは㉖I であるという回答が得られた。実際、ボランティアや保護者は、当該活動に関連する書類の提出や質問事項・相談事をもちかける際の対象は㉖I であった。保護者やボランティアにとっては、リーダーという立場にあることが、当該活動において諸々の決定権をもち、運営にあたっての中心的存在であるという認識に直接的に結びついている。アルペンスキープログラムに関連する各種案内には、発行責任者としてリーダー㉖I と明記されており、第 1 回目のプログラム開催日には「今年度アルペンスキーリーダーを務めさせていただきます、㉖I です。よろしく願いいたします。」と、挨拶もしており、㉖I がリーダーであると認識されているのは至極当然のこのように思われる。しかし、知的障害者にとっては、「指示に従うべき人物」「場において権限を持つ人物」であるという認識に至るのには、リーダーという役職にあるかどうかとは別の要因が関係している可能性が考えられた。

エピソード⑨において C は、㉖G に遅刻した旨をリーダーに報告するよう指示されるが、下線部1のように、㉖G が状況を把握していれば問題はないという見解を述べ、リーダーには報告しないままである。ここでは、㉖G がバスケットボールのリーダーであるという、エピソード⑦のようなリーダー認識におけるずれが生じているのではなく、㉖G がリーダーではないことを承知の上で、それでも㉖G に報告した以上問題はないと、いわば㉖G を「特別視」していることがうかがえる。

また、エピソード⑩の下線部2で、ゲームセンターを貸し切りたい B は、組織の名前を出しても貸し切りはできないとわかり、次なる手段として「㉖G の力」を挙げている。このことから、㉖G に対して「何らかの権限を持つ人物である」と認識していることが推察される。また、下線部3の発言は、「㉖G でだめならさらに後押しとして㉖F や㉖H を増やす」というニュアンスである。㉖G に次いで、㉖F と㉖H に対しても、何らかの権限がある人物であると認識していることが考えられる。

このような㊦G、㊦F、㊦H に対する特別視は、前述した集団の前に立つ頻度が関係していると考えられる。㊦G、㊦F、㊦H は、スポーツプログラムにおける役職には就いていないものの、ボランティア全体を統括する役割を担っており、プログラム後に参加者達の前に出て事務連絡をしたり、ボランティア達に指示をする機会も多い。また、スポーツプログラム以外のレクリエーションなどの企画・運営もこの3人が中心となって進めている。観察対象となったA～Dは当該活動に頻繁に参加しており、㊦Gらが全体の前でマイクを持って話をしたり、ボランティアを多く集めて指示を出したりと、中心的に動いている姿を数多く目の当たりにしている。そのことから、㊦Gらに関しては優位性があると認識していることが伺える。

【エピソード⑨】

バスケットボールプログラム。Cが15分遅刻して参加。フットワークが終わり、休憩時間になるとCが㊦Gのところへ歩み寄る。

C:「おーにさん(お兄さん)、ちーこくしてごめんね。」

㊦G:「そういうときもありますよ、気にしないでください。」

C:(うなづく)

㊦G:「ヘッドコーチにちゃんと言いましたか?」

C:「今、おーにさんに、しゃべったはんで(しゃべったから)。」

㊦G:「はい。でも、そういうことはちゃんとリーダーに言わないと。」

C:「おーにさん(お兄さん)が、わかってれば大丈夫だってば。」 1

Cは、この後もリーダーのもとに報告に行かなかった。

《2009年6月29日》

【エピソード⑩】バスケットボールプログラム。Bと㊦Gとの休憩時間のやり取り。

B:「ねえねえ㊦Gさん。」

㊦G:「ん?」

B:「プログラム終わったらみんなでゲームセンター行きたいですね。」

㊦G:「いいね、プリクラとか撮りたいな。」

B:「SO みんなで行けばいいんじゃない。」

㊦G:「全員だと難しいべ。それぞれ予定あるだろうし、まずこの人数入らないし。」

B:「SO で貸し切れればいいんじゃない。」

㊦G:「いや、残念ながらうちの組織にそんな力も金もないから。」

B:「SO ですって言えばいいよ。」

㊦G:「SO とか青森じゃまだ知られてないんだよね。だからどんだけ偉そうに言っても『え、どちら様ですか』で終わっちゃうわ。」

B:「じゃあ㊦Gさんが直接予約すればいいかもよ。」 2

㊦G:「いやいやいや、俺個人じゃさらに意味ないから。余裕で断られるから。」

B:「㊦Gさんでだめなら㊦Fさんと一緒に行けばいいかもよ。㊦Hさんとか。」 3

㊦G:「あいつらを増やしても同じさ。ま、今度一緒に行こうぜ。」

B:「行こう行こう。」

《2009年6月29日》

スポーツにおいては、バスケットボールなどのチーム競技はもちろん、個人競技でも準備体操時や開始・終了の挨拶時など、ある程度の集団行動が求められる場面があり、そもそもスポーツは事故や怪我の危険性がついてまわる活動である。安全で質の高いスポーツ指導をするためには、指導者には集団や個人を上手く統率する力が求められる。知的障害者のボランティアに対する評価は個別におこなわれており、可変性はあるがボランティア間において優劣がつけられるものであった。このことから、スポーツ指導の際、知的障害者のボランティアに対する評価は、ボランティア本人の行動次第で良くも悪くもなりえることがうかがえた。

また、知的障害者のスポーツ活動において、ボランティアが選手たちを統率し指示を与える際、「リーダー」や「責任者」といった名目としての役職があることよりも、いかに「リーダーらしく振る舞うか」という挙動が重要な要素となることが示唆された。「リーダーらしい振る舞い」というのは、具体的に、集団に対して指示を与えたり、大勢の前で話をしたりといった「姿を見せる」ことである。ボランティア自身が自らの指導内容に不安を抱えながらも、知的障害者から指示に従うべき対象であると認識されるには、ボランティア個人の年齢や性別、活動経験年数といった属性よりも、見せる行動の質（リーダーらしい行動）と頻度が大きく影響していると考えられた。

## 第二節 若年層ボランティアの指導者としての役割認識・ビジョン

### 第一項 調査協力者と方法

若年層ボランティアの指導者としての役割認識を把握するため、知的障害者にスポーツ活動を提供している「スペシャルオリンピックス日本・青森（以下 SON・青森）」に参加している若年層ボランティア 14 名（18 歳～23 歳）を対象に、半構造化インタビューを実施した。

インタビューは、調査協力者の居住地との距離や利便性、調査協力者にとって心身ともに負担の少ない場所であることを考慮し、静音環境下でおこなわれた。インタビューの時間はひとり 60 分～80 分で、データ収集期間は 2013 年 8 月～10 月である。

協力者の抽出にあたっては、知的障害者に直接スポーツ指導を行っていることを条件とし、団体への登録年数だけでみるのではなく実際の参加状況も判断材料として抽出した。抽出の際は、全会員の参加状況を把握している SON・青森の事務担当者及び、ボランティアリーダーの協力を得て、経験年数や役職経験など大きな偏りがないよう配慮した。調査協力者のプロフィールは表 5-3-1 のとおりである。

表 5-2-1 調査協力者のプロフィール

調査協力者	性別	年齢	経験年数	スポーツ経験
Info.1	男	21	4 年	軟式テニス / バドミントン
Info.2	男	23	4 年	サッカー / バレーボール
Info.3	女	23	6 年	なし
Info.4	女	22	3 年	バスケットボール
Info.5	男	20	2 年	野球
Info.6	女	21	3 年	バドミントン / 空手
Info.7	男	20	3 年	ボウリング / 陸上競技
Info.8	女	21	3 年	バドミントン / 陸上競技
Info.9	女	19	1 年	陸上競技
Info.10	女	23	6 年	なし
Info.11	女	19	1 年	ソフトボール
Info.12	男	18	1 年	野球 / 剣道
Info.13	男	19	1 年	野球 / 弓道
Info.14	女	20	3 年	軟式テニス / 陸上競技

※調査協力者のプロフィールはインタビュー時のもの

分析は、「若年層ボランティアがどのような観点をもって指導にあたっているか」という視点でおこなった。具体的には、得られた回答から関連性があると判断される部分を抽出し、言葉の意味の解釈を行い、調査協力者間での比較を行い、相違点や類似点について把握した。解釈の妥当性性を担保するため、データをまとめた後に、社会科学を専門とする研究者や学生による自主ゼミの場において結果を報告し、意見を仰ぐ手続きも踏んだ。

なお、調査協力者には、プライバシーの厳守及び、研究の趣旨、録音・フィールドノートの作成・分析手順・結果の公開といったデータの扱いについて説明し、すべての事項に同意する意思の確認を行い、協力の了承を得たうえで実施した。

## 第二項 伸ばしたい協調性・コミュニケーション能力

調査の結果、若年層ボランティアは、知的障害者に対して、円滑な人間関係を築いてほしいと考えており、そのために必要な社会的スキルを獲得させたり、意欲を喚起させたりすることを意識しながら指導にあたっていることが明らかとなった。

### 【円滑な人間関係を構築するスキル・意欲 例】

苦手な人と無理に仲良くしろとは言わないけど、そういう人との付き合い方も学んでほしい。そういうところをコーチとしてサポートできるといい(Info.2)

あとは、さっきも言ったんですけど、仲良しなチームになってほしいです。今仲悪いわけじゃないですけど、上手くいってない部分もあるので、楽しんでくれれば(Info.8)

あとは、他のアスリートとの関わり方とか(Info.10)

あとはやっぱりどう話しかければおもしろくてか、いい感じに会話できるのかっていうコミュニケーションの面でもう少しいい感じにできればって考えています(Info.13)

また、他者と協力することの大切さを理解し、実際に行動にうつしてほしいと考えていることもあった。

### 【協力する姿勢・意義の理解 例】

陸上は個人競技ってイメージあるけど、応援したり、バトンリレーとか皆と協力する、そういう皆が協力する楽しさを学ばせたいと思う(Info.1)

個人プレーで勝つっていうのもしてほしいのもあるけど、バスケットはチームプレーでやっていることなので。もちろん自分もだけど他のアスリートの協力とか一緒にやったからこそ勝てたとかそういうのを学んでほしい(Info.3)

やっぱり、チーム戦ですけど、個人プレーも出てくる、そこでやっぱり誰かと協力して点を取るとかを目的にして(Info.12)

色んな世代の人も来てるので、せっかくなので交流して、皆で頑張るっていう意識が生まれてくれるといいなと思う(Info.14)

さらに、自ら他者と関わりをもつことができるようになることを期待していることが伺えた。

#### 【交流志向性 例】

普通に少しでも他のアスリートなり C なりに自分から話しかけていとか、何だろ、自分のことを、自分体調悪いなら悪いですとか話せるようになる。そういうのを学んでもらえれば(Info.4)

あまり一気に多くを望んでもとも思うので。アスリート同士の関わりっていうのが、応援とか。応援を身につけるってのもおかしいんだけど、他のアスリートとかにも意識が向くというか、それぞれの障害考えたら難しいのもあるかもですけど(Info.6)

休憩時間にみんなでブルーシートに集まって交流できているのはいいなと思う(Info.7)

陸上はチーム戦がないので、1人でやるしかないで、出来るだけ交流が生まれるように一方的にならないようには気をつけてます(Info.14)

「円滑な人間関係を構築するスキル・意欲」、「協力する姿勢・意義の理解」、「交流志向性」と解釈できる要素が抽出されたことから、「協調性・コミュニケーション」に関する能力を伸ばしたいという意思・意欲が伺えた。

Lee et al (2003) は、障害のない子供は障害児を遊び仲間として認識しながらも、コミュニケーションにおける制限と行動問題が友人関係の維持を困難にしていることを報告している。ボランティアは、自身のもつ知的障害者との関わり経験のなかで、コミュニケーションの困難性が各人の不利益に繋がることを懸念し、競技に関する技術や体力の向上だけでなく、社会性の涵養にも注力していることがわかった。

どうしても障害ある人ってなると『え・・・』って人いるので、友達とかにもいるんですけど、自分は4年やってそういうのないけど、いずれ社会に出ていくわけだし、やっぱりコミュニケーション苦手なアスリート多いので、そういうところをちゃんとさせてあげたい(Info.2)

という発言からもわかるように、スポーツ場面だけでなく、将来的な自立を想定して社会のなかでうまく生活できることを期待していることが伺えた。

#### 第三項 「わかりやすさ」を重視した指導

若年層ボランティアは、知的障害者とのかかわりにおいて、特に練習中の指示に関しては「わかりやすさ」を重視していることがわかった。

#### 【わかりやすさを重視した指導 例】

陸上どうやったら速く走れるかに向けて、腕の振りを大きくとか、ストライドを大きくするのに物を置いてみたりとか、その子がわかりやすく速く走れるようにやっている(Info.1)

あとは、言葉で理解しにくいアスリートもいるので、伝え方は気を遣ってますかね。一気に3つくらい指示だして動ける人もいますけど、アスリートの目と耳でイメージしてもらうように「まず手本を見せます」と1つずつ(Info.2)

とにかくわかりやすく説明すること。アスリート一人ひとりでもこう言ったらわかりやすいとか違うので、こういう言葉遣ったらわかるのかなとか、こうしたら実践してくれるのかなとかは意識してる(Info.4)

あとコーンを100mごとに置いて、インターバル。それもペースの考え方を学ばせたいなと思って。その辺をちょっと覚えてほしいなと。あとはペースの方でなく、タイムの方だと、スピードをメインにやるけど「できるだけ速く走ろう」と、伝えたり、練習ごとの意図をアスリートに伝えるようにしたいと思ってやっています(Info.7)

あと、こうやるんだよって伝えるとき、実際に身体動かして見せてやっています(Info.9)

まずストレッチとかするときは「今どこの筋肉伸びてるんだよ」とか「ここ伸ばすんだよ」とか、簡単に言うようにしています(Info.11)

ここでいう「わかりやすさ」とは「具体化する」ことである。これは知的障害の障害特性を考慮していると考えられ、「休憩時間とかが指示が曖昧になってしまうので、時計の長い針がゼロのどこまでだよとか、わかりやすく。あと前もって伝えておくことにしている(Info.1)」など、抽象的な指示や呈示、一度に複数の情報を与えることを避け、目標物を置いたり実際に手本を見せたり、視覚情報に訴えかけるような工夫を凝らしていた。

#### 第四項 専門外の指導をしている現状と不安、専門性獲得のための努力

若年層ボランティアは、前述した知的障害者の特性をよく理解している点もそうだが、非常に学ぶ意欲が高いことが明らかとなった。

##### 【学ぶ姿勢】

あと、雨の日外で出来ないのが体育館に限られたスペースでできるメニューを、中高とかでやってる室内メニューを調べて。ラダーとか縄跳びとか室内で出来るトレーニングを考えたり(Info.1)

練習、今初級バスケ今まで試合形式だとボラの人に任せてしまう部分あったんですけど、コーチクリニックで教わったボール追いかけるとか、ディフェンスを今やろうと思って考えて練習組んでいます(Info.6)



あと、来年コーチとして教える立場になった時に、練習の内容とかどういう練習すればどう伸びるとか、勉強していかなきゃ、コーチ変わって急に練習変わったとかはアスリートも戸惑うと思うので。良い練習取り入れていければ(Info.13)

しかし、その学ぶ姿勢の背景には、指導している競技に関する知識や経験がないという自覚と、それに起因する不安感やもどかしさが確認された。

**【知識・経験がないことによる不安・もどかしさ 例】**

自分自身に競技経験がないから、このメニューにこの意味が〜とか、審判はこのプレーどう吹くとか、本読んで一生懸命勉強してます。審判のシグナルとか、やってまた競技だと流れとか戦術はわかるけどやったことないのが今やって大変と思います(Info.2)

自分がバスケ経験したことなかったの、技術面でうまく伝えるためにまだまだなところがあって、HCとか他の人のサポートあってこういうとこ注意してみようとかはありますけど、勉強不足なので。なんでそこ違うのかとか自分でもわかりきってない部分が大変(Info.3)

わかんないことばかりなので、自分で一生懸命、例えば「一緒に並んで走って」とか言われたら、こんな感じとかでなくて、自分もトレーニングするつもりで一生懸命やって(Info.9)

練習の内容を理解してもらいたいんだけど、なぜその練習をするのか意味がわかってないからうまく動けないのが、もどかしいです。正直言うと困ったなっていうことは少ないんですけど。バスケに関する知識はもちろんないんで、そういう点からあっているのかという不安はありません(Info.5)

自分の中で感じるのがバスケの経験がないのでバスケ経験者が行ったことをそのまま繰り返す言うしかない、聞いている側からしたら「違うのか」ともどかしい部分もあります(Info.8)

大会にも行ってみたいし、もっとかかわりたいんですけど、さっきも言ったように、スポーツの経験があれなので…って思ってしまう。尻込みする(Info.10)

また、自己研鑽によって専門性を高めようとしながらも、すでに競技の専門性を獲得している経験豊富なボランティアの加入を望んでいる側面もあった。

プログラムとしてはゆくゆくは今みたいな僕みたいに経験なくて専門的なメニューできないって人ではなくて、プレイヤーでやってきた人の専門的な指導をできたらいいなと。そこに自分いなくても構わないです(Info.2)

やっぱり経験してた人もいと、アスリートに具体的な指導もできるんだろうと思います。そういう人が入ってくれたらいいなって(Info.10)

**元々野球で、高校で剣道だったんですけど、バスケット自体は、友達と休み時間やったりとかは体育とかではありますけど、僕もやったことないので。そのスポーツの経験者を入れたいですね(Info.12)**

このように、若年層ボランティアは専門としない競技の指導にあたることがあり、不安やもどかしさを感じながらも、それらを払拭し、質の高いスポーツ指導ができるように自己研鑽を重ねているという実態が明らかとなった。スポーツ指導が主たる活動内容であり自発的な参加を前提としている以上、本来であれば、スポーツの知識・経験に乏しい者が多く集まるということは考えにくいですが、これは、「知的障害者スポーツ」ならではの課題なのかもしれない。スポーツ分野のボランティア活動においては、松尾（2002）が指摘しているような、ボランティア精神の過度の強調と、ボランティアがスポーツの専門性を追求することが馴染まない現状がある。特に、ボランティアへの依存度の高くマンパワーが不足している知的障害者のスポーツにおいては、その傾向が顕著であることが推察される。

### 第三節 小括：若年層ボランティアの牽引力発揮にむけた示唆

本章においては下記のことが示唆された。

①知的障害者はボランティアそれぞれに個別の評価をおこなっており、その評価は改善することが可能であること。

②年齢や性別、当該活動の経験年数よりも、そのフィールドにおいてどれだけ中心的な人物であるような行動を示したかどうかが、より評価に大きな影響を与えうること。

③若年層ボランティアは、知的障害者へのスポーツ指導にあたっては、わかりやすい指示を出すことを心掛けており、競技の技能だけでなく、協調性やコミュニケーション能力の涵養を強く意識していること。

④若年層ボランティアは、自身の指導及びスポーツプログラムの質を高めるべく意欲的に自ら学習をしているが、その背景には、当該競技に関する知識や経験がないという自覚と、それに起因する不安感やもどかしさがあること。

様々な組織や団体、諸活動において中心的な役割を担うには、ある程度の活動実績が求められる場合が多いため、必然的に参加年数や接触時間が付随してくるであろう。そこからすれば、知的障害者がボランティアに対して個別評価するに、間接的には経験年数や年齢が影響してくるともいえる。しかし、知的障害者が納得し、指示に沿って行動できる要素として、「ボランティアの挙動」が大きな影響力をもつとすれば、知的障害者スポーツにおける経験年数や、当該参加者との接触年数が少ない人物であっても、十分に指導者としての役割を果たし得る。第二章第二節や本章第二節で述べたように、ボランティアは「自身が役にたっているか」不安に感じていたり、「専門性がない」ことを自覚したりしている実態を考えれば、経験のない者が指導者となることの是非については議論しなければならないが、今回の結果は新たなボランティア層開拓に資するものではないだろうか。

河添（2007）は、非営利組織におけるリーダーは、リーダーシップを発揮しつつフォロワーシップも兼ねているという面をもち、状況との適合性から組織の成員の誰もがリーダーとなりえることを報告している。また、非営利組織において生じるリーダーシップはリーダーとフォロワーという役割分担的な考え方からくるのではなく、相互作用的なものであって、そのことはフォロワーの職務上のプレッシャーの軽減やフォロワーの自立を促しうるなどの利点があると述べている。つまり、時にリーダーとして全体をまとめ上げ、時には一構成員としてリーダーシップを発揮している者に追従するという、役割の変化が生じうるのである。役職としてのリーダーではないメンバーがリーダーシップを発揮するという状況は、指示系統の乱れにつながる可能性もあり、その背景にはリーダーの怠慢や集団の統率がとれていないという事態が生じているのかもしれない。しかし、状況に応じて誰しもある程度集団をコントロールできることは、臨機応変な対処が求められる知的障害者のスポーツ指導場面において、十分に利点となりえるものと考ええる。

一方で、第四章において、知的障害者本人及び保護者は指導者に対して高い専門性を求めていることが明らかとなったが、本章の結果からは知的障害者スポーツに携わる若年層ボランティアは、必ずしも競技に関する専門性を備えていない可能性が考えられた。また、第二章で確認されたような知識や指導成果に関する不安感は、過信や慢心をしないという謙虚さや慎重さに起因するものではなく、実際に自身の知識や経験が乏しいという自覚によってもたらされているものであることも伺えた。しかしながら、若年層ボランティアは、自分たちの知識・経験不足を補うべく個人レベルで学習を重ね、指導にあたっては知的障害者が理解しやすいように声の掛け方や情報の示し方について工夫を凝らすなど、サービスの質を高めるべく最大限の努力をしていた。こういった姿勢や行動が、知的障害者とその保護者からの肯定的評価に繋がっているのではないだろうか。また、知的障害者本人も保護者もスポーツ場면을コミュニケーションできる場として認識しているのと同様（第四章）、若年層ボランティアも協調性やコミュニケーション能力の涵養を重要視していたことも、指導内容への満足度を高め感謝の気持ちを惹起しているものと思われる。

以上のことから、本章における知見をまとめると、「親しみやすいボランティア団体モデル」に次の観点を組み込むことが重要であると考えられる。

- ・集団の前に出る役割を与える
- ・若年層ボランティアが「知的障害」や「指導している競技」に関する知識、「コーチング方法」について学習できる機会を設ける ※第二章・第四章でも確認
- ・知的障害者が、ボランティアや他の知的障害者とコミュニケーションでき、相互に感謝を示す機会を確保する ※第四章でも確認

## 第六章 総括：知的障害者スポーツのマネジメント理論

### 第一節 モデルの提示

本研究は、知的障害者スポーツにおいて特に若年層の獲得・定着を企図したボランティアマネジメントの理論生成を目的とし、当事者に求められる指導者像と若年層ボランティアの役割認識の整合性、ボランティアの離脱リスクの背景要因、若年層ボランティアの活動継続を促進する要因、若年層ボランティアが指導者としての牽引力を発揮するための諸条件について明らかとした。これまでの結果を踏まえて、マネジメントモデルの構築には下記の点を考慮する必要がある。

1) 特定人物への過重負担を避けるために業務を明確化し、適切に分業する  
(直接指導、人間関係、責務の重さの負担解消 第二章第一節)

2) 加入時に団体理念の丁寧な説明  
(負担感としての理念不徹底 第二章第一節)

3) (特に若年層ボランティアに対して)「知的障害」や「指導している競技」に関する知識、「コーチング方法」について学習できる機会を設ける  
(知的障害者本人および保護者は専門性の高い指導を受けたい。また、若年層の指導に関わる不安感が「役立てていない」という認識に繋がり、不安解消のために各自で学んでいる現状がある 第二章第二節 第四章第一節・第二節 第五章第二節)

4) やりがいと責任ある役割を与える  
(役職経験が自己達成感を高める 第二章第二節 第三章第一節)

5) 強い参加動機のない者に対してもアプローチし、「やってみやすい雰囲気」と「楽しめる」ポイントを作る  
(興味関心がなくとも、参加するなかで指導者としての使命感を形成する 第三章第一節)

6) 「指導者」に徹することの重要性を説明する  
(日常生活の人間関係・社会的地位は持ち込まない 第三章第一節)

7) 知的障害者が、ボランティアや他の知的障害者とコミュニケーションでき、相互に感謝を示す機会を確保する  
(スポーツ場面がコミュニケーションの場としての機能をもつことが期待されている 第四章第一節 第四章第二節 第五章第二節)

8) 積極的な若年層のリクルート  
(友人的かかわりやバイタリティ、将来性に対する期待 第四章第一節 第四章第二節)

## 9) 集団の前に出る役割を与える

(牽引力には、実力・実権があると見える挙動が重要 第五章第一節)

これらを Hobson et al (1996) のモデルに組み込み、「知的障害者スポーツにおける親しみやすいボランティア団体モデル」として図 6-1 のモデルを提唱する。なお、実際にマネジメントをおこなう者がチェックリストとして活用しやすいよう、モデル中の文言も修正することとする。以下、各フェーズごとに要点を解説する。

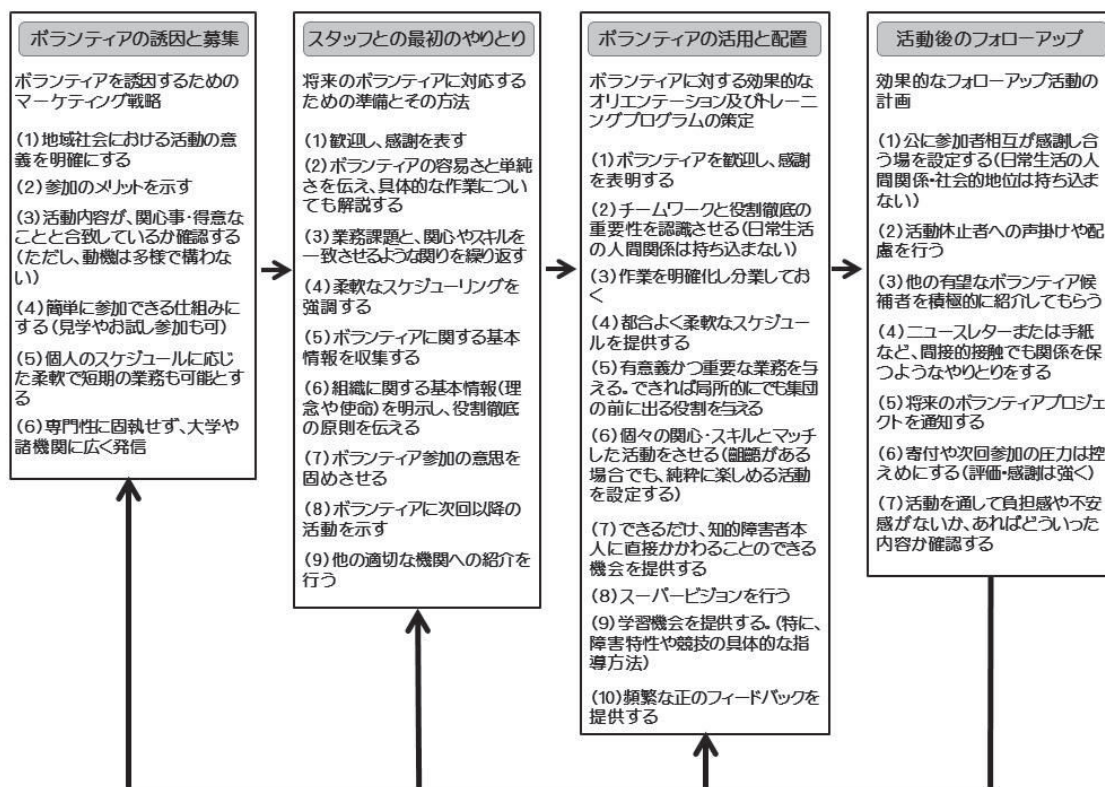


図 6-1 知的障害者スポーツにおける親しみやすいボランティア団体モデル

## 第二節 ボランティアの誘因と募集

本フェーズにおいて、本研究における知見を組み込んだポイントを図 6-2 に示す。組み込むボランティアのリクルートに関しては、大学や各種機関を対象に、広く募集の案内をだすことが重要と考える。特に大学生は、スポーツボランティアの実施率は低いものの、ボランティア活動に興味があるものは少なくなく、その参加を阻害する要因として、ボランティア活動についての情報の入手方法がわからないという現状が示唆されている(内藤,2007)。よって、まずは団体・活動を知ってもらうということを前提にして、大学関係者に活動への協力を依頼した

り、大学生が集まる場所にポスターを掲示したり、大学のボランティアサークルに活動紹介をさせてもらったりなど、積極的に大学生に対して PR していくことが効果的なのではないだろうか。特に、口コミの効果は大きいので、大学教員やすでに参加している学生ボランティアなどを起点として、広く周知を図ることが望ましい。その際、学部を限定しないことがボランティア獲得の鍵となるだろう。ボランティア活動、特に「知的障害者」への「スポーツ指導」となると、まず思いつくのが、教育学部（体育専攻、特別支援専攻）や社会福祉学部ではないだろうか。確かに、活動内容の専門性からすると最もマッチしている対象であると考えられるが、そもそも参加するボランティアが必ずしもスポーツ指導の専門家でなければならないわけではない。事実、本研究で調査対象とした若年層ボランティアは、自身が専門的に取り組んできていない競技の指導をおこなっており、なかにはスポーツ経験がない者すら存在したが、そのことが大きな不利益となつてはいなかった。Lave & Wenger (1991) の「正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation : LPP)」の概念を援用すると、「学習」は「個人内の知識・技能の獲得」に限定されず、外界との相互作用のなかで成員として「一人前」になることと捉えられる。つまり、第三章で確認されたような、参加動機すら明確でなかったボランティアが、知的障害者の成長を実感したり、保護者との人間関係に疲弊したりするなかで、指導者としての意識が確立されてゆくという、「流れの中で一人前になる」ことを前提とするのである。「即戦力」や「興味関心のある者のみ」を獲得するという発想ではなく、携わるなかで指導者としての素養を身につけさせるという視点が重要と考えられる。

【得られた知見(組み込むべきポイント)】

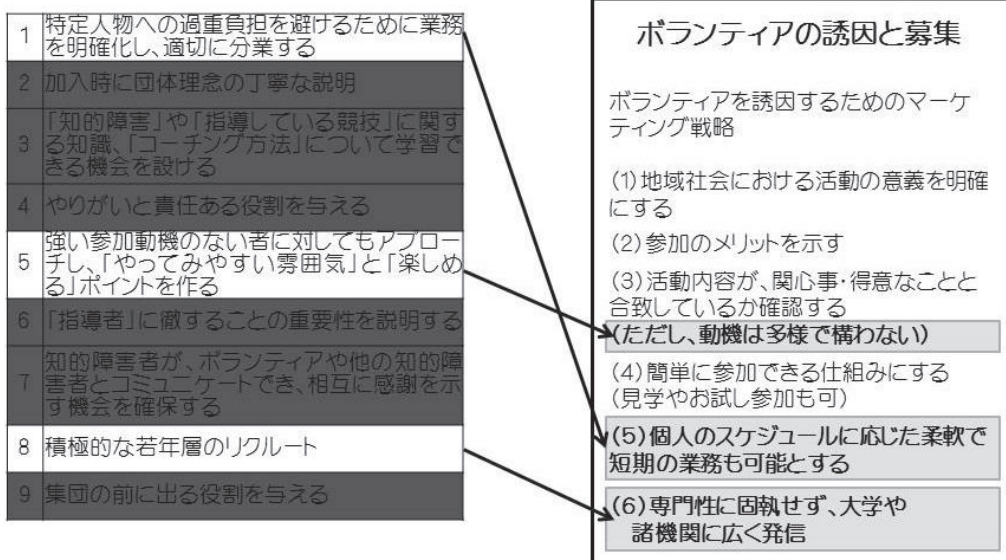


図 6-2 「ボランティアの誘因と募集」フェーズにおける組み込んだポイント

### 第三節 スタッフとの最初のやりとり

本フェーズにおける組み込んだポイントとその後のモデルは図 6-3 の通りである。組織スタッフとの接触にあたって重要なのは「団体の理念や使命を伝え了承を得る」ことである。第二章で負担感因子として「理念乖離」が抽出されていたが、ボランティアな組織には不特定多数の人が集まってくるため、それぞれの思惑で団体の方針とそぐわない行動をとることが起こりえる。遠藤・杉田（2010）が災害復興活動における迷惑ボランティアを排除できるよう、ボランティアの知識や復興に向けた意識を確認して選別する手法を提案しているが、周囲に悪影響を及ぼすボランティアというのは少なからず存在する。ボランティアな組織・団体は間口を広くとってしまいがちであるが、ボランティアの人数を確保したいからと、活動の趣旨すら聞かされていない人でもとりあえず参加させてしまうことは、参加後に他のボランティアとの衝突を生じさせる可能性がある。知的障害者のスポーツ団体と言っても、例えば競技性を重んじる団体から、レクリエーションの要素が強い団体など様々であるため、ボランティアの活動スタンスが著しく団体理念と異なっている場合は加入の段階でスクリーニングをしておかねばならない。むしろ活動実績を作ってしまうと「今までこうやってきた」と正統性を主張する余地を与えてしまう。ただし、これは、団体の方針や構成員としての行動規範を遵守させなければならないという意味で合って、ボランティア希望者の関心・スキルと活動内容が必ずマッチしていなければならないという意味ではない。団体の理念を共有出来るのであれば、ボランティア本人の関心やスキルに言及せず、知って、携わってもらうことが良いだろう。

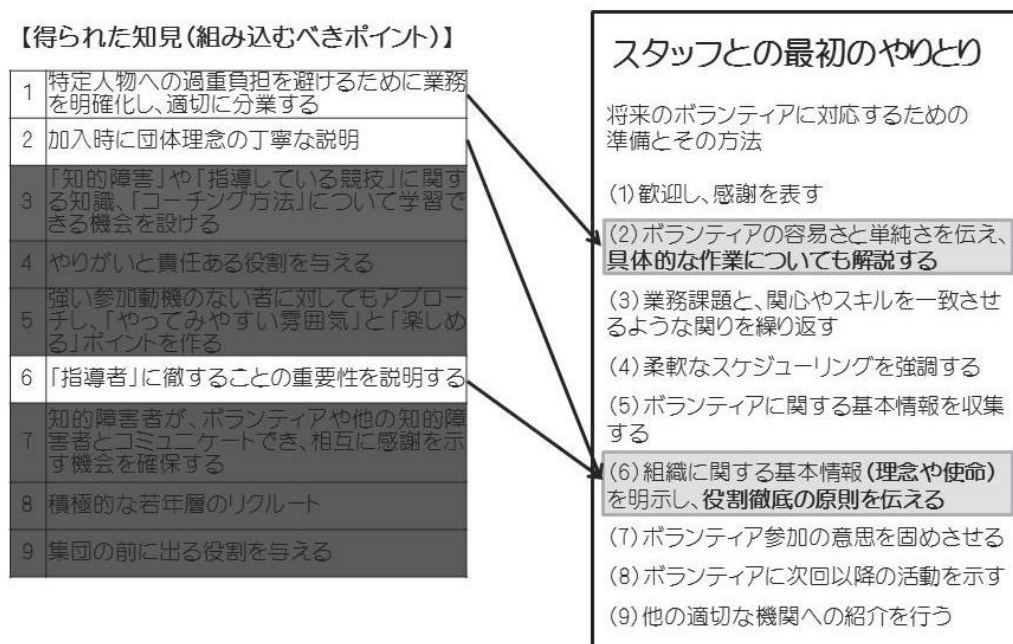


図 6-3 「スタッフとの最初のやりとり」フェーズにおける組み込んだポイント



#### 第四節 ボランティアの活用と配置

本フェーズにおける変更後のモデルは図 6-4 の通りである。ボランティアの活用と配置にあたっては、まず作業の明確化と分業化をおこなうことが大切である。これは、知的障害者にスポーツ指導をおこなううえで必要となる作業を明確化し、誰にでも具体的にどのような作業があるのか把握できるようにしておくということである。具体的には、「会場の借用」、「参加者への案内」、「必要物品の準備」など、単に行為としての羅列ではなく、例えば会場の借用であれば、会場名、連絡先、借用に必要なものリスト、利用料金など、会場の借用に必要な情報をまとめ、具体的に何をどういった手順で準備をするべきかを明らかにしておく必要がある。一見当たり前のことのように思えるが、知的障害者スポーツのボランティアという一般市民の有志の集団においては、詳細なマニュアルを作成していたり、かなりシステムチックな運営をしているというケースは多くない。このような実状があるため、経験年数も長く参加頻度の高いボランティアは何をする必要があるか経験知のなかで理解していることが考えられるが、それを誰にでもわかる形で示さなければ、結局「その人にしかできない」「私がやった方が早い」と、多くの作業を特定のボランティアに依存してしまう事態が生じうる。それによって、特定のボランティアの作業量が増え、その他のボランティアも協力可能な部分が減ってってしまう。また、自発的に参加してはみたものの、作業がないことによって、結局自分の活躍の場がない、できることがないため、やりがいを感じられず、意欲の減退や離脱につながってしまうという問題も生じうる。しかし、必要な作業を明確にすることができれば、ボランティア同士で作業を分担しやすくなるし、仮に経験の少ないボランティアであっても、具体的に何をどのようにするかがわかっているならば、担うことができる部分があることがみえてくるだろう。作業を分担できれば、特定のボランティアの過重負担を解消することができ、同時に新たなボランティアがノウハウを学ぶことになり、結果、より円滑な運営を可能とすることにつながる。つまり、キーパーソンに依存するのではなく、システムとして機能するように、作業の明確化・分業化をしておかねばならないのである。

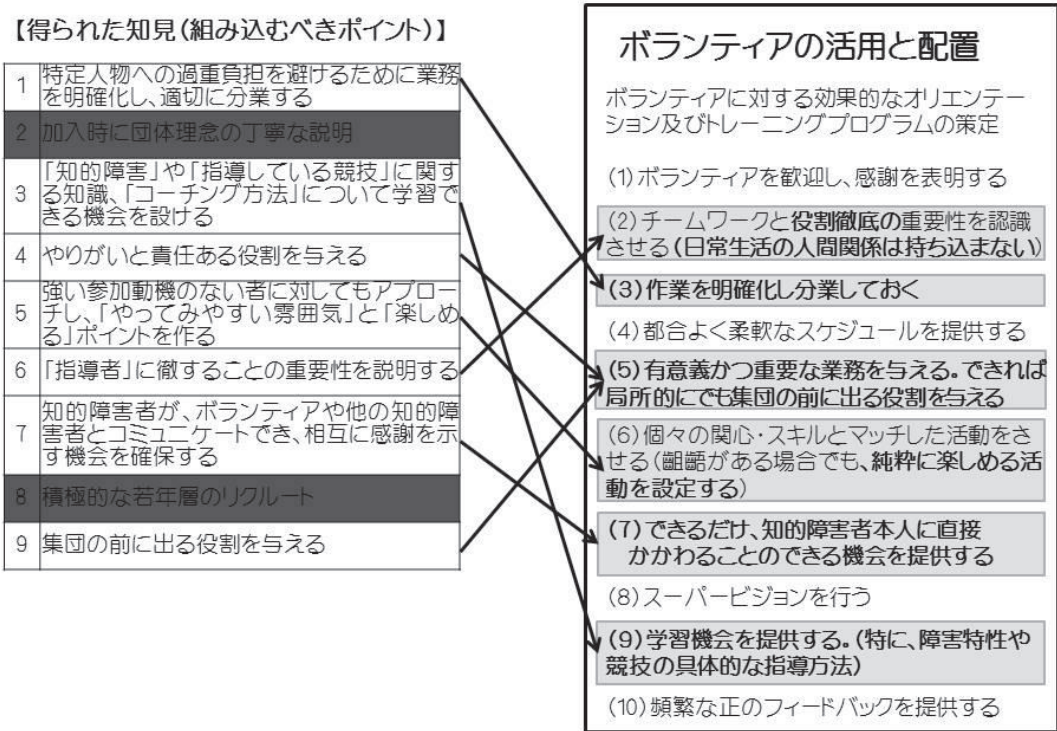


図 6-4 「ボランティアの活用と配置」フェーズにおける組み込んだポイント

### 第五節 活動後のフォローアップ

本フェーズにおける変更点は図 6-5 の通りである。フォローアップで留意すべき点は、日頃の人間関係を持ち込まないことを前提としながら、公式に評価と感謝をする場を設けることである。公に感謝の場を設けることは、第二章で述べたような若年層ボランティアの自己不安を解消するだけでなく、相互に労をねぎらい合うことから人間関係を円滑にする作用も期待できる。ボランティア活動は、原則自発的意思に基づいており、金銭の享受は生じない。つまりは「好きでやっている」のであって、そこに強制性は生じないし、利目的の企業とは異なり「対価」という発想はない。しかし、長期的にわたって関わっていると、知的障害者本人も保護者も(第四章)、指導者に高い専門性や真摯な姿勢を求めているように、現時点で受けているサービスが当たり前になり、より高い「質」を求めるようになることが考えられる。ボランティア自身も望んで受けきれない範囲で要求に応える分には問題ないが、指導者への期待が高まり、サービス提供が当たり前になれば、一身上に都合で活動離脱をする際などに「無責任だ」などと指摘される事態が生じかねない。スポーツをしたいという者がおり、指導に携わりたいという者がおり、それを経済面や送迎などの面からサポートしてくれる者がいるからこそ、活動が成り立っているということを忘れないためにも、お互いに感謝し合う場を意図的に作ることが望ましい。

なお、日頃の人間関係を持ち込まないという前提がなければ、年上のボランティアに対して年下のボランティアは発言しにくくなってしまったり、仮に年下のボランティアが意見をすると、年上のボランティアは気を悪くしてしまうといった事態が生じかねない。第四章で述べた継続参加ボランティアの実態においても確認されたように、ボランティアとしての言動や実績ではなく、日常生活の社会的地位によって意見が通りにくい・同じことをしても認められにくいという事態が生じることが考えられる。また、特定ボランティアへの過重負担を解消すべく分業化を進める必要があるが、そのようななか、各自が担当した作業において、常に特定の「個人」に話を通さなければならないといったことや、担当者が知らないところで勝手に話が進んでしまうといった越権行為が生じるようでは、適正な運営は困難となってしまいうだろう。加えて、物事を決める際に「個人」が強調されてしまうと、意見が食い違った場合さえも、その「個人」が批判の対象となってしまう危険性がある。当該活動内における役割が明確に定まっておらずその役割が優先されるという前提のなかであれば、誰かの意見を採択・棄却する際も「役割上やむを得ない」と納得することができるが、誰に決定権があるのかも不明瞭ななかで議論が展開されれば、「特定の個人に否定された」という図式になってしまうことが考えられる。

加えて、疎遠になってしまったボランティアにも定期的に活動の案内を出したり、参加を呼び掛けてみたりと関係を切らさないことも重要であろう。特に大学生ボランティアは、卒業・就職による活動離脱が危惧されており、「辞める時期がみえている」こともある。就職先が遠方地になってしまえば当然当該活動に参加することはできなくなるし、仮に近隣で就職したとしても、就職先の業務形態

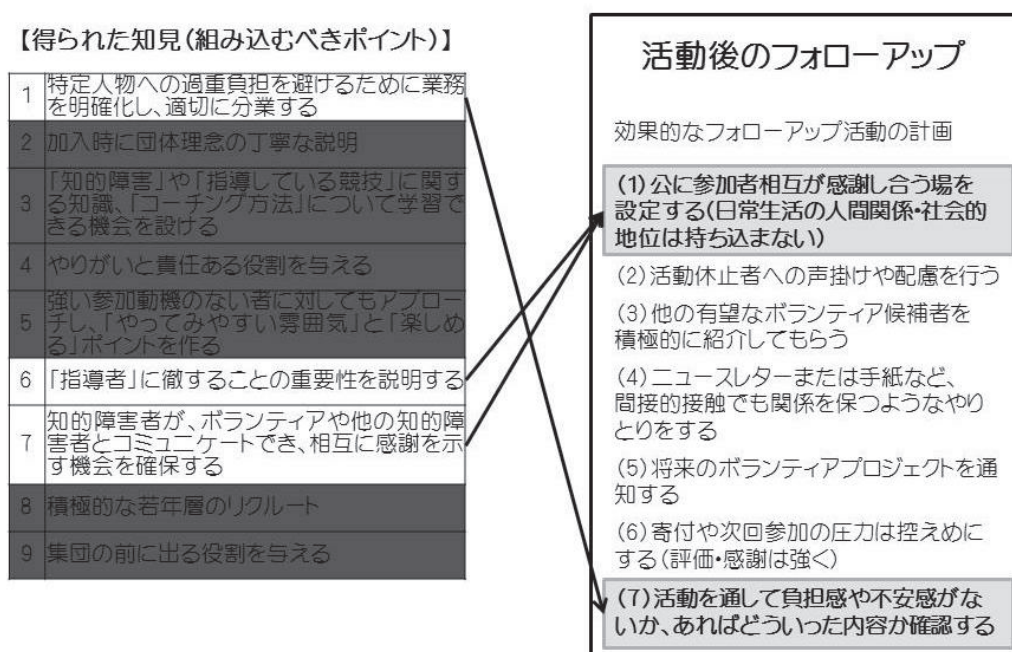


図 6-5 「活動後のフォローアップ」フェーズにおける組み込んだポイント

やボランティア活動への理解によって、参加できない場合が生じてくる。しかし、第四章で保護者が若年層の将来性に期待しているように、社会に出てから、例えば団体に対して金銭的な援助をしてもらえるかもしれないし、会社や家族に PR してくれるかもしれない。何かのタイミングで協力を得られるかもしれないので、一度興味を持って携わってくれた相手には、節目ごとに挨拶を交わすことが好ましいと考える（もちろん、参加するようプレッシャーをかけるのではない）。

また、大学生ボランティアの卒業に伴う離脱は、確かにマンパワーの減少という点からすればデメリットであるが、逆に、知的障害者にとって、仲間との別れや、新たな人との出会いを経験する機会と捉えることもできる。知的障害者がスポーツ活動を楽しむなかで、常に同じ顔ぶれではなく、様々な世代のボランティアとかかわることができれば、友人としてのかかわりはもちろん、時に親子のような、兄弟のようなかかわりをも可能とすることから、社会性を育むことにもつながるのではないだろうか。「ボランティアの新陳代謝」を前提にして構えることによって、先に述べた作業の明確化・分業化をより意識する必要性が生じ、作業の明確化・分業化をできることで、新たなボランティアがノウハウを学んでいくことになると考える。ボランティアは常に循環するものであると捉え、既存ボランティアに活躍を期待しながらも、同時に新規のボランティアの獲得も考えていくべきである。

## 第六節 今後の課題

本研究は、複数の研究成果をもとに、「若年層ボランティアの定着に寄与しうる知的障害者のスポーツマネジメントモデル」の構築を試みた。しかし、既存の理論を援用し、具体的な事例を検討することからより妥当なモデルとなるよう構成しなおしたが、一連のフローに準じて実証的には効果の検討ができていない。今後は、実際にモデルに沿って実践し、加入する立場または受け入れる立場のボランティアの満足度に関しても把握するなど、その効力について検証し、他の領域における適合可能性についても検討してゆく必要がある。

## 引用・参考文献

- 阿部美穂子・廣瀬真理（2008） 軽度知的障害児の安心・自信・自己肯定感の獲得に関する研究—児童福祉施設併設特別支援学校における実践から— 富山大学人間発達科学部 紀要 3（1） 55-66
- 阿部好恵（2011）精神障害者の「語り」を対象とした質的研究の意義：やどかり研究所報告・交流集会における研究報告から 帯広大谷短期大学紀要 48, 87-98
- 安藤香織・広瀬幸雄（1999） 環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因 社会心理学研究 15（2） 90-99
- 朝比奈一男（1985） 運動が脳・神経機能にあたえる効果 体育の科学 35（10） 763-766
- 浅野勝己（1985） 運動が心肺機能にあたえる効果 35（10） 747-759
- 綾部誠・秦超群（2012） 災害支援活動における非営利組織の資源構成要素とマネジメントに関する研究：ボランティア山形の東日本大震災における活動事例から 山形大学紀要. 社会科学 43（1） 1-15
- 我妻則明・伊藤明彦（2002） 知的障害児の肥満に関する研究の展望 特殊教育学研究 39(4) 65-72
- Bredenkamp,S（1992） What Is “Developmentally Appropriate” and Why Is It Important? *The journal of physical education, recreation & dance*, 63, 31-32
- 長ヶ原誠・山口泰雄・野川春夫・菊池秀雄（1991） スポーツイベントのマネジメントに関する研究(2)—ボランティアの継続意欲の視点から— 鹿屋体育大学研究紀要 6 69-75
- Clary,E.G. Snyder,M. Ridge,R.D. Copeland,J. Stukas,A.A. Haugen,J. and Miene,P.（1998） Understanding and Assessing the Motivations of Volunteers: A Functional Approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(6), 1516-1530
- Cummins,R.A.（2002） Proxy responding for Subjective Well-Being: A Review. *International Review of Research in Mental Retardation*, 25, 183-207
- 独立行政法人日本学生支援機構（2006） 学生ボランティア活動に関する調査報告書
- 遠藤愛（2008） 発達障害児の保護者がボランティアに向ける余暇支援ニーズの検討—個別の活動報告による支援結果のフィードバックの効果— 立教大学心理学研究 50 1-9
- 遠藤大介・杉田薫（2010） 災害情報デザインに関する研究 災害復興ボランティアのためのコンテンツの検討 マルチメディア通信と分散処理ワークショップ 2010 論文集（11）, 31-36
- 藤田紀昭（2004） 地域における障害者スポーツ大会および教室の実態に関する研究—障害者スポーツ指導者の活動の活性化の視点から— 日本福祉大学社会福祉論集 111 73-90
- 藤田紀昭（2008） 障害者スポーツの世界 アダプテッド・スポーツとは何か 角川学芸

- 出版 第二章 わが国の障害者スポーツの変遷と現状 13-60
- 浜口弘 (2006) 知的障害児 (者) の肥満の治療と支援 小児看護 29 (6) 719-724
- 橋本公雄・斎藤篤司・徳永幹雄・磯貝浩久・高柳茂美 (1991) 運動によるストレス低減効果に関する研究 (2) 一過性の快適自己ペース走による感情の変化 13 1-7
- 橋本好市 (2000) 障害者に対する意識と接触経験の関係—社会福祉系専門学校生の「障害者に対する意識調査」結果から— 福祉研究 88 25-32
- Harada,C.M. and Siperstein,G.N. (2009) The Sport Experience of Athletes With Intellectual Disabilities: A National Survey of Special Olympics Athletes and Their Families. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 26(1), 68-85
- 原美智子・江川久美子・中下富子・山西哲郎・下田真紀 (2001) 知的障害児と肥満 発達障害研究 23 (1) 3-12
- 原光彦 (2006) 運動療法の考え方と実際 小児看護 29 (6) 708-713
- 平岡公一 (1986) ボランティアの活動状況と意識構造—都内 3 地区での調査結果からの検討— 明治学院論叢 394・395 29-61
- Hoffman,M.L. ( 1978 ) Psychological and Biological Perspectives on Altruism. *International Journal of Behavioral Development*, 1: 323-339
- Hobson,C.J. Rominger,A. Malec,K. Hobson,C.L. and Evans,K. ( 1996 ) : Volunteer-friendliness of nonprofit agencies : definition, conceptual model, and applications. *Journal of Nonprofit & Public Sector Marketing*, 4(4) : 27-41
- 一般社団法人日本私立大学連盟 学生委員会 (2015) 私立大学学生生活白書 2015
- 石黒久美子・中村攻・木下勇 (1999) 知的障害者の余暇生活環境整備に関する基礎的研究—知的障害者の余暇生活行動の実態把握とその規定要因の分析— 千葉大学園芸学部学術報告 53 39-45
- 石倉健二・坂口愛 (2009) 知的障害等のある児童生徒の肥満と行動特徴の関連についての検討—ある特別支援学校での調査を通して— 兵庫教育大学研究紀要 35 59-63
- Jones,T.W. Sowell,V.M. Jones,J.K. Butler,L.G.(1981) Changing Children's Perceptions of Handicapped People. *Exceptional Children*, 47, 365-368
- 甲斐裕子・永松俊哉・志和忠志・杉本正子・小松優紀・須山靖男 (2009) 職業性ストレスに着目した余暇身体活動と抑うつとの関連性についての検討 体力研究 107 1-10
- 金山千広・山下秋二 (1996) 知的障害者とスポーツ経営：ノーマリゼーションからみた支援組織の経営分析 体育・スポーツ経営学研究 12 (1) 11-31
- 金子勝司・南條正人 (2007) 知的障害児 (者) のスポーツレクリエーション活動と生活の質 (QOL) に関する研究—性別による活動群と非活動群からの比較検討— 共栄学園短期大学研究紀要 23 111-125
- 金崎良三 (2005) スポーツ・ボランティア研究 (1) —大学生のスポーツ・ボランティア活動についての意識と実態— 佐賀大学文化教育学部研究論文集 9 (2) , 201-212

- 柏原正尚 (2010) 高齢者施設における介護サービス業務分析とボランティアマネジメントの可能性 日本福祉大学健康科学論集 13 1-15
- 加藤潤三・藤原武弘・野波寛・安藤香織 (2004) 学生ボランティアと一般ボランティアの比較調査 日本社会心理学会大会発表論文集 演題番号 376
- 河崎智恵・岩本廣美・仲川元庸 (2011) 教員養成系大学におけるボランティアを核としたキャリア教育の実践 学校教育実践研究 3 21-28
- 河内清彦 (2006) 障害者等との接触経験の質と障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について—障害者への関心度・友人関係・援助行動・ボランティア活動を中心に— 教育心理学研究 54 509-521
- 河添博幸 (2007) 非営利組織におけるリーダーシップ—類型的研究に関する一考察— 熊本大学社会文化研究 5 77-94
- Khoo,S. Engelhorn,R (2011) Volunteer Motivations at a National Special Olympics Event. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 28, 27-39
- 木原勇夫・橋本龍樹 (2000) 知的障害者における体力の縦断的測定 体力科学 49(6) 887
- 木村琢磨 (2007) 戦略的人的資源管理論の再検討 日本労働研究雑誌 49(2・3), 66-78
- 金城昇・奥澤かおり (2002) 精神遅滞児の体力、運動能力の特性と学校生活身体活動水準. 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要 4 87-97
- 木下康仁 (2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い— 弘文堂
- 木谷秀勝 (1997a) 「スペシャルオリンピックス」の現状と今後の方向性に関する一考察—スペシャルオリンピックスの活動と”1997 World Winter Games”の報告を中心として— 九州女子大学紀要 34 (1) 9-14
- 木谷秀勝 (1997b) 学生ボランティアの特質と今後の課題 教育と医学 45 (10) 52-58
- 北村尚浩・松本耕二・國本明德・仲野隆士 (2005) スポーツ・ボランティアの組織コミットメント 体育学研究 50 37-57
- 北川薫 (1985) 運動が身体組成にあたえる効果 体育の科学 35 (10) 772-775
- 小林裕 (2014) 戦略的人的資源管理論の現状と課題 東北学院大学教養学部論集 167 63-75
- 年度知的障害児 (者) 基礎調査結果の概要
- 草野勝彦 (2004) 障害者スポーツ科学の社会的課題への貢献 障害者スポーツ科学 2 (1) 3-13
- Lave,J. Wenger,E. (1991) : *Situated Learning -Legitimate Peripheral Participation-*. Cambridge University Press. 佐伯胖・福島真人 訳 (1993) 状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加— 産業図書株式会社
- 石井 好二郎 (2000) 知的障害児童・生徒の身体発育に関する検討 学校保健研究 42(4), 304-311

- 丸山啓史 (2004) 重度知的障害者の余暇保障に関する一考察 生涯学習・社会教育学研究 29, 63-71
- 松本耕二 (1999) スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究—障害者スポーツイベントのボランティアに着目して— 山口県立大学社会福祉学部紀要 5 11-19
- 松本耕二・北村尚浩・國本明德・仲野隆士 (2004) スポーツ・ボランティアの参加動機・組織コミットメントと継続意欲 山口県体育学研究 13-22
- 松尾哲矢 (1996) 少年スポーツのボランティア指導者におけるドロップアウトに関する日米比較研究—福岡市と Urbana-Champaign 市の事例を中心に— レジャーレクリエーション研究 35 10-20
- 松尾哲矢 (2002) スポーツ・ボランティアとその専門性～【ボランティア—専門職】指導者システムの再構築～ 体育の科学 52 (4) 270-276
- 松尾哲矢・多々納秀雄・大谷善博・山本教人 (1994) ボランティア・スポーツ指導者のドロップアウトに関する社会学的研究：指導への過度没頭と生活支障の関連及びその規定要因について 体育学研究 39 163-175
- 松岡宏高・小笠原悦子 (2002) 非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機 体育の科学 52 (4) 277-284
- 宮城孝 (1989) ボランティア活動担当者の業務とその専門性について 日本社会事業大学社会事業研究所年報 25 23-37
- 溝口紀子・岩田香織 (1999) 全国知的障害児施設におけるスポーツ活動の実態調査 静岡県立大学短期大学部研究紀要 13 (2) 239-246
- 望月浩一郎 (2007) 日本の障害者スポーツと法をめぐる現状と課題 身体教育医学研究 8 (1) 1-11
- 文部省高等教育局 (1999) 大学教育におけるボランティア活動の推進について 大学教育研究会監修 大学資料 143.144 合併号 43-68
- 守田香奈子・七木田敦 (2004) 知的障害児のスポーツ活動への参加を規定する要因に関する調査研究—保護者への調査を通じたニーズの把握— 障害者スポーツ科学 2 (1) 70-75
- 南條正人・仲野隆士・小池和幸 (2005) 知的障害児(者)の余暇活動と生活の質(QOL)に関する研究—スポーツ・レクリエーション活動の活動群と非活動群— レジャーレクリエーション研究 55 26-29
- (財)内外学生センター (1999) 「学生のボランティア活動に関する調査」結果について 大学と学生 409 56-61
- 内藤正和 (2007) 大学生におけるスポーツ・ボランティア活動へのニーズに関する研究 愛知学院大学心身科学部紀要 3 21-29
- 中山考之 (2000) 知的障害児の余暇と地域生活—余暇の実態調査より— 情緒障害教育研究紀要 19 239-246



- 内閣府 (2013) 障害者白書 平成 25 年度版
- 内閣府 (2012) 障害者に関する世論調査
- 仲澤眞 (2002) スポーツ・ボランティア活用の現状と課題 体育の科学 52 (4) 266-269
- 生川善雄 (1995) 精神遅滞児 (者) に対する健常者の態度に関する多次元的研究—態度と接触経験・性・知識との関係— 特殊教育学研究 32 (4) 11-19
- 野村一路 (2002) 障害者スポーツにおけるボランティア～長野パラリンピックを通して～ 体育の科学 52 (4) 299-303
- 野村恭代 (2012) 精神障害者施設における施設コンフリクトの実態 社会福祉学 53 (3) 70-81
- 能村藤一 (1998) 知的障害者スポーツの現状と課題 臨床スポーツ医学 15 (2) 149-153
- 於保真理 (2004) 10 代の知的障害児の余暇活動に関する研究—172 人の親からのアンケート調査を中心に— 湘北紀要 25 15-21
- 岡本かおり・谷口清 (2009) スクールカウンセラー活動の継続を支える要因—M-GTA を用いた七的研究— 人間科学研究 31 161-172
- Omoto,A.M. Snyder,M. Martino,Steven (2000) Volunteerism and the Life Course: Investigating Age-Related Agendas for Action. *Basic and Applied Social Psychology*. 22(3) 181-197
- 大橋幸 (1962) リーダーシップ 青井和夫・綿貫譲治・大橋幸 集団・組織・リーダーシップ 培風館 301-439
- 大山祐太・増田貴人 (2016) スポーツ系コース在籍学生の障害者との接触意欲とスポーツ実施困難についての認識 弘前大学教育学部紀要 115 (1) 89-95
- 桜井政成 (2007) ボランティアマネジメント—自発的行為の組織化戦略— ミネルヴァ書房 京都
- 桜井政成 (2005) ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異 ノンプロフィット・レビュー 5 (2) 103-113
- 桜井政成 (2004) 公的・非営利組織の人的資源マネジメント戦略：病院組織におけるボランティア導入戦略の分析 政策科学 12 (1) 47-58
- 桜井政成 (2002) 複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析：京都市域のボランティアを対象とした調査より ノンプロフィット・レビュー 2 (2) 111-130
- Selznick, P. (1957) *Leadership in Administration*, Harper & Row Public. (北野利信訳『組織とリーダーシップ』ダイヤモンド社, 1963 年)
- 妹尾香織 (2003) 援助成果経験状況の予備的検討—若者の援助成果経験の事例— 関西大学大学院人間科学：社会学心理学研究 59 205-219
- 妹尾香織・高木修 (2003) 援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアにみられる援助成果 社会学・心理学研究 18 (2) 106-118
- 妹尾香織 (2008) 若者におけるボランティア活動とその経験効果 花園大学社会福祉学部研究紀要 16 35-42

- 塩野 敬祐 (2014) 「まちづくり」に関するボランティア理論：人間性豊かな「まち」を指して 淑徳短期大学研究紀要 53 15-38
- SoHyun Lee, SunYoung Yoo, SunHi Bak (2003) Characteristics of Friendships Between Children with and without Mild Disabilities. *Education and Training in Developmental Disabilities*, 38 (2), 157-66.
- Smith, D.H. (1994) : Determinants of Voluntary Association Participation and Volunteering: A Literature Review. *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, 23 : 243-263
- Smith, D.H. (1981) Altruism, volunteers, and volunteerism" *Journal of volunteer action research*, 10(1), 21-36
- Special Olympics, Inc. (2001) Promoting Health for Persons with Mental Retardation —A Critical Journey Barely Begun
- スペシャルオリンピックス日本 (2006) ゼネラルオリエンテーション標準テキスト
- 陶山哲夫 (2006) 障害者スポーツの最近の動向 理学療法学研究 21 (1) 99-106
- 田引俊和 (2005) 知的障害者のスポーツ活動を支えるボランティアの参加動機に関する研究 医療福祉研究 1 85-93
- 田引俊和 (2008) 障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究 医療福祉研究 4 98-107
- 高畑庄蔵・武蔵博文 (1997) 知的障害者の食生活・運動・スポーツ等の現状についての調査研究—本人・保護者のニーズの分析による地域生活支援のあり方— 発達障害研究 19 (3) 235-244
- 高見栄喜・小林英輝・岡英世・北山淳・長谷川昌士・井上由里・成瀬進・里内靖和・宮崎純弥・沖田任弘・原エリ・堀勝彦 (2008) 障害者スポーツイベントにおける学生ボランティアの満足度に関する研究 関西総合リハビリテーション専門学校紀要 1 5-10
- 田中浩司 (2010) 年長クラスにおける鬼ごっこの指導プロセス—M-GTA を用いた保育者へのインタビューデータの分析— 教育心理学研究 58 212-223
- Thomas, S.A. Foreman, P.E. & Remenyi, A.G. (1985) The effects of previous contact with physical disability upon Australian children's attitudes toward people with physical disabilities. *International journal of rehabilitation research*, 8(1), 69-70
- 土屋美穂・山西哲郎・中下富子・横尾尚史 (2004) 知的障害児における代謝と肥満と運動 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編 39 115-124
- Öie Umb-Carlsson and Karin Sonnander (2006) Comparison of Reports by Relatives and Staff on Living Conditions of Adults With Intellectual Disabilities. *Mental Retardation*, 44, 2 : 120-127
- 薄羽哲哉 (2006) リーダーシップ—フォロワーから見たリーダーシップ— 横浜国際社会学研究 10 (6) 135-156

- 渡邊浩美 (2006) 障害者スポーツの社会的可能性 21 世紀社会デザイン研究 5  
135-144
- Weiss, M. Sisley, B.L. (1984) Where Have All the Coaches Gone? *Sociology of sport journal*,  
1, 332-347
- Winnick, J.P. (1992) Early Movement Experiences and Development: Habilitation and  
Remediation 小林芳文・永松裕希・七木田敦・宮原資英 (訳) 子どもの発達と運動教育  
—ムーブメント活動による発達促進と障害児の体育— 大修館書店 186-216
- Winniford, J.C. Carpenter, D.S. Grider, C. (1997) Motivations of College Student  
Volunteers: A Review. *NASAPA Journal*, 34(2), 134-146
- 谷田勇人 (2001) 福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析 社会福祉学 41 (2)  
83-93
- 山田信子 (1990) 精神遅滞者の余暇の実態とよりよいあり方について 情緒障害教育研  
究紀要 9 111-114
- 山田力也 (2007) 障害者スポーツボランティア活動者の意識変容と役割構造に関する研  
究 永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要 37 11-18
- 安井友康 (1998) 障害者の冬季身体活動に関する研究—障害者歩くスキー大会参加者の調  
査から— 年報いわみざわ 19 57-65
- 安井友康 (2004) 車いすバスケットボールの交流体験が障害のイメージに与える影響 障  
害者スポーツ科学 2 (1) 25-30
- 吉田忠彦・桜井政成 (2004) 戦略的人的資源管理論アプローチによる NPO のボランティ  
アマネジメント 生駒経済論叢 1 (3) 97-109
- 全国社会福祉協議会 (2010) 全国ボランティア活動実態調査報告書